

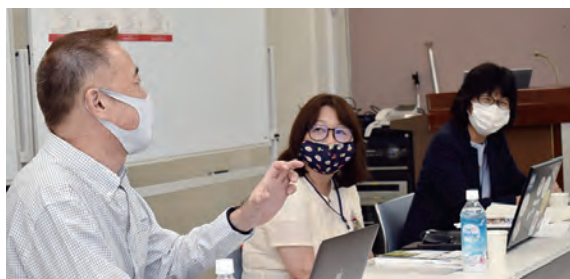
港北つなぎ塾



新型コロナ時代の
きずなづくり



2020年10月～2021年2月「つなぎ塾トーク」記録集



地域コミュニケーションの新たなあり方を探った23人



港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク」記録集 目次



第1回：樽町のみなさん

コロナ禍で変化が迫られた地域活動の現状とは

————— 2 ページ



第2回：菊名北町の今

大規模町内会での広報・情報共有のあり方とは

————— 17 ページ



第3回：高田のみなさん

人生かけた地域への愛情、災禍は変化の契機に

————— 27 ページ



第4回：子育て支援・教育現場のみなさん

新型コロナ禍でも子育て・学びは止められない

————— 39 ページ



第5回：シニアの地域活動支援を行うみなさん

やればできるIT活用、連携と工夫で活動を前進

————— 53 ページ



第6回：地域ビジネスに携わるみなさん

新型コロナ禍での気づき、身近な地域の大切さ

————— 67 ページ



第7回：地域の魅力発信に携わるみなさん

地域をつなげる場づくり、IT活用イベントも

————— 86 ページ

◆「港北つなぎ塾」の振り返り：114 ページ／新型コロナ禍、この1年：119 ページ／過去の開催一覧：裏表紙

はじめに

地域づくり大学校・港北区版「港北つなぎ塾」は、さまざまな課題に地域で取り組む人を増やし、応援し、相互の交流によりステップアップを図る**実践的な学習の場**として開催しています。

港北区では、区役所と「横浜日吉新聞」「新横浜新聞」をインターネットで運営している（一社）地域インターネット新聞社との協働で「緩やかなつながりが地域を楽しくする」をモットーに、地域の情報発信に着目し、**2018（平成30）年度**は「スマホから始める新たな『地域づくり』」をテーマに3回連続講座、**2019（令和元）年度**は「ワクワクした情報発信でつながろう」と題し、5つの分野でのワークショップを3回連続で開催しました。

3年目の2020（令和2）年度はさらにステップアップした「港北つなぎ塾」を……という企画段階で想定外の新型コロナウイルス禍。

例年、名刺の交換からはじまる**対面でのリアルな「港北つなぎ塾」の開催は困難と判断**しました。

そこで2020年度「港北つなぎ塾」の内容は、新型コロナウイルス感染拡大を防止するための緊急事態宣言下における「三密回避」、外出自粛行動など制約の中で取組を行った港北区内の**地域活動・市民活動の事例から今後の取組のヒント**を学び、ウィズコロナ時代のコミュニケーションづくりの提案を発信することをめざすこととしました。

具体的には「**新型コロナウイルス時代のきずなづくり**」をテーマに、前年に引き続き5つの分野（①自治会・町内会・地域団体、②子育て・教育、③シニアの地域活動支援、④ビジネス・起業、⑤港北区の魅力発信）ごとに区内の地域で実際に活動されている方々のインタビューや座談会を「つなぎ塾トーク」としてまとめ、全7回を「港北つなぎ塾」特設ホームページ上で公表し、区民のみなさんから質問やご意見をいただく形での情報交流をすすめました。

事業が進む中で、紙ベースでの提供を求める声や、区内の新型コロナ禍の記録保存をとの声もあり、「つなぎ塾トーク」に登場いただいた23人の方々からも協力を得て、**ホームページでの掲載内容と主催者による振り返り**を加え、冊子としてまとめることとしました。

より多くの区民のみなさまにお読みいただき**地域でのより充実した活動のヒント**になれば幸いです。

また、この冊子の内容に対する共感、ご意見、取組事例などをお寄せいただくことで、次なる活動交流へつなげてまいります。

2021（令和3）年3月

港北区役所 地域振興課
一般社団法人 地域インターネット新聞社

港北つなぎ塾

検索

港北つなぎ塾の公式サイトでは最新情報を発信中です。あわせてご覧ください



つなぎ塾トーク

第1回～第3回の開催内容

どうする、地域活動(自治会・町内会・地域団体のみなさん)

コロナで活動休止危機、IT活用で「地域活動」をどう行うか

～樽町・菊名北町・高田の事例～

2020年2・3月からの新型コロナウイルスの影響で、総会、班長会などのミーティングも書面による開催や縮小、休止、まちの清掃活動や夏まつり等の行事もほとんどが中止の状況です。

コロナ禍以前も、「役員のなり手が少ない」「会員の高齢化」「特定の会員しか運営、行事にかかわらない」など自治会町内会関係者の声があるなかで、自治会町内会が「どんな活動をしているのかわからない」といった若い世代の住民の声も聞いていたこともあり、ますます自治会・町内会や地域団体の「紙に拠らない」インターネットなどITを用いた情報発信力が問われるようになりました。

地域の情報を伝え、共有する取り組みは重要であり、戸別配布、回覧、掲示板、ホームページなどで行われていますが、SNSの使用は、一部ツイッターやフェイスブックに限定されており、役員間の連絡手段としてはLINEなども活用されはじめています。

[今回の課題]

地域のかかわりは、身近な世間話から会議・打ち合わせ、行事の準備、反省会など顔と顔を合わせ、人と人が直接かかわりあうことによるコミュニケーションづくりが基本ですが、「密」を避ける日常的な連絡手段としてのITの活用の必要性が叫ばれるようになってきています。

早くからITを活用した地域情報の発信をしている自治会・町内会の方から、これまでの活動成果、新型コロナウイルス対策、今後のコミュニケーションのあり方や展望についてお話を伺い、これからの自治会・町内会・地域団体における情報発信や連絡手段の理想的な在り方を提案します。

つなぎ塾トーク<第1回：樽町のみなさん>

コロナ禍で変化が迫られた地域活動の現状とは

つなぎ塾トークの第1回は、工場跡地のマンション化などで人口流入が続いている樽町地域からスタート。インターネットを積極的に活用して情報共有・発信を図っている樽町連合町内会を訪ね、町内会・自治会や地区の社会福祉協議会、子育て、高齢者支援などで活躍する方々に話を聞きました。

会場は樽町2丁目の新幹線高架近くにある琵琶畑（びわはた）自治会の「琵琶畑会館」。樽地区の伝統ある古い地名を冠した集会所に集まっていたのは次の4人の方々です。

(2020年9月8日開催)



<お話を聞いた方々>

- 小泉 亨さん: 樽町連合町内会会長、「パークシティ綱島」自治会長
- 奈良 隆一さん: 樽町連合町内会副会長、琵琶畑自治会会長、樽地区社会福祉協議会副会長
- 横溝 和子さん: 親と子のつどいの広場「ひだまり」(樽町1丁目)代表・施設長
- 横溝 憲正さん: 「ひっとプラン港北」樽町地区推進委員会「情報グループ」リーダー

<司会・構成>

- 港北区役所地域振興課 地域力推進担当
- 一般社団法人地域インターネット新聞社(横浜日吉新聞・新横浜新聞)
- 写真: 横浜日吉新聞・新横浜新聞撮影

1. 地域活動における「広報」の現状とは

自ら行事に参加しながら写真を撮っています

<司会>

本日はありがとうございます。まずは、各団体における“新型コロナ前”の情報伝達の方法（広報手段）から教えてください



第1回「つなぎ塾トーク」の様子

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

樽町地域で活動する9つの町内会・自治会で組織した「連合町内会」や、地区社会福祉協議会（地区社協）などでは、合同で「ひっとプラン港北」樽町地区推進委員会に「情報グループ」という情報発信の担当者グループを設けており、そのメンバーが7~8人います。

樽町ではイベントが年に10数回あるのですが、「情報グループ」で運営するホームページ「思あいのまち樽町」を通じて、写真と文章で様子を伝えるようにしています。

ホームページでは「今度、イベントがありますよ」という告知を行うとともに、開催後には「このような様子でした」と伝えることで、そのイベントに参加したことがない人にも「次は行ってみようかな」という思いになっていただければ。

地域のイベントというのは、内容などが毎年同じになってしまうので、「1年くらいレポートをしたらネタ切れになるかも」とも思っていたのですが、「今年もイベントが開催され、この人が参加した」ということも記事としては重要なんだな、と感じています。

例えるなら「初詣」のニュースが毎年流れているのと同じかもしれません。

ただ、取材に行く担当の人は、なるべく同じ人ではないほうが新鮮なことを書けることがあるので、そういった工夫はしています。

<横溝憲正さん:「情報グループ」リーダー>

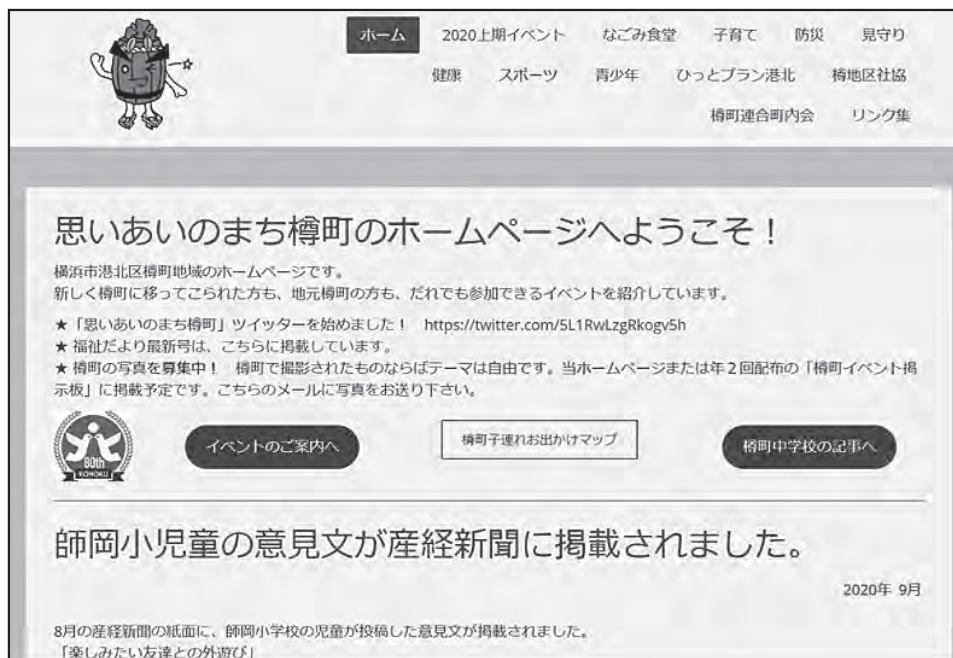
樽町町内会（樽町1丁目の多くと2丁目の一部、3・4丁目の全域がエリアの町内会）で役員を務めていまして、同時に「消防団」にも入っており、さらに民生委員・児童委員の改選時にやっていただける人が見つからないということで、現在は兼務しています。

「情報グループ」の役割ですが、樽町の行事には、自ら参加しながら取材しています。今年はコロナ禍で開催自体ができていませんが、「ペタンク大会」とか「グランドゴルフ大会」といった大会に町内会のチームで出場しつつ、取材もということで、自分が試合に出ていないときに写真を撮って、記事にするということをやっていました。

自分の場合は、文章を書くことが苦手なので、写真を多く撮って、それをずらっと載せてしまうパターンが多いですね。これは良い面と悪い面があると思っていますが……。

今年度から小泉亨さんが樽町連合町内会の会長になられたのを機に、「情報グループ」の取りまとめという役割をいただいて、最初は荷が重くなって思っていたんですけど、全体で盛り上げ皆さんにご協力をいただいています。ただ、今年は新型コロナの影響でイベントができないため情報発信が滞っている面はあります。

ホームページに何も記事がないのはちょっとつまらないな、ということで、ちょうど毎月2回連合町内会で「防犯パトロール」を実施していますので、その様子を久々に記事としてホームページにあげました。



樽町連合町内会と樽地区社協が共同で運営するホームページ「思い出のまち樽町」

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

樽町での情報発信面は、小泉会長に話していただいたことが大半ですが、そのほかに共有アルバムをクラウド上（インターネット上）につくり、そこに活動した写真などを載せています。

他の機関や区役所などから「こういうことで使いたいの、いい写真ありますか」と問い合わせがあった際には、そこからイベント毎に写真データ取り出してきて、写っている人の許可をもらって、区役所に使ってもらうとか社協さんに使ってもらうとか、そういう部分での広報活動もあります。

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

区の子育て支援の場である「親と子のつどいの広場ひだまり」（樽町1丁目）で代表をしており、地域と若い世代をつなぐような中間的な立場、と自分では思っております。

「ひだまり」の活動における告知では、「紙」媒体のものは、町内会・自治会の会長さんたちの集まりの時に出席させていただいているので、そこで掲示板への掲示をお願いしています。

緊急性の高い場合は、樽町のホームページに掲載していただくこともあり、大変助かっています。

また、「ひだまり」広報面ではホームページをはじめ、SNS「フェイスブック（Facebook）」やLINEもあるのですが、フェイスブックのほうに時々発信すると、若いお母さんたちが見てくれるようです。それを見て来てくれる人が結構増えているように思いました。



小泉さん(左)と横溝憲正さん

2. 「コロナ禍」で連絡・広報体制をどうしたか

年度替わり時の“コロナ禍”、駐輪場で短時間会議も

<司会>

今年の3月以降、新型コロナウイルスの感染拡大にともなって、団体や組織内での連絡や広報体制はどう変わりましたか

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

今年4月から樽町連合町内会の会長を務めさせていただくにあたって、通信アプリ「LINE（ライン）」で連絡を取り合える「LINEグループ」を役員のみなさんにつくっていただきました。

連合町内会を組織する9町内会・自治会のうち、最初はスマートフォン（スマホ）を持っていない方が3人くらいいましたが、皆さんが購入してくれました。

それまでは電話での連絡網があったのですが、今は全員がLINEのメッセージを通じて連絡を取れる状態です。

その時にもう一点お願いしたのが「ペーパーレスにしたい」ということです。連合町内会の打ち合わせ時に「紙」をコピーして準備するのも大変ですし、私も紙がたまっちゃうのは困るとの思いがありました。

今、連合町内会の会議ではプロジェクターとスクリーンを置き、できる限りペーパーレスで運営しています。

資料はすべて「Google（グーグル）ドライブ」（無料で使えるデータ保存サービス）に置いてあり、そこへアクセスすれば書類が閲覧できます。最近では連合町内会でも若い方は2人くらいがパソコン持参するようになりました。



横溝和子さん(左)と奈良さん

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

ただ、パソコンやスマートフォンに慣れない方もいるので、紙媒体はまだ必要という面もあります。連合町内会に参加している会長間ではペーパーレスでできちゃうのだけど、自分の町内会・自治会に戻って発表するときには、どうしても紙じゃないと、という方もいます。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

私は、自分が所属する「パークシティ網島自治会」でもプロジェクターで投影して会議を行っています。議事録も翌日発行されるようにしており、皆さんがメモして持ち帰らなくても良い、という形にしています。

<司会>

先ほど、「Google（グーグル）ドライブ」で書類データを共有しているという話がありました。が、ID やパスワードはどうしているのですか？

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

連合町内会の「LINE グループ」に入っている会長間では共有しています。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

基本的に各会長が伝えるべきと判断した情報は、全てオープンにして良いと思っています。

例えば、連合町内会でこういうことが決まったよ、ということをお自分のところにリンクを送ると、その場でリアルタイムに「何月何日にペタンク大会やるんだ」とみんなにすぐ伝わるという形がいいですね。

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

連絡体制ですが、親と子のつどいの広場「ひだまり」でも、スタッフ全員に通じる「LINE」と、三役だけに通じる「LINE」と2つのグループをつくって、必要に応じてどちらかに発信しています。

港北区には「親と子のつどいの広場」が6カ所あり、同じく区内の子育て支援施設の「どろっぷ」(大倉山)と「どろっぷサテライト」(綱島東)との集まりが年に3回くらい行っているのですが、新型コロナの影響で区役所の会議室が使えなくなり、みんなでオンライン会議システムの「Zoom(ズーム)」を使って会議を行いました。

<司会>

LINEなどで連絡が取れていたとはいえ、4月から5月にかけての「緊急事態宣言」時は年度替わりもあって大変だったのではないですか

<横溝憲正さん:「情報グループ」リーダー>

緊急事態宣言中に定例会は行わなかったのですが、年度末と年初にあたる3月と4月は、町内会では総会や準備のシーズンにあたります。

多くの人を集めた形での総会ができなくなった一方、何らかの形で議決や承認は得なければなりません。いつも以上に段取りを踏まなければならないと、町内会内部では必要以上にせわしなかったことが思い出されます。

民生委員の集まりは月に1回ですが、非常事態宣言の期間は休止、その間でも、短時間だけ駐輪場に集まって話し合ったこともありましたね。今は再開しました。



「樽町連合町内会」は9つの町内会・自治会で構成されている(「思いあいのまち樽町」より)

3. 「コロナ禍」で最も有効だった連絡手段

外出しづらい状況では「LINE」での連絡が便利でした

<司会>

今年の春先には、「緊急事態宣言」も含め外出がままならない状況となりましたが、振り返ってみて一番有効だった連絡手段は何でしたか

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

やっぱり「LINE」ですね。メールだとどうしても埋もれてしまうんですよね。

<横溝憲正さん:地区社協理事、民生委員・児童委員>

港北消防団では、火災発生時などは「携帯メール」で情報が配信されます。樽町の消防団内の「LINE」グループもありますが、私は“ガラケー”（スマートフォンではない携帯電話＝「ガラパゴス携帯」の略語）なので……。

高齢者の見守り活動においては、今年は実際に会うことができない状況なので、すべて電話で連絡しています。

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

メールは以前から使っており、9つの町内会・自治会の会長さんはLINEやメールでやりとりができます。

連合町内会長の会議は月に1回ですが、その間に「防犯灯の申請をしました」とか、「お金がいくらいくらで」とか、そういったことをその都度「LINEグループ」で流しています。会議へ参加するまでに分かってしまうので、早いですよ。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

全員に流さなくていいものでも、LINEグループ全員に流していますよね（笑）。これはオープンで良いことだと思っています。

私も港北区連合町内会の定例会（区内の13地域から代表者＝会長が集まる会合）での議事や決まったことなどは、終わった瞬間にLINEグループで流すようにしています。持ち帰りたくないんです。仕事をまた別の時間にまた設定しなければならないから。

資料は「その日、できればペーパーレスにするためにも、会議の前までにホームページに上げてほしい」（※1）と要望しています。そのほうが議論も深まるし、情報共有が早まります。

（※1）港北区役所の担当より：昨年度中（平成31年度＝2019年度）中から、区連会資料は基本的に会議の当日中に掲載しています」とのこと

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

私たちも、必要なことがあれば「LINE グループ」で意見を述べてもらうようにしています。そうすれば一つのフロアで話し合いをしているような感じになりますし、「皆様のご意見を聞かせてください」と投げかけたら、それなりの数の返事が返ってきます。

「LINE グループ」を確立したのは、ここ1、2年のこと。それまでは、月1回のミーティングでその都度発信すればよかったのですが、こういう外出しづらい状況になったときに、やはり必要だな、ということで積極的にLINE を活用しています。

<司会>

地域においては現在も「FAX」が有効な連絡手段の一つとなっている面がありますが、みなさんの活用状況はどうか

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

今はスマートフォン（スマホ）や携帯電話が中心で、固定電話をお持ちでない方も多いため、あまり使いません。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

私も FAX 機器がないので、書類を送る時にはスマホで写真を撮って、PDF 化してメールで送ることがありますね。

4. 「コロナ禍」でイベントの中止などの広報連絡

「掲示・回覧」は数が多く大変、ホームページで告知も

<司会>

今回の「コロナ禍」により、準備してきたイベントなどを急きょ中止や延期せざるを得ないケースが多かったかと思いますが、どのように告知や連絡を行ってきたのでしょうか



新型コロナ禍で掲示物は少なくなった(琵琶畑自治会)

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

イベント中止の連絡ですが、「掲示・回覧」については、会長会議にうまく間に合えば、印刷物で会長さんに渡して掲示をお願いしています。同時にホームページでもお知らせを載せます。

<横溝憲正さん:「情報グループ」リーダー>

私が所属している「樽町町内会」では、掲示板が51カ所あり、回覧板は122個必要です。

新型コロナの影響で回覧板を控えるということはなかったのですが、団体や役所から回覧依頼として来るお知らせ文などの枚数が少なく、振り分けするという面では普段より楽でした。

ただ、普段は多い時は役所関係からくるだけで10点くらい、掲示板してくださいとか、それ以外に回覧とかがあって、なかなか掲示板には貼り切れなし、仕分けるのもすごい大変。それを主にやっているのが私達なものですから……。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

「デジタル掲示板」が早く実現できるといいですね。紙は送られてこないで、自然に掲示されているというような。

5. コロナ禍で「見守り活動」はどうしたのか

外出自粛で見守りできず、電話をかけ続けた3月

<司会>

今回のコロナ禍で外出が難しい状況となったなか、高齢者の方の見守り活動などはどのように行っていたのですか



今回の「つなぎ塾トーク」で会場となった
琵琶畑会館

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

樽町は連合町内会で「防犯活動」を行っていますが、「高齢者の見守り活動」は民生委員のみなさんが担当しています。

<横溝憲正さん:「情報グループ」リーダー>

民生委員として、基本的には対象者の方とは月に1回面会をしているのですが、「緊急事態宣言」(4月~5月)が出された前後は、会うことが難しくなったので、3月くらいからずっと電話をかけ続けていました。

実際に会う場合でも、高齢者の方は医療機関へ行ったり、デイサービスへ行ったりというケースも多く、なかなか会えないことがあります。先日、いつもは家にいらっしゃる方がなかなか出ないので、ケアマネージャーさんに確認したら「昨日も来ていたから大丈夫ですよ」と教えてくれたので、安心できましたが、デイサービスなどを利用していない方のなかには、今回のコロナ禍で体調が悪くなり、ずっと入院し連絡が取れずに大変だったというケースもありました。

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

その方と買物時にばったり会ったりとか、どこかへ出かける時に偶然見かけたりとか、そういう形になれば元気にしていることが分かって良いのですけど。

以前、連絡しても出てくれなかった高齢の男性の方がいたのですが、たまたま外で植木を手入れしている姿を見かけ、声をかけることができた、ということがありました。

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

日常の見守り活動は、民生委員さん中心にやっていますが、これに加えて、災害時に要支援者を見守るといった活動も必要となっていて、ここは自治会が担当しようということになっていて、研修会も行っています。

また、この会館(琵琶畑会館)では、非常時の電源やトイレ、間仕切りなどを購入して備えていて、いざという時には、ここから少し遠い「樽町中学校」まで避難が難しい要支援者のために、まずはここに避難してもらおうという準備もしています。

昨年2019年10月の「台風19号」の時も、高齢の要支援の方のなかに2人、避難所まで行くのが難しいという方がいました。水害(台風)の避難所は、地震の場合とは異なりますので、区役所に聞くと、避難先は綱島地区センターか大曾根会館(大曾根2丁目)だということで、確かに少し遠い。そこで、お二人を綱島地区センターへ送って、翌日は朝早く迎えに行くということもしました。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

災害対策という面では、樽町連合町内会では大型商業施設の「トレッサ横浜」(師岡町)さんと災害時の協力協定を結ぶ予定です(※つなぎ塾トーク第7回参照)。トレッサ横浜さんにお声がけしたところ、快く受けていただけました。

また、トレッサ横浜さんで言いますと、今年（2020年）の春には、南棟3階のスペースを使わせていただき、師岡と樽町の地区社協が協力して学童保育施設が立ち上がっています。

ちょうど新型コロナで大変な時期だったのですが、当初から「LINE」を活用し、保護者の方とやりとりしました。保護者会などもオンライン会議システム「Zoom（ズーム）」での参加も可能としています。

6. 「コロナ禍」を踏まえ、今後の体制をどうするか

出産後に外出できずつらい思い、支援の再開に涙を流す人も

<司会>

新型コロナウイルスの影響は今も続いています。今後の体制や行事などはどうしていきますか



樽町しょうぶ公園で毎年行っている
「移動動物園」(2019年11月)

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

これから9月下旬に行う「防災訓練」は重要なため、中止することはできないので、縮小して開きます。

今回発行する紙の広報紙「イベント掲示板」では、イベントがほとんどないので、「樽町の防災について」という内容で発行しようと思っています。

<奈良隆一さん:連合町内会副会長、地区社協副会長>

先日、地区社協では、港北区各地区の会長が顔を合わせる会議があり、会長の代理で出席させていただいたのですが、みなさんから聞こえてきたのは、「活動は停滞してしまっていてできない」「こんな状況で中止、中止」との話が多かったですね。

樽町連合町内会ではなく私達の琵琶畑自治会ですが、役員が40人ほどいますので「密」になる為に役員会が開催できません。

それで、「三役会」として会長や副会長など4人で集まって話し合うことが多いのですが、ここで審議（話し合い）はできても、役員のみなさん全員とは話し合えないので決議（最終決定）までもっていくのは非常に難しいものがあります。

そこで三役会を拡大して役員や班長に何人か入ってもらう形にして、なるべく審議を長引かせず、決議まで持っていく体制にしようと話し合っているところです。

<横溝憲正さん:「情報グループ」リーダー>

私の所属する「樽町町内会」では、役員会は行っていますが、各地域の組長（班長）さんを含めると70人以上いますので、掲示板や回覧用の紙を順次手渡すという形でのみ集まっています。

<小泉亨さん:樽町連合町内会会長>

私の所属する「パークシティ綱島自治会」では、役員が8人ですので、実際に集まって会議を開いています。本当は、オンライン会議システム「Zoom（ズーム）」を使って開催したいのですが、役員は同じマンションの住民であり、そこに集会室もある環境です。Zoomだと逆に手間になってしまいそうなので、集まってもらっています。

ただ、新型コロナウイルスの影響でマンションの集会室が使えない期間があり、会議を開けない時期もありました。現在は使うことができるようになりましたが、マンション居住者のみの環境は今も続いています。



樽町地域ケアプラザ

<横溝和子さん:親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

さまざまな活動が停滞していますが、樽町でも同様です。高齢の方を対象とした「わかば会」という30年続いた会がありますが、今年度は中止となってしまいました。

奈良さんが代表として開催されている「なごみ食堂」（三世代の皆さんに、樽町ケアプラザで定期的にカレーライスなどを提供する企画）が中止。また、手作りお菓子とお茶を提供する三世代交流「みんなのキッチン」も今年度は中止です。子育てサロン「ちびたる」も中止となっています。

私自身が携わっている、障害者のセーフティネット分科会の中に「白梅会（しらうめかい）」（港北区社会福祉協議会の分科会活動）があります。会議に参加したご縁で、2007年から障害者の方に食事サービスを行ってきましたが、今年は4月以降は開催できずにいました。

会場として使っている「樽町地域ケアプラザ」の調理室は5人まで、多目的ホールも20人までしか入れないという限定的な状況でも、どうにかして開けないかと模索していたところ、その場で食事を調理するのではなく、「お弁当」の形で用意することを思いつき、7月から再開にこぎつけました。

25食分のお弁当箱や箸、みそ汁用のカップなどを新たに購入し、ケアプラザでは調理器具のみをお借りする形で開いたところ非常に好評で、スタッフとしてすごく嬉しく思っているところです。

親と子のつどいの広場「ひだまり」のほうは、6月から再開しましたが、新型コロナ対策上の縛りが厳しく、最初は午前3組、午後3組という感じでした。現在は午前・午後とも4組まで電話予約で承っています。利用者さんには検温・手洗い・うがいの励行、ひだまりとしては、おもちゃの消毒や室内の消毒・換気には特に注意をしています。

お母さんのなかには、里帰り出産でこちらへ戻ってきたらすぐにコロナ禍となり、まったく外出ができなくて、本当にすごくつらくて寂しい思いをしていたという方がいらっしゃいました。

そんななか、6月によく「赤ちゃん訪問」（生後4カ月までの子どもがいる家庭に民生委員・児童委員などの子育て経験者が訪問する港北区の「こんにちは赤ちゃん訪問事業」）が再開し、その際「ひだまり」を紹介してくださっているようで、来所されて「すごくうれしいです」と言いながら涙ぐんでいた方がいました。とても印象的で、「やっつけてよかったな」って思いました。

<司会>

子育てはコロナ禍でも「24時間365日」休めないだけに、子育て支援という面で課題もあったかと思います

<横溝和子さん：親と子のつどいの広場「ひだまり」代表>

もう少しお話をさせていただきますと、子育て支援という面では、港北区の「赤ちゃん会」（0歳児地域育児教室、樽町地域ケアプラザなど区内20カ所以上に会場設定）も再開したのですが、人数制限があり、予約しようにも「何回電話しても赤ちゃん会に参加ができない」（※：下記補足あり）というお話を聞きます。

（※）港北区役所の担当より：「赤ちゃん会の申し込みは、港北区ホームページの赤ちゃん会会場一覧から、電子申請によりお申込みいただいております」とのこと

これは区役所に現状を伝えなければいけないと思って、二度目の参加となる方は初参加の人に譲るなど、平等性が保てるよう調整ができないかと要望しています。

お母さんたちにとって、「役所に何かを言う」という行動自体がすごくハードルが高く、担当の保健師さんにも電話しづらいということをよく耳にします。

お母さんたちには、「ハードルが高いなんて思わないで、自分が言いたいことは直接言えないとだめよ。言えない分は私たちが頑張って伝えるから」とアドバイスはしています。

一方、横浜市外で赤ちゃんを産んで、2人目は横浜へ来て産んでも、第1子の0歳児と保護者を対象している「赤ちゃん会」には参加できないという現状もあり、そういった点は改善してほしいです。

それから、港北区では、初めてお母さんになる人を対象とした両親教室に参加した人に「にんしんお祝いグッズ」のプレゼントがあるのですが、お母さんにとっては、初めての子どもも二番目の子どもも区別ないじゃないですか。そこで区別をしてはいけないということ、声を大にして言いたいです。

子どもを持つお母さんとかかわっていますと、そのあたりをもうちょっと「優しい目」で見たいという思いがあります。

<司会>

本日はさまざまな声をお聞かせいただき、ありがとうございました。今回の第1回「つなぎ塾トーク」の内容は、広く共有していきたいと思えます

(「つなぎ塾トーク」第1回：開催日 2020年9月8日)

【参考情報】



メッセージアプリ「LINE(ライン)」はスマートフォンだけでなく、パソコン版もある
(LINEの公式サイトより)



つなぎ塾トーク<第2回：菊名北町の今>

大規模町内会での広報・情報共有のあり方とは

つなぎ塾トークの第2回は、ホームページや紙媒体を通じ、積極的な情報発信を行っている「菊名北町町内会」（約3000世帯加入）です。

菊名駅（東口）周辺の菊名4～7丁目をエリアとする同町内会で、2019（令和元）年度から会長をつとめる長井貞道さんに広報のあり方や、新型コロナ禍をうけての対応策などを伺いました。

（2020年9月15日開催）



<お話を聞いた方>

- **長井 貞道さん**: 菊名北町町内会会長

1. 「菊名北町」地域の現状とは

菊名駅周辺で相次ぐインフラ変化の動き

<司会>

本日はありがとうございます。長井さんは菊名で会社を立ち上げ、ご商売をされているんですね



菊名神社例大祭時の菊名駅東口の様子

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

もともと大阪市の出身ですが、会社員として東京へ来まして、その後に独立し、菊名で会社を営んでいます。

18年ほど前に菊名で家を持ち住み始めまして、近隣の方から「スポーツ推進委員」になってくれませんか、とのお話をいただいたことを機に地域で活動しています。「一人欠けるから誰かいないか」ということで話しが回ってきたのがきっかけでした。

地域活動の核となっている「町内会・自治会」の話をしますと、どこの町会も同じだと思いますが、高齢化という一つの課題があります。今から30年ほど前に各エリアの町内会・自治会が活性化し、当時40歳代くらいの方々が重要な役割を担ってきました。

その方たちが高齢となり、リタイヤされて中間層が空洞化しています。

また、活動を維持していくためには、先人に倣（なら）い、良い形で進んできたとは思いますが、世の中も変化しています。町内会や自治会は、残念ながら依然昔のままで動いているので、内容が変わっていない。ちょうど私は、その“中間系”で入っちゃったわけです。

スポーツ推進委員は、地区の会長も含めて計8年間にわたってつとめさせていただきました。その間に町内会の副会長をさせていただき、一昨年には会長となりました。

さきほど申し上げたように、私は菊名の生まれでなく、違う地域から来ています。なおかつ、菊名北町町内会の役員としては一番年が若かったので、若い人が会長になるのはどうなの、という話は当然ありました。

ただ、会長就任の1年半ほど前に、会長代理ということで「菊名北町盆踊り大会」（港北図書館前で毎夏開催）や、菊名神社の例大祭（毎年9月中～下旬開催）などの責任者にさせていただいたので、街の人には顔が見えていたのかもしれませんが。総会でも反対はありませんでした。

<司会>

2019（平成 31）年度に会長として選出された長井さんですが、町内会がエリアとしている「菊名北町」は菊名駅周辺という交通の重要地点であり、港北区の主要な市街地です。取り組まなくてはならない事柄も多いのではないのでしょうか

綱島街道の神奈川区方面から菊名四丁目交差点と「菊名歩道橋」を望む、見通しが良くない

（※）その後、交差点付近の家屋移転により見通しの悪さは改善された



<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

菊名駅の近くに旧綱島街道と綱島街道が交差する「菊名四丁目交差点」があるのですが、この交差点をどうしていこうか、という課題があります。

ここに古い歩道橋（菊名歩道橋＝1968・昭和 43 年設置）が設置されているのですが、当初は廃止される予定だったのが、今年春には残される方針に変わりました。

今でも駅方面へ往来する歩行者が多いうえ、小学生も通学で横断する交差点ですから、警察や行政と話し合っ安全対策を考え直さなければなりません。

それから、綱島街道沿いにあった菊名 4 丁目の「横浜市医師会看護専門学校」（菊名記念病院の隣接地）が 2018 年 3 月に鶴見区内へ移転したため、市有地の跡地活用の動向にも注視しています。

菊名北町の拠点防災は菊名小学校（菊名 5 丁目）となっているのですが、丘の上にあります。高齢者も多い街ですから、跡地にサブ避難所を確保できないかということ行政に要望し、検討を進めているところです。

その菊名小学校ですが、市が 1968（昭和 43）年に建てた校舎を建て替える方針を打ち出しており、具体化へ向けて地域でも意見を出していかなければならないでしょう。

このほか、消防団の積載車を収容する消防小屋と防災備蓄庫を新たに「菊名いちょうの広場」（菊名地区センター近くの広場）で整備を行っているところです。

インフラ面で街が変わり始める時期に当たってしまっ、そういう意味では会長職は大変ですね。

2. 地域活動における「広報」の現状とは

情報伝達の重要ツールはホームページに

< 司会 >

菊名北町町内会は、紙媒体やインターネットなど広報面に力を入れていますが、現状はどのようなになっていますか



年に4回発行している広報紙「菊名北町広報」(菊名北町町内会ホームページより)

< 長井貞道さん: 菊名北町町内会会長 >

広報紙「菊名北町広報」は毎年3・6・9・12月に発行しています。また、ホームページ上でも公開しています。

そのホームページは、昨年(2019年)秋に広報部メンバーの宮森さん、寺本さんを中心に町内会が独自で開設しました。

町内会からのタイムリーな情報発信手段としては、毎月1回「回覧板」で各家庭へまわしていくことと、街のなかにある「掲示板」に紙を掲出するというスタイルが一般的で、ほぼこの2種類しかありません。

しかし、自宅に回覧板が来ても、ハンコを捺すだけで見ない人が多く、掲示板も立ち止まらないという人が大半じゃないのかな、との思いがあります。

町内会活動では、情報伝達がかつとも大事です。これをどう実現させるかと考え、ホームページを開設したのですが、どうしても高齢の方には見ていただけません。

統計なんかを見ると、70歳以上の方もかなりの割合でパソコンを使っているというデータもありますけど、私の周辺では、スマホを持っていないという人が多いんですね。

そういうことは理解していながらも、情報伝達の重要ツールとしてはホームページしかない、というのが結論です。

<司会>

ホームページを使った情報発信の活発化をどう考えていますか

2019 年秋に菊名北町町内会が独自で
開設したホームページ



<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

私はホームページの役割は「町内会の情報」を流すことではなく、「防災の情報」や「街の情報」を発信することだと考えています。

このホームページに来れば、発災時はもちろん、地区センターやコミュニティハウス、学校、商店街といった情報がなんでも載っているという状態にすることがゴールで、「町内会の情報だけを流しても、誰も見に来てくれない」と言い続けています。

高齢者の方が見られない、という問題については、まずは若い人たちにってもらって、同居している両親に伝えてもらう。もしくは、近隣の方から伝達していただくコミュニティの輪が必要と思っています。そのためにも、基本的には若い方に見ていただけるような情報を発信していく必要があると思います。

「紙」の広報紙についても、ホームページと同じ方向で変えていこうと検討しています。町内会が何をやった、こんなことやっている、ということも一つの情報ですけども、それよりは、地域の情報が載っているというのが理想です。

今は年に4回、広報紙を出していますが、年に2回でもいいから、捨てられないような情報を載せなければいけないと感じています。

ただ、課題はホームページにせよ、広報紙にせよ、原稿が集まらないということです。箇条書きでもいいよ、と言っても出てこない。文章を書くのが苦手だという面もありますし、写真は顔が映ってしまうと、出せないといった側面もあります。

ホームページに点数を付けるとしたら今はまだ「20点」程度で、ようやく出来上がったなあ、というくらいです。

同じ菊名で妙蓮寺駅周辺をエリアとする「菊名南町」（菊名1～3丁目）もホームページを開設しているのですが、立派な内容ですごいな、と思っています。

3. 「コロナ禍」で連絡・広報体制をどうしたか

「予定通り」に実施できた行事が無い状態

<司会>

春以降の新型コロナ禍で、イベントなどの活動はどうなりましたか



菊名7丁目にある菊名北町の町内会館

<長井貞道さん: 菊名北町町内会会長>

菊名北町町内会では、予定通りに実施できた行事は無い、という状態です。少し落ち着きを見せている今なら実施してもいいのかもしれませんが、もし何かあったら、多くの方にご迷惑をかけてしまいます。子どもさんだけが参加するような行事でしたら検討の余地はありますが、ご高齢の方も多いのでなかなか難しい。

ただ、自粛しすぎたかな、という思いもありまして、どのタイミングかは分かりませんが、今期中（来年3月）までに何かを仕掛けたいという考えを持っており、密かに準備はしています。

防犯活動は、緊急事態宣言中は止めていましたが、今も毎週1回、町内会の防犯部の人たちが巡回してくれています。夏場は大変なので回数を減らしたのですが、犯罪の抑止力になるので、できるだけ活動を行っていただいています。

<司会>

新型コロナ禍を受け、町内会での会合や連絡体制、広報面はどうしていますか

<長井貞道さん: 菊名北町町内会会長>

町内会には理事が38人と人数が多いので、理事会は開けていませんが、毎月10日には町内会の集会所へ集ってもらい、検温をしたうえで配布物を手渡す、ということはしています。その際、役員だけ残って少人数で役員会を実施しているのが現状です。

連絡体制で言いますと、役員はほとんど電話で連絡していて、今でも“伝言ゲーム”状態ですね。理事さんのなかでは、メールで連絡を取れる人が少なく役員間でも同じ状況です。「LINE」(通信アプリ)を使うなんていう状況にはありません。

そんな現状なので、アナログですが、FAXで連絡を取ることにしたのですが、理事のみなさんにFAX番号を教えてください、とお願いしたのですが、回答があったのは数人です。電話番号を伝えたくない、FAXが無い人もいます。

簡単なことが一番ハードルが高いんじゃないかなと感じているところです。

広報面では、コロナ禍となり、ホームページを開設していたことは先手を打てたかな、と思います。

4. 「コロナ禍」を踏まえ、今後の体制をどうするか

行事や活動をすべて洗い出す作業を開始

<司会>

今回のコロナ禍では、さまざまな課題が見えたとのことですが。今後の町内会活動はどのように展開していくことを考えていますか

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

現在、運営している行事や活動をすべて洗い出し、運営方法などをあらためて考えているところです。

たとえば、夏の「菊名北町盆踊り大会」では、街の役員の人たちが太鼓を叩く「やぐら」を組んで、事前準備をすべて行っています。開催当日は、模擬店の手伝いもして、終わったら片付けて、全部やっているわけですよ。

今、1日に1000人以上が来場する大きな祭りになっているのですが、「これって我々がやる話なの？、もう街の盆踊りじゃないの？」という発想があってもいいんじゃないの、という部分から議論しています。

例えば、盆踊りや大型イベントは、町内会が単独で実施するのではなく、街で実行委員会をつくったり、スポンサーを集めたり、街全体で動く仕掛けをつくっていかなければならない段階かもしれません。

<司会>

街全体を巻き込めれば関係者が増え、担い手不足に対応できる道も開けますね

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

多くの町内会・自治会は、活動の歴史が長いだけに、ずっと昔から続けてきた活動のボリュームに、人口も増えて対応できなくなっています。

私たちがそうした問題意識から、行事や活動を全て「棚卸し」することによって、できることと、できないこと、実施するなら「こうすべきだ」ということの議論を始めたものです。

近隣の町内会長には、「もう、町会の垣根もなくてもいいんじゃないの」といった“ぶっちゃけ話”もしていますね。

たとえば、「子ども会」は町内会に紐づいているので、同じ学校内でも児童間で異なってしまいます。でも、子どもからしたら、同じ学校の友だちなので、線引きは関係ないですよ。我々大人が線引きしてしまっている。エリアの線引きをもう少し緩くしてもいいのではと思ったりします。



毎年 1000 人以上の来場者でにぎわう「菊名北町盆踊り大会」(写真は 2018 年)

<司会>

「子ども会」で言えば、港北区内でも担い手不足から、維持すること自体が難しくなっている町内会・自治会も出ています

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

役職に就いていただいた方は本当によく活動してくれるのですが、「来年もお願いできる？」という、「今年頑張ったんですよ、子どもがまだ小さいから難しい」という回答が一般的です。

何人かは役員として残ってくれることがあって、子ども会から町会に来てもらうケースもありますが、ほんの数人ですね。

根本的な課題と言えますが、町内会も子ども会も最大のネックは「ボランティア」でやっていることなんです。

たとえば、ホームページに質問が来たとしても、誰が答えるのか、毎日誰がチェックするのかということになります。専任の方がいないので、問い合わせフォームは設置できない。

昔だったら、町会事務所があれば「管理人さん」がいて、電話でも、訪ねてきても、「こうですよ」と答えた時代があったと思うのですが、今はそういう状況じゃありません。

5. 地域団体間の連携をどうするか

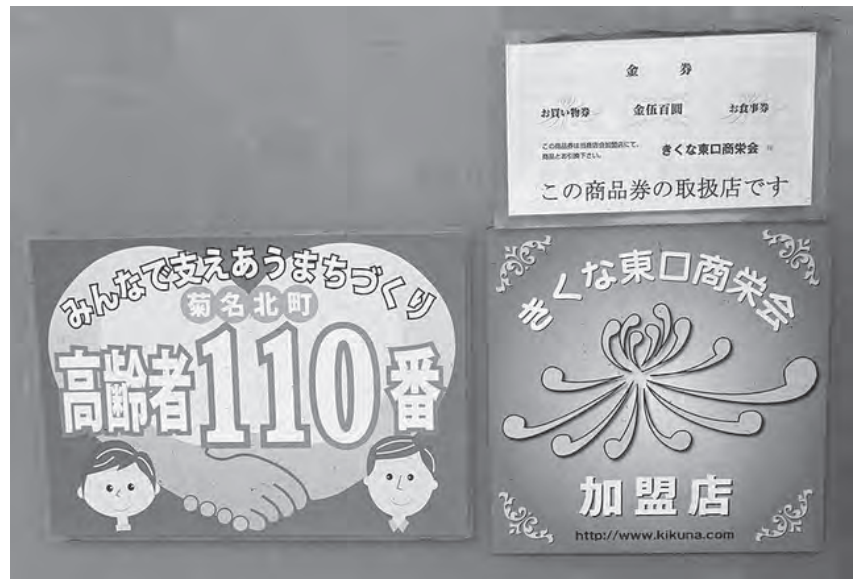
緊急事態にも対応できる情報連携が重要

<司会>

先ほど、「街全体の連携が重要」というお話がありましたが、商店街や子育て・高齢者支援の分野との連携はどうしていますか

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

商店街加盟マークのある店舗で使える
金券をお礼として渡すこともあるという



菊名の商店街（菊名東口商栄会、70 数軒加盟）と町内会は、見える形で連携しています。私も商店街のメンバーで、事務所の店頭にもステッカーを貼っています。

連携の一例を挙げると、町会委員の方に何かお手伝いしてもらったときに、商店街の「500 円金券」をお礼としてお渡ししています。普通のお礼より、菊名の街にお金が落ちていくような仕組みが良いのではないかと、という考え方です。

町内会エリアでは横浜銀行菊名支店さんや芝信用金庫菊名支店さん（いずれも菊名 6 丁目）、菊名ドライビングスクールさん（菊名 7 丁目）、アマノ株式会社さん（菊名駅西口の大豆戸町に本社を置く一部上場企業）などの企業の皆さんも、盆踊りなどの際などにご協力いただいているところです。今後は防災の面も議論していきたいですね。

大豆戸地域ケアプラザ（菊名駅西口から徒歩 8 分の大豆戸町）など地域交流施設とは、町内会の保健部さん、民生委員さんが認知症予防の「スリー A 体操」や高齢者対象の体操など、いろいろ市民活動で関わりがあります。

また、子育ての分野では、幼児の公園遊びや「読み聞かせ」を実施していただいています。

今年はコロナ禍で、菊名小学校 PTA の会長の方との懇談もできていない状態です。小学校関連では、情報共有の機会が少なく、子どもたちのこともあるので、考えていかなければなりませんね。

<司会>

行政（区役所など）との情報面での連携に課題があったとか

<長井貞道さん:菊名北町町内会会長>

昨年 2019 年 10 月に発生した「台風 19 号」では「菊名地区センター」（菊名 6 丁目、港北図書館と同じ建物）が「避難所」として使われたのですが、避難所としては菊名小学校が登録されており、地震が起きた時には町内会のメンバーが避難所に駆け付けて運営しますが、地区センターは避難所として認識されていない施設でした。

菊名小学校が避難所であるということは区の「防災マップ」にも書いてあるので、大雨のなか丘の上まで歩いて行ってみたら、「やっていません、地区センターです」ということになりかねない。

区役所のホームページでは、台風前後には避難所一覧の告知が載っていましたが、水害と地震では避難所が異なる、という情報は行政と町内会・自治会が日ごろから共有しなければなりません。



菊名北町町内会の掲示板、左下には資源回収を再開するとの告知も(2020年1月)

昨年(2019年)12月には、古新聞や古雑誌、段ボールといった資源ごみが突如回収できなくなったこともありました。

「資源集団回収」と言いまして、横浜市では資源ごみは、町内会・自治会などの地域団体が行政から委託を受け、地域団体側が回収業者に委託して処理しているのですが、事業者が急に事業を止めてしまったのです。

回収日の前日に「明日から行けません、中止の告知を貼ります」と連絡があったのですが、「こんな急に言われても、ごみを出すのは止められない」と慌てました。もし出された場合は回収できないままとなり、雨で汚れますし、放火も不安です。

われわれで町内をすべて回って回収し、そして、市の資源循環局に全て引き取っていただきました。2週間くらいかかって業者を選定していただきましたが、「告知を貼ってるんだからいいんじゃない」という問題ではありません。

やはり、こうした突発的な出来事の際、情報をどう発信し伝達していくかは非常に重要です。掲示板に貼って広く伝えるという方法は現実的に不可能で、ホームページを開設したのはこうした出来事がきっかけでした。

<司会>

本日は長時間にわたり、お話しいただきありがとうございました。菊名北町町内会は約 3000 世帯が加入されているということで、大規模町内会ならではのご苦労も多いかと思えます。今回のお話は区内で広く共有させていただきます。

(「つなぎ塾トーク」第 2 回：開催日 2020 年 9 月 15 日)



つなぎ塾トーク＜第3回：高田のみなさん＞

人生かけた地域への愛情、災禍は変化の契機に

つなぎ塾トークの第3回は、市営地下鉄グリーンライン・高田（たかた）駅の周辺に広がる「高田地区」を訪ねました。地域が主導する“居場所”づくりが盛んな地域で、今回の会場もその一つである「コミュニティカフェゆずの樹」（高田東3丁目）です。

高度経済成長期から自然の多く残る良好な戸建て住宅地として知られ、2008年の地下鉄開業後はより人気が高まる高田地区で、連合町内会と地区社会福祉協議会で役員をつとめる3人の方に話を伺いました。

(2020年9月16日開催)



＜お話を聞いた方々＞

- 宮田 寿雄(としお)さん: 高田町連合町内会会長、高田地区社会福祉協議会副会長、「高田町内会」会長
- 相澤 昇さん: 高田地区社会福祉協議会会長、「高田町親和会」顧問
- 石井 達也さん: 高田町連合町内会副会長、高田地区社会福祉協議会事務局長、「高田町住宅自治会」会長

1. 地元「高田」との関わりを振り返る

人生の半分はボランティアが“本業”に

<司会>

本日はありがとうございます。高田地区でさまざまな地域活動を行っている皆さんですが、どのような役割を担っておられるのでしょうか

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

高田の3つの地域（高田西・高田東・高田町）で活動する8つの町内会・自治会で組織された「高田町連合町内会」で2016（平成28）年4月から会長をつとめさせていただいております。

連合町内会を構成する8つの町内会・自治会のうち、「高田町町内会」（高田町と西・東の多くをエリアとする町内会）に所属し、会長をつとめています。

また、本日は「高田地区社会福祉協議会（地区社協）」の相澤昇会長にお越しいただいておりますが、その地区社協でも副会長をさせていただいているところです。

少し自己紹介をしますと、「だいたい私の年齢は、見た目よりも3つから5つ引いてください」と皆さんにお願いしています（笑）

もし皆さんが私の年齢を「80歳くらいではないか」と見られているようでしたら“マイナス5歳”で75歳という形ですね（笑）。本当の年齢を明かしますと、1946（昭和21）年生まれの73歳で、今年の冬には74歳になります。

生まれも育ちも高田でして、私の親もそうですしその前の祖父の時代からずっと高田でした。私の親父は、高田町連合町内会で今から4代くらい前に会長をしておりました。

私のほうは会社員を経て、その後に不動産事業を営んでおりましたが現在は引退しています。人生の半分くらいはボランティア活動に携わっていきまして、子どもの小・中学校のPTA役員に始まり、町内会の委嘱団体である「スポーツ推進委員」にも就き、その後に町内会の役員をさせていただき、35年くらいが経ちました。

他の人から見ると、「本業は何なのか？」との声も聴こえてきますが、私の人生ではボランティアという部分が“本業”なのかもしれません。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

私も生まれも育ちもこの高田地区です。生まれたところは高田町内会のエリアですが、“次男坊”ですので実家から出まして、高田東の「高田町親和会」（高田東1・2丁目の一部をエリアとする



高田町連合町内会・会長の宮田さん



高田地区社協・会長の相澤さん

町内会)のエリアにあります。

昨年までは高田町連合町内会で副会長を仰せつかっておりましたが、年齢的なこともありますし、今年度からは降りさせていただき、「高田地区社会福祉協議会(地区社協)」の会長として、地区社協の活動に全力で当たっているところです。

もともと、営業一筋のサラリーマンでして、会社では運よく役員に就かせていただいたことで引退が遠のき、前の町内会長さんからは「相澤はいつ会社を引退するんだ?」とよく聞かれました。

67歳まで仕事を続けた後、2009(平成21)年から町内会の「環境事業推進委員」に就き、2013(平成25)年度には高田町親和会で会長をさせていただきました。

ました。

一方、2018(平成30)年度から会長に就いた高田地区社協ですが、活動内容を端的に言いますと「困った方がいればその人たちをお助けする」ということが第一にあると思っております。

引き続き、地域の福祉施設や福祉団体と協力しながら、頑張っております。

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

生まれは東京都下の「読売ランド」に近いあたりなのですが、親父が高田東に家を買ってから早や66年が経っています。

私も2歳の頃から住んでおまして、桂幼稚園(高田東1丁目)、高田小学校(高田町)、新田中学校(新吉田東5=高田中学校が開校する1986年以前の中学校学区)と、まさに“高田のエリートコース”を歩んできました(笑)

勤めていた銀行を定年退職後、2013年4月からは地元の「高田町住宅自治会」(高田東1丁目の一部がエリア)で会長をさせていただいています。



高田町連合町内会・副会長の石井さん

その後、

2014年4月から高田地区社協の事務局長、今年(2020年)の4月からは高田連合町内会で副会長も務めているところです。

今、地区社協と連合町内会の共同ホームページ「助け合いのまち高田」を作ったり、アップデートしたりという作業を担当していますが、このホームページをどう広めていくかが課題となっています。

ホームページ「助け合いのまち高田」



2. 地域活動における「広報」の現状とは

「広報紙」は同時にホームページ上でも公開

<司会>

石井副会長からホームページのお話も出ましたが、地域活動における広報活動の現状を教えてください



町内会の広報紙「高田町内会だより」(左)と「高田町親和会だより」は年に4回の定期発行を続けている

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

私の住む「高田町住宅自治会」では、世帯数が多くないこともあって情報は主に回覧板で回していますが、活動報告については、ホームページ「助け合いのまち高田」にも写真などを随時載せています。

高田地区社協と連合町内会による「助け合いのまち高田」は、昨年（2019年）冬から始めました。もともと、地区社協のホームページは10年以上前からあったのですが、担当者の方がいなくなるなどして更新できない状態となり、ゼロベースで作りました。そういうことは理解してはいるが、情報伝達の重要ツールとしてはホームページしかない、というのが結論です。

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

「広報」という点で話しますと、町内会・自治会には、横浜市が発行する「広報紙（広報よこはま）」や回覧・掲示物を配るといった仕事もあります。

高田町内会だけで3400世帯あり、28のブロックに分かれて配布しています。ただ、広報紙を毎月配ることの負担が大きいとの声を受け、一部は配布を外部委託しているブロックもあり、これは今後増えていくかもしれません。一方で月1回の広報紙配布を通じ、人と人が会える機会を大事にしたい、と広報紙の配布を外部委託すべきではないとの意見もあります。

3. 「コロナ禍」での連絡体制をどうしたか

基本は「メール」、コロナ禍で「LINE」を活用

<司会>

2020年は新年度に入っすぐ、4月7日に「緊急事態宣言」が出され、5月25日には解除となりましたが、外出しづらい状態が2カ月近く続きました。そんななかで連絡体制はどうしていましたか？

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

幹部だけが集まって役員会は開催しましたが、一同に集まる形での総会は行えていません。緊急事態宣言が出ていた間、役員の連絡はメッセージアプリ「LINE（ライン）」を使っていました。

4年くらい前から連合町内会では連絡はメールで、という形になっており、そんななか石井副会長から「LINE」を教えてもらい、それもやろうか、となりました。

LINEは複数人でメッセージのやり取りができる、という点がメリットで、コロナ禍での連絡に役立ちました。

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

基本的に町内会・自治会というのは、めちゃくちゃアナログなわけです。メールもほとんど使わない。私たちの連合町内会でも、その当時、議事録を作ったとしても、プリントしてそのまま持っていく、というような作業をしていました。

現在の宮田寿雄さんが2016年に会長になられて「みんなでメールを使いましょう」と言って、一気に進めた。

昨年（2019）年には、高田地区社協と共同でホームページを作ったので、そこに議事録などをアップしておけば、「見たい人は見られますよ」という形にもっていったというのも非常に大きいですね。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

私も昨年まで連合町内会の副会長をしていましたが、企業時代に使っていたこともあってメールでの連絡に違和感はありませんでした。

ただ、「LINE」は今年9月23日から一部の古いスマートフォン機種だと使えなくなってしまうんですよね。私の持っている機種が該当してしまい、機種変更とデータの移行を慌てて行ったところでした。

(※)編注:LINE社が古いバージョンのOS(Android/iOS)を使った一部スマートフォンでのアプリ提供・サービスを9月から取り止めた

なお、高田地区社協のほうですが、一同に集まった形での総会を開くことはできず、全て「書面」での開催となりました。

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

LINE について言いますと、意外と広く皆さんに受け入れやすいツールではないでしょうか。

高田地区社協で福祉関連の地域活動団体が集まる「懇談会」があるのですが、参加する団体のなかで、ずっと活動を休んでいるところがありました。

メンバーから「家から一歩も出られないし毎日誰とも話せない日が多く、頭が変になりそう」という声があがり、「じゃあみんなで話しましょう」とLINE のグループ作ったケースもありましたね。

「LINE グループ」づくりや使用方法などの面倒を見る人がいれば、LINE は意外と垣根は低いのかな、という気はします。ホームページを閲覧させる形で情報を伝えるよりは、よほど手軽な IT 手段ではないでしょうか。

4. コロナ禍でのイベント・活動をどうしたか

アイデアを駆使し「防犯・見守り活動」を展開



コロナ禍前の 2020 年 2 月 2 日には高田地域ケアプラザで「たかたん こどもまつり」が開かれ、盛り上がった

<司会>

港北区内では今も多くの定例イベントの開催は難しい状態です。高田ではどうなっていますか

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

町内会が関係する地域でのイベントは、残念ですが、春以降の新型コロナ禍でほとんどを中止としました。集まっちゃいけないということで、やっぱりね、やれないし、できない。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

高田地区社協の関係で言いますと、6 月以降はスペースが比較的広い「高田地域ケアプラザ」に会場を移すなどしてイベントを始めた団体もありますが、新型コロナの様子を見ながら手探りの状態です。

なかには、大人数で“密”になってしまうので、来年3月までは中止にしようという団体もあります。

もし、冬ごろまでに新型コロナが収束して開催できそうならば、広報などでお知らせしながら、イベントを始めようというふうに皆さんと話しているところです。



高田町内会の掲示板には夏の盆踊りの中止を知らせる掲示も

<司会>

防犯や見守りといった活動はどうしましたか

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

要援護者の見守り活動ですが、やはり個別訪問はできないですね。情報物の「ポスティング」くらいで留めるという活動にならざるを得ません。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

防犯活動としては、単一町内会（高田地区の8つの町内会・自治会ごと）でおおむね毎月1回は行っています。

ただ、以前のように「火の用心」や「振り込め詐欺に気を付けましょう」など、声を張り上げてハンドマイクを使って広報すると「飛沫」が飛んでしまうことになります。

そこで、私の所属する「高田町親和会」では、ICレコーダーにそうした音声を録音してハンドマイクを通じて周知する、というような工夫しながら防犯活動を行っているところです。歩く際も参加者は1メートル半以上離れるようにしています。

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

私たちの「高田町住宅自治会」では、毎週月・水・金曜日の夜8時に、防犯活動として町内会をぐるぐる回っていました。

ただ、メンバーが年齢を重ねてきて、「週に3回はちょっときつい」という声や、今年の8月は猛暑だったこともあり、今月（9月）は週2回に減らしています。また、1月と8月を除いて、

「毎月1日」の朝9時には、家の前に顔を出してください、とお願いをしています。以前は家の前に出てきてもらって、私とか民生委員とかが町内をまわっていました。町内会全部で210世帯くらいなので、それほど大きな負担にはなりません。

今は町内の1カ所に皆さんが集まってくるようになっていまして、集まった人に「特殊詐欺が多いから気を付けましょう」といった話をして、じゃあまた来月に、というような流れです。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

「高田町親和会」では、2015（平成27）年度より高齢者と障害者の方に「黄色いハンカチ」をお配りする取り組みをしています。

地震などの災害があった時、大丈夫な時は外から見えるところに、その黄色いハンカチを出しておいていただきたいという趣旨です。出ていれば、すぐに次のところに訪問できるわけです。

今は町内会長を退きましたが、去年までは高齢の方のところへ行くと、玄関のところに黄色いハンカチが置いてあるなど、そういうことが確認できることもありました。なかには「もうハンカチがどこかへいっちゃった」という人もいるのでしょうか……。

5. 広報活動における現在の課題とは

どうすればホームページ閲覧は増えるか

<司会>

高田の連合町内会も地区社協も、ホームページや広報紙など広報面をかなり積極的に行っている印象ですが、課題はどこにありますか

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

やはり、ホームページのアクセス数が伸びないことでしょうか。

連合町内会を構成する各町内会・自治会にも「PRをどんどんしてください」と投げかけているのですが、なかなか反応は少ないですね。

ホームページを運用できていることは良いのですが、その先の望んでいる方向には、まだ残念ながら行けていないというのが現状です。

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

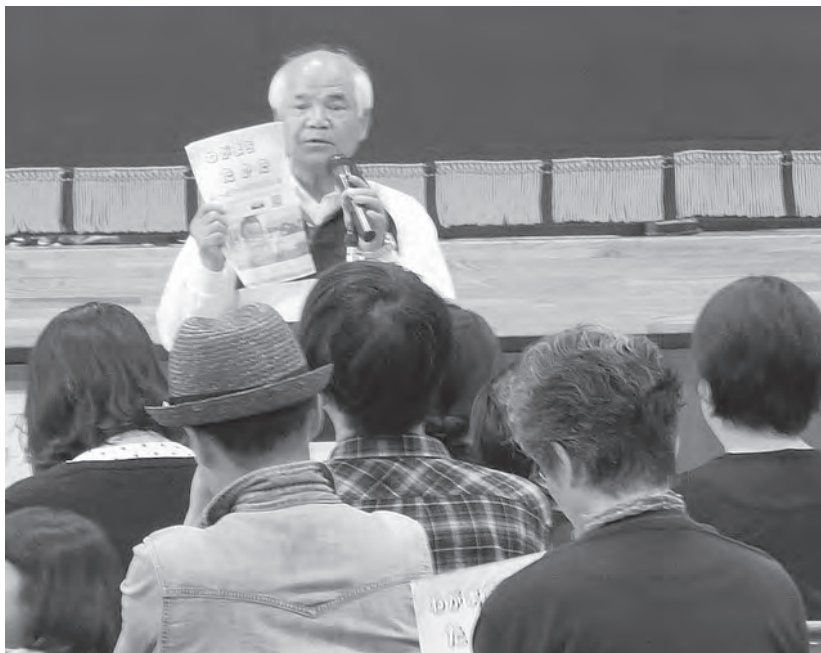
意志がはっきりある人と、全くない人っていうのがはっきり分かれていて、この温度差は、いかんともしがたい。

ホームページへのアクセス数は無料の集計サービス「Google（グーグル）アナリティクス」で知ることができるのですが、見ているとなかなか厳しい。

そこで、若い人に興味を持ってもらおうと、高田中学校の生徒の皆さんと連携しようとしています。

今の中学生は iPad を使って授業もしていますし、さまざまな体験をするのにホームページも良いのではないかと思います。生徒から親にもつながります。

そんな話が盛り上がっていたのですが、突然の新型コロナ禍で進捗が止まっている状態です。状況が落ち着いたら進めたいですね。



ホームページの開設を知らせるチラシも配布している

<司会>

ホームページを広く知っていただくには、街の話題を拡充していくという方法が考えられます。たとえば若い方へのアプローチでは、高田の出身者で今かなり話題のお笑い芸人の方がいらっしゃって、2018年10月の高田天満宮での「例大祭」にも出ていますが、そうした話とか、新たに高田でオープンする回転寿司店の話題など、“街ネタ”を載せる方法がありそうです

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

確かにそのお笑いコンビの方には、2年前に高田天満宮の例大祭に出ていただきましたが、今は全国的な知名度となり、そのころとは状況が変わっているので、連絡さえ取るのが厳しい面があります。

こうなったら、私がこうして頭を下げて……（実際に手をついて頭を下げる仕草に、一同笑い）

（※）編注：2人組のお笑いコンビ「ペコぱ」のシュウペイさんは、高田出身であることを2018年10月の高田天満宮における奉納演芸で話していた

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

私が中学生にITに興味を持ってもらいたいと思った理由の一つとして、世界中の人が見るんだよ、という感覚を持ってもらいたいな、と思ったことがあります。

SNSなどに変な内容をアップしてしまったり、誘拐をもくろんでいるような犯罪者に騙されて交流してしまったり、怖い面もあるということを知ってほしいという思いもあります。いわゆる「ITリテラシー」の底上げを目指す目的を持っています。

<相澤 昇さん:高田地区社会福祉協議会会長>

ホームページの告知ですが、ちょうど1年前にも一度実施しましたが、チラシを作って高田の全戸配布をする、ということをもう一度行っても良いかもしれません。

今は、インターネット印刷で発注すれば印刷費用も安く抑えられます。活動をPRすることで、役員のなり手不足とか、そういうところにも役立つのではないかと考えています。

6. 地域活動における現在の課題とは

業務の軽減と理解を深めることが重要



今回の「つなぎ塾トーク」で会場となった「ゆずの樹」は一軒家を使った地域の居場所、高田エリアは居場所づくりがさかんに行われている

<司会>

広報活動について話していただきましたが、地域活動の全般に対する現状や目標を教えてください

<石井 達也さん:高田町連合町内会副会長>

地域活動について、自身の経験をお話ししますと、銀行員を定年退職した後、「高田町住宅自治会」の前会長に「会長をやってくれませんか」と言われまして、「サラリーマン生活も終わったので、もう大丈夫だ」と引き受けましたが、こんなに仕事が多いとは想像していませんでした。

引き受けた以上、自治会のなかで、どういうお金の使い方をするのかというのを考え、決算書を見たとき、積立金が利息がつかない「定期預金」で眠っていることを知りました。元銀行員が言うのも変な話ですが、貯めても金利がつかのならないのですが、全くつかない。すずめの涙ほどもない。

せっかく皆さんが町内会費を払っているのだから有効活用したほうがいい、というふうに思い

まして、ごみ集積場を金属製のボックス型に変えたり、災害時に給水所で使う折り畳み式のパックを配ったりといったことを実施しました。

「貯めるだけではなく、会員のために使いましょう」というのが役員の役割、といった考え方で活動しています。

先ほどから話題となっている広報面で言いますと、インターネット上のホームページ自体を見るという人が少なくなっているのでは、との思いもあります。

たとえば、インスタグラム（Instagram＝写真 SNS）やティックトック（TikTok＝短時間動画の共有サイト）が若い世代に人気ですし、言葉（文字）で発信するならツイッター（Twitter）とかですね、わざわざホームページに行って情報を見る、という流れが変わっているのではないのでしょうか。

そんな状況だからこそ、広報の拡充には、年配の方から攻めるのではなくて、若い世代から持ち上げていく、その結果、年配の方まで広がってくれたらいいな、というのが願望であり目標です。



2019 年の年始に開いた高田地区の
賀詞交歓会であいさつする宮田さん

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

町内会の立場で申しますと、いろいろな悩みがある中で、やっぱり、町内会自体への関心度が低いという根本的な課題があります。

なかなか協力を得られないことで、役員の選出にしても、偏ってしまうことになりかねません。

同じ人が町内会や地区社協、子育て・高齢者支援など、地域内で二つも三つも役割を担うという形にならざるを得ないという状況は、やはり解決していかなければいけない。

たとえば、「民生委員・児童委員」「環境事業推進委員」「保健活動推進委員」「明るい選挙推進協議会推進員」「スポーツ推進委員」「青少年指導員」「消費生活推進員」「家庭防災員連絡員」といった町内会・自治会に関連する「委嘱団体」は、時期がくると選出があるのですが、なっていたくのが大変なんです。

なり手が見つからないから、最終的には会長が受けるとか、それは本当にどの地区も悩みを抱えています。

もう一つ言いますと、どこの町内会・自治会でも行政の作業の一部を担うという側面もありま

す。これは重要なのですが、現実には人の問題で負担増になってしまう。極力減らせないかとの思いもあります。

<司会>

町内会・自治会は地域にとって重要な役割を担っていますが、理解されづらいということでしょうか



盆踊りなどのイベントや会合、見守り、事務作業など町内会・自治会の仕事は多い(2018年の高田小学校での盆踊り)

<宮田 寿雄さん:高田町連合町内会会長>

正直に言いますと、町内会・自治会と聞いたら、もうそれだけで「NO」なんですよね。

「活動は1カ月に1回くらいですから、なんとかありますよ」と話し合える展開になれば、お願いできる人も増えると思いますが、仕事はそれなりに多いので、そういうわけにもいかない。

何より“アレルギー”になっているような状況を脱皮しないと、現状のままになってしまう。

そんな状況を変えたい思いを持つ方は多いのですが、そのエネルギーは、任期中に終わってしまいます。1期2年ですが、一生懸命やっているのだけど、なかなか効果的なかたちが見えてこない、やっていて苦しい。

作業量は、極力少なく、たくさんの人で負担を少しずつ担っていくというのが一番良い形だと思っています。

一朝一夕にはできないのですが、このコロナという100年に1回の大災害が起こっているのですから、これを機に、より地域に目を向けていただける可能性も考えられます。私たちも何とか良い方向へ進めるよう努力していかなければならないと考えています。

<司会>

現場からの生の声を広く共有したいと思います。そして、皆さんがとても高田という街が大好きなんだというのがすごく伝わってきました。本日はありがとうございました。

(「つなぎ塾トーク」第3回：開催日2020年9月16日)



つなぎ塾トーク
第4回の開催内容

どうする、地域での子育て・教育

子育て支援側からの IT を活用したアプローチと 地域の子育て環境づくりをどう行うか

人口が 35 万 6000 人超（2020 年 9 月時点）の港北区は、日本全体が人口減少社会に入っても、しばらくは増加傾向が続くことが予想されています。

特に年間出生数は 3500 人を超え、0～5 歳の子どもの人口比率が横浜市の平均より高く、そのほとんどが夫婦と子どもだけの世帯です。

そして、0～5 歳の子どもがいる世帯の共働き率が横浜市平均の 40%を上回っています。親同士や地域とのつながりづくりをテーマに市民グループが主催する取組も広がっています。

しかし、今年（2020 年）春頃から新型コロナウイルスの感染が拡大した影響で、子育て不安の解消の場でもあった「両親教室」や「赤ちゃん教室」が中止、「親と子のつどいの広場」も閉鎖となりました。

新たに市民活動団体のオンラインによる育児相談なども開催されることで、これまでの「紙」を中心とした情報発信では立ち行かない状況も発生しています。

また、学齢期では、市立小・中学校が 3 月から 5 月まで臨時休校となり、6 月からの段階的再開を経て、8 月は短期間の夏休みとなるなど、過去に例がない状況となりました。

【今回の課題】

新型コロナ禍にともなう子育て不安の拡大とその解消の手立て、学校臨時休校時の家庭学習、地域の居場所、学校再開時の地域や保護者の支援について、現状をお話いただき、新型コロナ禍を経た地域の子育て・教育環境づくりに向けた取り組みを探ります。

つなぎ塾トーク<第4回：子育て支援・教育現場のみなさん>

新型コロナ禍でも子育て・学びは止められない



つなぎ塾トークの第4回は、港北区内で子育て支援や教育現場を担う3人の方に集まっていたいただき、新型コロナ禍を踏まえたIT活用や、子育て世代へのアプローチのあり方、地域の教育環境づくりをテーマに話を伺いました。(2020年10月6日開催)

会場となった港北区役所内の会議室では、ソーシャルディスタンスを確保したうえで、職員の方も自由に聴講できるスタイルとしました。今回、話を伺ったのは次の3人の方々です。



<お話を聞いた方々>

- **玉置 恭美さん**:日吉台小学校(日吉本町1丁目)校長、港北区小学校長会会長(2020年度)
- **畑中 祐美子さん**:認定NPO法人びーのびーの(大倉山3丁目/篠原北1丁目)地域リミックス(remix)担当
- **豊岡 修さん**:「青少年指導員協議会」新羽地区会長、「港北区青少年指導員協議会」副会長

1. 港北区との関わりと地域活動の今

小学校・子育て支援・地域の現場から

<司会>

つなぎ塾トークも4回目となり、本日は港北区内で子育て分野に関わる3人の方々にお越しいただきました。それぞれ、簡単に自己紹介をお願いいたします

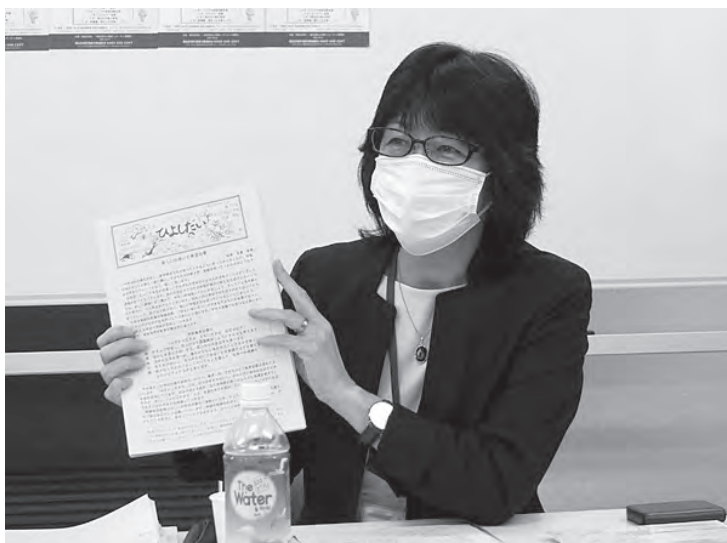
<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

2018（平成30）年4月から日吉駅近くの日吉台小学校で校長をつとめておりまして、その前年は日吉台中学校（日吉本町4丁目）の副校長です。もともと英語教員として採用され、初めて赴任した先が樽町中学校（樽町4丁目）でした。

生まれも育ちも横浜市で、親子四代にわたって続いています。実は私の出身は港北区です。といいましても、今は緑区となっていますが、生まれたころは緑区や都筑区、青葉区がまだ無く、すべて「港北区」でした。

幼い頃、祖母に「迷子になったらこれを言うんだよ」と暗記させられた住所が「横浜市港北区」だったことをよく覚えています。

そのようなわけで、港北区とは公私ともに何かと縁があります。



日吉台小学校・校長の玉置さん

<畑中 祐美子さん:認定 NPO 法人びーのびーの>



認定 NPO 法人「びーのびーの」の畑中さん

出身は北海道函館市で、二十歳の頃に首都圏へ出てきてまして、その後、川崎市の中原区で就職しました。今は菊名駅に近い鶴見区在住ですが、結婚して住んだところが新吉田町でしたので、本籍は今も新吉田町のままです。

最寄りが菊名駅ということもあって、駅西口の篠原北に本部を置く子育て支援の認定 NPO 法人「びーのびーの」と縁ができて、以降、びーのびーのでは主に情報発信に関する仕事をしています。

びーのびーのとの出会いは今の住まいに

引っ越して、第3子を出産後のころでした。

「お母さん業界新聞」（神奈川県大野町、1989年の発足時は「トランタン新聞」）という横浜発の有名なフリーペーパーをよく読んでいまして、そこには「菊名に『おやこの広場びーのびーの』という施設ができ、親子で遊べる場所です」という記事が載っていたので、行ってみたら、「『幼稚園・保育園ガイド』を作る人を募集中」と壁に貼ってあったんです。もともとIT系の仕事をしていたのですが、保育士と幼稚園教諭の資格を持っていましたので、何か役に立てるかもしれない、と活動に加わったことがきっかけです。

現在は子育て支援に携わっているご縁で、一般社団法人「全国子育てタクシー協会」（横浜市瀬谷区）で理事をさせていただき、横浜市の「福祉のまちづくり推進会議」では委員として、横浜市福祉のまちづくり条例を推進するための活動にも携わっています。

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会 新羽地区会長>



青少年指導員・新羽地区会長の豊岡さん

偶然にも畑中さんと同じく出身は北海道でして、札幌市です。就職で首都圏へ出てきまして、最初は会社の寮でしたが、結婚後は日吉本町に住んでいました。

家を買いたい、と思って探していたところ、新羽町の幹線道路「宮内新横浜線」に近い位置で東急電鉄が建てた分譲住宅が売りに出されていて、今はそこに住んでいます。

子どもが小学生になる前は、地域とのつながりが少なかったこともあり、子ども会に参加したことがきっかけで「青少年指導員」に推され、現在に至ります。青少年指導員の協議会では新羽地区の会長と、港北

区の副会長をつとめております。

このほか、地元の新羽町自治会で副会長や、新羽地区社会福祉協議会の理事、新羽地域ケアプラザでは運営委員をつとめている縁で、区の地域福祉保健計画「ひっとプラン港北」の推進委員を、また、青少年指導員の縁で、新羽の小中合同学校運営協議会の委員などもさせていただいているところです。

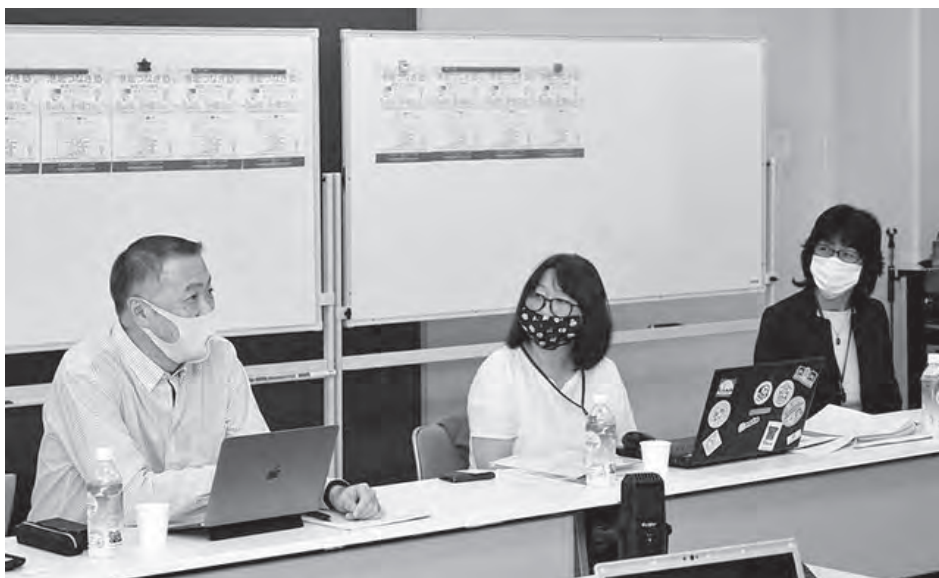
2. 「新型コロナ禍」で活動はどうなったか

外出自粛「緊急事態宣言」で現場の苦心

<司会>

ありがとうございます。まずは、みなさんの現在の活動状況や、今年の春以降の「新型コロナ禍」における対応などを教えてください。

左から豊岡さん、畑中さん、
玉置さん



<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

2020年2月27日に国から休校要請が出されたことを受け、横浜の市立小・中学校では3月3日から臨時休校に入り、4月と5月には「緊急事態宣言」が出されたため、休校期間は延長されることになりました。

その間、短時間の卒業式や入学式、課題などの受け渡しこそ行えましたが、外出自粛が求められていましたので、学校自体は6月1日まで再開ができませんでした。



1863(文久3)年に「寺小屋」から始まった日吉台小学校は1873(明治6)年の創立から145年以上という歴史を持つ。約3カ月間の臨時休校を経て今は賑わいが戻った

港北区には市立小学校が26校、中学校は9校あるのですが、私の勤務する日吉台小でも、出勤自粛期間中は教職員に「LINE WORKS(ラインワークス)」で情報を共有しました。

市の教育委員会から学校再開の見通しなどに関する情報が来ると、その内容や今後の指示を職員へ向けて一斉配信するというような形です。

また、日吉台小では「登下校ミマモルメ」という鉄道会社が開発したメール配信サービスを導入していましたので、保護者のみなさんへは、メールを使って連絡しました。

メールには長文が載せられないので、学校のホームページに情報を載せ、そのURLを貼り付けてそこを見てもらおうようにしました。

<畑中 祐美子さん:認定NPO法人びーのびーの>

びーのびーのでは、港北区内で「親と子のつどいの広場」の一つである「おやこの広場びーのびーの」(篠原北1丁目)と、子育て支援拠点「どろっぷ」(大倉山3丁目)と「どろっぷサテライト」(綱島東3丁目)を運営しています。「つなぎ塾トーク第1回」に榎町で「ひだまり」

を運営する横溝和子さんも登場されていますが、「親と子のつどいの広場」は、保育園・幼稚園に入る前のお子さんと保護者の方が一緒に来て遊んだり、子育て相談を受けたりする施設で、港北区には6カ所（篠原北・高田西・樽町・日吉本町・岸根町・新吉田東）あります。



大倉山3丁目にある子育て支援拠点「どろっぷ」はコロナ禍で休館を余儀なくされたが、電話などでの相談業務は懸命に続けた

「どろっぷ」や「どろっぷサテライト」は広場の機能に加えて、子育てサポートシステムや、利用者支援機能、支援に関わる人のためのネットワークなどの後方支援のようなことも行っています。

首都圏では4月7日から5月25日まで「緊急事態宣言」が出されていたため、その期間は「親と子のつどいの広場」も「どろっぷ」も来訪者を迎えることができなくなりました。

ただ、外出自粛を求められても、家のなかでは乳幼児の子育ての手を止めることはできません。相談したい人は多数いると考え、「どろっぷ」には何人かの職員が出勤して電話相談を受け続けました。

また、産前産後の方のなかには、両親が手伝いに来られなくなったり、里帰り出産も難しくなったりしてしまいましたので、そうした人への支援も止めるわけにはいかないということで、市の委託を受けて行っている「産前産後ヘルパー派遣」も継続しています。

当時は著しいマスク不足の状態でしたが、あらゆるところからかき集めたり、ご寄付いただいたりして、ヘルパーさんの感染対策を懸命に行いました。

<司会>

外出自粛ということで、インターネットを通じた情報発信に積極的でしたね。また、臨時休校中の大学生と小学生を結ぶ新たな取り組みも行っていますね

<畑中 祐美子さん:認定 NPO 法人びーのびーの>

これからお父さんになる「プレパパ」向けの動画を配信したり、写真共有 SNS「Instagram（インスタグラム）」を始めたり、港北区内の子育て情報が得られるアプリ「ココアプリ」には、常に最新情報を発信し続けていました。

Instagramは、始めたばかりで知名度が高くないこともあって当初はあまり「いいね！」は付かなかったのですが、後で「スタッフの様子が分かるだけでも嬉しかった」「誰かがどこかで何かをしてくれている、自分たちのことを考えてくれているということが伝わっただけでも嬉しかった」との声を聞きまして、やってよかった、とスタッフ間で喜びましたね。

また、若者と NPO をつなぐ「NPO 法人アクションポート横浜」（中区山下町）と神奈川大学経

営学部の山岡義卓先生のゼミ生に協力いただき、小学生とのオンライン交流活動も行いました。

大学生も新学期をまたいで、通学もクラブ活動もアルバイトもできない状態となっていて、「何か地域の役に立ちたい、子どもたちのためにできることはないか」と企画を考えてくれたものです。

オンライン会議システムの「Zoom（ズーム）」を使って、自宅から出られない小学生に勉強を教えたり、歌やゲームを楽しんだりといったことを実践してくれ、非常に盛り上がりすぎてテレビなどにも取り上げられ、暗かったコロナ禍のなかで嬉しい出来事でした。

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会新羽地区会長>

区の青少年指導員としての活動は、4月以降まったくできていない状態です。横浜市の指針から考えると、活動は難しいという判断になってしまいます。

子ども向けの行事は、小学校のグラウンドをお借りすることが多いのですが、借りるためのハードルがものすごく高くなりました。

万が一、そこで陽性者を出した場合、学校に与える影響が非常に大きくなるので、やむを得ません。我々としても年内の活動は難しいと判断し、基本的に行っていない状況です。

今、その後はどうするかを考えているところです。ただ、青少年指導員の活動としては、子どもに集まってもらうというスタイルが基本なので、これまでのように100人規模で集まることが難しいなか、どのような形なら楽しんでもらえるかを模索しています。



会場となった港北区役所4階の会議室、新型コロナ前は50人が収容できる会場



横浜市内では初めてとなる港北区独自の子育て情報アプリとして2018年に誕生した「ココアプリ」は、区と「どろっぷ」、学校法人岩崎学園の情報科学専門学校(神奈川区鶴屋町)の三者で開発した(「どろっぷ」の案内ページより)

青少年指導員の会長会の会合自体もなかなか難しく、会長と副会長2人の3人だけでこの会議室(区役所4階、通常は約50人収容)に集まったのですが、感染対策で席を離しているため全然声が聞こえなくて、最初はお互い「何を言っているのかよく分からん」みたいな感じになりましたね(苦笑)

<司会>

先ほど、畑中さんの自己紹介内にも出てきましたが、びーのびーのでは、毎年5月から6月に港北区内と周辺の幼稚園

や保育所を取材してまとめた『びーのびーのガイド（幼稚園・保育園ガイド）』を2000（平成12）年から発行しています。今年は発行が7月下旬に伸びており、特に大変だったのではないですか

<畑中 祐美子さん:認定 NPO 法人びーのびーの>



『びーのびーのガイド(幼稚園・保育園ガイド)』は創刊20年以上にわたって毎年読み継がれている

港北区の周辺で幼稚園や保育所を探す際、20年にわたって多くの方に愛読いただけてきました。このガイドを通じて各園の基本的な部分を知っていただき、そのうえで自分の目で実際に見学して確かめてほしいとの思いがあります。でも、今年は見学も十分にはできないし、公開保育の機会もほとんどありません。

どうにかできないかと考え、「小机幼稚園」（小机町）の久米先生のご協力を得て園庭を撮影させていただいて動画にしたり、私どもの法人と関わりのある認可保育所「ちいさなたね保育園」（師岡町）の安江園長からのメッセージを収録したりしました。

3. 緊急事態下で有効だった連絡手段とは

「LINE」「Slack」など多彩なツールで乗り切る

<司会>

先ほど、玉置先生から日吉台小学校では「LINE WORKS（ラインワークス）」を通じて先生方と連絡を取り合っていたという話がありましたが、外出自粛が求められるなか、組織内ではどのようにコミュニケーションを取っていたのでしょうか

<畑中 祐美子さん:認定 NPO 法人びーのびーの>

びーのびーのには、スタッフが70人ぐらいいて、ボランティアの方を含め約100人で活動しています。

連絡手段のベースには「メールリスト」がありまして、NPO法人内の事業が複雑多岐にわたっていますので、50本ぐらいのメールリストが存在しています。ここに毎週の予定を配信する形です。

また、事業チームごとに連絡手段を決めていて、「LINE」をはじめ、Facebook（フェイスブック）に付随する「Messenger（メッセンジャー）」を使うチームもあれば、グループチャットなどができるコミュニケーションツール「Slack（スラック）」を採り入れているチームもあり、それぞれですね。

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会新羽地区会長>

青少年指導員の新羽地区では、企業向けの情報共有サービス「サイボウズ Office（オフィス）」を使っていて、そこへ基本的な情報を收容し、アクセス権のある人が、全ての情報にアクセスできるという形にして情報の電子共有を図っています。

連絡や情報の発信手段としては、「Slack（スラック）」を活用しています。LINE だと個人用の LINE とごっちゃになるので、その辺の切り分けが難しいことから Slack になりました。

課題はやはり、使いこなせる人と使いこなせない人がいて、LINE にせよ何にせよ連絡の手段を1つに統一するのが難しいという印象です。

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

港北区の小学校校長は26人おり、緊急事態宣言中の4月と5月は一同に集まることが難しかったのですが、どうしても話し合わなければならない議題もありましたので、マイクロソフトのオンライン会議ツール「Teams（チームズ）」を使って校長会を行いました。

当時、「Zoom（ズーム）」は個人としてアカウントを取らなければならなかったもので、教育委員会に「Teams のアカウントを全員に配布してください」とお願いしたところ、他の区で使っている事例があったので、割と早く対応をしてもらえました。

その後に Zoom を使っても良い、と公式に通達がありましたので、Zoom も活用しながらさまざまな会議を行っています。

4. コロナ禍を経ての苦労や変化とは

活動再開後も「コロナ対策」に悩み

<司会>

みなさんがコロナ禍での活動やコミュニケーションに苦心されたことが伝わってきました。今回の経験を経てどんな変化がありましたか

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

先ほど、豊岡さんが学校のグラウンド開放のことを話しておられましたので、少し説明します



ビジネス向けのコラボレーションツールという位置付けの「Slack（スラック）」は米国企業のスラックテクノロジー社によって2017年11月から日本語版が提供され、無料版もある(公式サイトより)

と、横浜市立の小中学校では、グラウンドや体育館の使用調整は学校ではなく、各校の「文化・スポーツクラブ」という別組織で行っています。

校庭は、土曜日は「放課後キッズクラブ」（授業終了後と土曜日の居場所として各学校内に設置）へ通う児童が遊ぶ場所として優先的に使いますので、なかなか空きがありません。

貸し出し自体が8月まで市全体で停止となり、その後に再開したのですが、使った人全員の名簿提出や使用後の衛生面での対応など、貸出条件がかなり厳しくなっているのが現状です。

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会新羽地区会長>

私も地元小学校と中学校の「文化・スポーツクラブ」の副委員長をさせていただいているのですが、小学校のグラウンドは「放課後キッズクラブ」が最優先で使い、その次が「地域行事」です。地域の登録団体は空いていれば予約が可能という形になっているのですが、「今、本当に使っているのか」と判断に迷うことがあります。

新型コロナ禍により、昼間は先生が緊張を強いられるなかで、児童と教職員に感染が起きないよう懸命に学校を運営しているのに、もし夜間や休日に使った人たちのなかに感染者を出してしまったらどうすればいいのか、とみんなすごく心配になっています。

<司会>

今、この会場に港北区こども家庭支援課の渡邊係長がいらっしゃいましたので、子育て支援に関するお話を伺ってみたいと思うのですが、ぜひ一言お願いいたします

<港北区こども家庭支援課係長・渡邊悠司さん>

「地域子育て支援拠点」の事業を担当しておりまして、畑中さんが登壇されるということで、最初から話を聴きたかったのですが、今日は1階の乳児健診が混雑してしまっていて、その調整で遅れてしまいました。

地域行事に関するお話がありましたが、私たちも今、子育て支援に関する行事を地域のいろんな会場をお借りし、感染対策を徹底しながら再開しているところです。

子育て関連事業が止まっていた時、苦しいお母さんたちの声を聞いていましたので、「怖いから、できないから、やりません」ということではなく、自分の中で筋が通る説明をしていかなければならない、との思いを持ちながら再開していきました。

今回のコロナ禍ではみなさんが大変な思いをされたかと思いますが、この間に区内のさまざまな施設の方と仲良くなり、地域に関わって活動されている方から多くの声を伺う機会もできました。大きな課題があったときには、いろんな関係者が意見を持ち寄って、解決に向けて話し合うことの重要性にも気づかされた半年だったと感じています。

<司会>

急な指名だったのに、コメントいただきありがとうございます。子育て支援環境が以前の状態に戻りつつあることは、子育て中の方にとっても心強いと思いました

5. コロナ禍のなか、区内に新小学校

1人1台の端末整備へ、学校のIT化が急ピッチで進む

箕輪町2丁目の大型再開発エリアで4月に開校した箕輪小学校、短時間の入学式こそ行えたが、開校に関する行事は中止となり、児童は6月1日まで登校できなかった



<司会>

港北区内ではコロナ禍のさなか、開校を迎える小学校もありました。箕輪町2丁目の「箕輪小学校」です。開校するだけでも大変なのに、苦労が多かったのではないのでしょうか

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

箕輪小学校は「日吉台小学校第二方面校」として、日吉台小や綱島東小学校（綱島東3丁目）などの通学エリアを再編して今年4月に開校しました。

ただ、開校後に短時間の入学式は行えたものの、4月と5月は臨時休校中ですから児童は新しい学校へ通うことができません。

箕輪小の校長先生から伺ったのですが、開校時に分かっていたのは、通学対象となっている児童の保護者名と住所だけで、メーリングリストも整備できない状態だったといいます。そうになると、新しいクラスの担任から児童へ、連絡を取ることも難しく、休校中の課題も配れないわけです。

ただ、さいわいだったのが箕輪小は新設校ということで、「ロイロノート・スクール」（中区北仲通に本社を置く株式会社LoiLoが開発）というインターネットを使った授業支援ツールが当初から導入されていました。この「ロイロノート・スクール」に各家庭からアクセスしてもらいここに学校からの連絡や各学年向けの課題を流し、発信したということです。

箕輪小の例にもあるように、コロナ禍を経て「学校のIT化が欠かせない」という認識が国全体

で急速に広まりました。文部科学省の示す「GIGA（ギガ）スクール構想」の実現を早めに行うべく、横浜市でも学校のIT環境整備を進めていくことになっています。

小学校や特別支援学校では1人につき1台のタブレット端末「iPad（アイパッド）」が整備されます。中学校や市立高校ではGoogle社が開発した「Chrome（クローム）端末」です。

これによって、いざ臨時休校となってもタブレット端末を自宅へ持って帰ってもらい、児童・生徒が課題に取り組めるようになります。



今回の「つなぎ塾トーク」は1時間30分にわたって議論が行われた

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会新羽地区会長>

学校の先生はそれでも忙しい中、ITに対応するための勉強を別にしなければならなくなります。サポートしてくれる人材を充てるなど、現場に配慮してもらわないと、IT活用が難しい面もあるのではないのでしょうか。

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

今、月に3回から4回、学校に「ICT支援員」という人が派遣されていて、IT面の整備や授業にも入ってくれ、職員への研修も行っています。また教職員向けに研修も多く行われ、「学校サポートデスク」による支援もあります。

<司会>

日吉台小では、臨時休校の期間中も学校の様子などを頻繁にホームページで発信をしていましたね

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

副校長さんが実務担当で、相談しながらとにかく必要な情報を伝えようと思いました。日吉台中学校など他校の校長先生も頑張っておられたので、私も頑張らなければ、と休校中は「校長室より」のページで発信を続けました。個人情報の保護に留意しながら、学校内の様子をできるだけ発信したい思いを持っています。

6. 地域活動の「これから」と「今後」

地域に新たなつながりと IT 活用を

<司会>

最後に一言ずつ、今後の目標や思っていることなどをお話しただけたらと思います

<豊岡 修さん:青少年指導員協議会新羽地区会長>

新型コロナ禍の前から、自治会・町内会を始めとした団体間の横のつながりはあるようで何となく希薄だった面もあります。

新羽の場合は「子ども会」が去年から休会していたこともあり、「地域でももう少しうまく連携したいね」と年末あたりから話していたところでした。

さきほどから話に出ていますが、「IT」を使える人は積極的に活用してもらい、地域内で広く連携していけるところは連携していきたいと思っています。



新羽町にある「新羽小学校」

<畑中 祐美子さん:認定 NPO 法人びーのびーの>

個人的には新しいもの好きですので、地域での役割は「何かを探してくる係」なのだろうと勝手に思っています。なので、今回の「港北つなぎ塾トーク」へのオファーもそうなんですけど、話をいただいた時はなるべく断らないようにしたいと考えています。

あと、「他力本願」というキーワードも大事で、自分でできることは自分で調べながらも、ここは区役所に頼んじゃおうかなとか、青少年指導員にお願いしようとか、小学校の先生に言ってみようとか、色んな人や組織に頼ることで、新たなつながりを生み出していけたらと思っています。

<玉置 恭美さん:日吉台小学校校長>

港北区の小学生は毎年、港北公会堂で音楽会を行っているのですが、今年は新型コロナ禍で中止となりました。「各校で『YouTube』を使って生配信してみてもどうか」といった話も出たのですが、各学校で DVD に録画し、違う学校の合唱を聴きあおうということになりました。

また、学校行事で言いますと、今年は従来のように大勢が集まる形での「運動会」を開くことも難しい状況です。

日吉台小でも低学年（1・2年）、中学年（3・4年）、高学年（5・6年）ごとに児童を入れ替え、保護者の観覧も各家庭から 1 人に限定し入れ替え制としました。

子供たちは他の学年の演技や競技を観られないこととなりますので、教室で待機している間以外の模様をリアルタイムで、有線をつないで教室に配信してテレビで観られるようにしました。

これからどんどん IT 活用が進んで、教職員も使いこなせるようになり、子供たちも iPad を持ち帰れば宿題も自主学習もできる、そんな時代も来るのではないかと考えています。

<司会>

まさに現場で実際に動かれている方ならではの話を多く披露していただきました。今回の内容は、他の地域団体の方にも広く共有させていただきたいと思います。本日は長時間にわたりありがとうございました



区役所の会議室で行われた今回の「つなぎ塾トーク」は、職員の聴講も可能という形で開催した

(「つなぎ塾トーク」第4回:開催日 2020年10月6日)

【用語解説】GIGA（ギガ）スクール構想とは？

「PC（パソコン）端末は鉛筆やノートと並ぶマスト（必須）アイテム」として、児童・生徒向けの1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することを目指すとする文部科学省が2019年に打ち出した構想。2020年春以降の新型コロナウイルス禍による全国一斉休校を経て、実現に向けた動きが加速した。

横浜市では2021年3月末までに110億円以上をかけて約27万2000台のタブレット端末を新たに購入し、市内に499ある市立小学校や中学校、特別支援学校などに配備を行うとともに、高速インターネット環境の再整備も実施する計画となっている。



つなぎ塾トーク 第5回の開催内容

どうする、シニアの地域活動支援

IT 普及はどこまで可能か？活動再開への道のり



港北区内で「65 歳以上の高齢者のみの世帯」は約 3 万 4000 世帯で、この 10 年間で約 1 万世帯増え、このうち、単身世帯も 1 万 9000 世帯と年々増加する傾向にあります。地域では、「家に 1 人でいるよりも誰かと一緒にいたい」——、そんな思いを形にする居場所づくりの取り組みも広まっています。

また「人生 100 年時代」と言われるなか、定年などで仕事を終えた後、次なる活動のステージとして、自ら住む「地域」を選んでもらうことは重要です。

しかし、今年（2020 年）春以降、新型コロナウイルスの影響で、居場所づくりや運営、地域とつながるきっかけや広げたり深めたりする取り組みが「ステイホーム」の掛け声のもと、活動を一時休止せざるを得ない状況も続いていました。

一方でセカンドキャリアとして地域での活動が期待される世代からは、「在宅勤務が増えて平日の地域の様子がわかるようになった」「以前より自分の街と感じるようになった」という声も聞かれます。

高齢層の連絡・伝達手段が「感染拡大防止」の観点で制限されているなか、どのような手段での連絡を試みたか、また日頃から初めて地域に参加する人々をどのように受け止め、活動の担い手の裾野を広げているかなどの成果を探ります。

やればできる IT 活用、連携と工夫で活動を前進



つなぎ塾トークの第5回は、港北区内でシニア層の地域活動支援を担っている4人の方に集まっていたいただき、新型コロナ禍を踏まえた活動のあり方や、IT活用への道のりなどをテーマに話を伺いました。

今回は城郷（しろさと）地区（小机町・鳥山町・岸根町）の福祉拠点となっている「城郷小机地域ケアプラザ」（小机町）を会場に、4人の方々が現状報告と意見交換を行いました。

（2020年11月18日開催）

＜お話を聞いた方々＞

- 岩田 聡子さん：「居場所づくり濱（はま）なかま」（鳥山町）代表、社会福祉士
- 井上 駿さん：横浜市下田地域ケアプラザ（社会福祉法人横浜共生会）、地域活動交流コーディネーター
- 本間 克之さん：港北区の高齢世代向けフリーペーパー『えがお』代表、介護福祉士
- 鈴木 智香子さん：NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表（「通所型サービスB」の介護予防活動などを実施）

1. 港北区との関わりと地域活動の今

介護予防の活動や情報の受発信を担う

＜司会＞

つなぎ塾トークは5回目となり、本日は港北区内でシニア向けの地域活動支援を担う4人の方々にお越しいただきました。自己紹介を兼ねて現在の活動内容をお聞かせください

<岩田聡子さん:「居場所づくり濱なかま」代表>



「居場所づくり濱なかま」代表・岩田さん

出身は兵庫県の神戸市です。結婚後に緑区の中山に住んでいたのですが、市営地下鉄グリーンラインの建設で立ち退きとなり、同じJR横浜線の沿線で小机駅からも近い鳥山町に引っ越し、現在にいたっています。

メインの地域活動としては、鳥山町に「居場所づくり濱なかま」という任意団体を立ち上げ、地域の拠点づくりをめざしています。

その一環として、「とりやまの郷（さと）」と名付けたシニアサロンで、歌声喫茶、健康づくり、ものづくり、回想法などの介護予防活動を行っています。

これらの活動は、横浜市の介護予防・生活支援サービス補助事業、「通所型サービスB」の対象として、要支援者の方や地域の方にご利用いただいています。

この「通所型サービスB」というのは、介護保険の対象外なのですが、介護予防や生活支援の場を設けることで、高齢者の在宅生活を地域で一体となって支えようという国の仕組みで、2017年から全国的に始まりました。

私たちの活動は、同じ小学校に通う保護者と立ち上げた「郷づくり濱なかま」という任意団体で行ってきた、“自分のできることを地域に還元する”という活動からサービスBに発展したものです。

私自身はかつてIT企業に勤めていたのですが、父が闘病生活をおくり、亡くなった経験を通じて、社会福祉士（「ソーシャルワーカー」とも呼ばれる国家資格）を目指しました。最期を迎えるというときに社会福祉士さんに色々とお話を聞いていただいたことを機に、「こういう職業を志したい」と思い、ITの仕事を辞めて大学に入り直しました。

社会福祉士の実習時に、社会福祉法人横浜共生会（新吉田町）が運営する大豆戸町の「しんよこはま地域活動ホーム」に受け入れていただいたことが縁で、現在は障害者相談支援事業所大倉山相談室にて、計画相談支援事業（障害のある方のケアマネジャーのようなお仕事）にも携わらせていただいています。

また、IT業界の経験も生かしながら、“ITで福祉課題を解決する”との目標を掲げ、鳥山町で「凧（なぎ）ライフパートナーズ」という個人事業を営んでいるところです。

（※）「通所型サービスB」とは？

高齢者の介護予防や日常生活支援のなかで、**地域住民のボランティアが主体**となって体操や脳トレ・認知症予防といった活動の場を提供する。各家庭へ訪問する「訪問型」にも同様のサービスが設けられている。

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

生まれも育ちもこの（城郷小机地域ケアプラザ）近く緑区の鴨居でしたので、幼いころから小



下田地域ケアプラザ・井上さん

机のお城なんかはよく遊びに来ており、親しみ深い場所です。

最初は、訪問診療の医療事務という仕事に就きまして、同行事務として医師と一緒に家庭をまわり、診療の手伝いをしていました。

その際、患者さんには高齢の方が多かったのですが、高齢者の方と地域をより強く結ぶ仕事に就きたいと考え、2016（平成28）年から横浜共生会が運営する「横浜市下田地域ケアプラザ」（下田町）で、「地域活動交流コーディネーター」という立場で働いています。

<本間克之さん:フリーペーパー『えがお』代表>

生まれは品川区の大井町ですが、6歳の時に都筑区の北山田へ引っ越してきました。まだ市営地下鉄グリーンラインもなく、当時は港北区の一部で、最寄り駅も綱島でした。その後、都内や箕輪町に住み、現在は大豆戸町在住です。

大学を出て、医療器具である「カテーテル」を扱う会社に就職したことで医療や福祉との接点ができました。その後も長くさまざまな広告代理店・芸能プロダクションなどの営業の仕事に就いたり、会社を経営したりもしていましたが、どうしても「売上」という数字に左右されます。

別の視点で仕事をしてみたい、と思っていたところ、縁あって介護の仕事に就きました。「これは人の役に立てる素晴らしい仕事」と痛感することになり、現在も続けています。

一方、自分で起業したいとの思いもあり、2018年1月に“プラチナ世代”と名付けた65歳以上の高齢者に限定したフリーペーパー『えがお』を立ち上げました。同じマンションに住む出版社の人と話しているときに「シルバーネット」という仙台市青葉区で刊行している高齢者向けの情報紙を知って、「自分の目指していたことはこれだ!」と思ったことがきっかけです。

『えがお』は、「彩りあふれる豊かな生活をもう一度取り戻す」とのコンセプトで毎月1回発行し、港北区内の各施設などで配布いただいています。まもなく創刊から丸3年になります。

<鈴木智香子さん:NPO法人「街カフェ大倉山ミエル」代表>

出身は山口県の岩国市です。大学進学時に首都圏へ来ました。その後、建設会社に入って結婚し、夫の転勤で福岡に6年ほどいました。そこで子供が2人生まれ、こちらに戻ってきて川崎市に2年ぐらい住んで、その後は横浜です。



フリーペーパー『えがお』代表・本間さん

ところが3年ぐらいでまた札幌に転勤となったので、北海道で5年を過ごし、以後は大倉山に住んでいます。

福岡への転勤時に会社を辞めてからは専業主婦でしたが、札幌で公園遊びの会を立ち上げ、横浜へ戻ってからは新横浜でボランティア団体「公園遊びの会おるたん」の活動を行っていました。

そんななか、ちょうど10年前の2010年、地元の大倉山で商店街が養蜂（ようほう）事業を始めるということで声を掛けていただき、そのアンテナショップとして「大倉山ミエル」を立ち上げました。「ミエル」というのはフランス語で「はちみつ」（MIEL）を意味しています。



NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表・鈴木さん

今はあまり知られていないのですが、今から10年前、「蜂の巣箱」を大倉山エルム通り商店会の通りのちょっと山側に3個置いて、養蜂をしていたんですね。1年目は、気温も高く蜂も元気だったこともあり、たくさんのはちみつが採れました。

ただ、蜂はなかなか冬が越せなくて、2年目と3年目は新たに蜂を買ってくるなどして頑張っていたのですが、3年目でいったん休止となっています。

現在の「大倉山ミエル」は誰もが立ち寄れる街のコミュニティカフェとして運営する一方、岩田さんの「とりやまの郷」と同様に「通所型サービスB」を提供する介護予防の場にもなっています。

コミュニティカフェとしては子育て中の方も多くいらっしゃるの、利用者の方はマイナス1歳（妊婦）から101歳までとかなり幅広いですね。

余談ですが、シニアの地域活動支援という今回のテーマで言いますと、私自身も最近、地元の大倉山で「港北区老人クラブ連合会」に入れていただきまして、女性部部員として活動を始めました。

2. 「新型コロナ禍」で活動はどうなったか

会場や食事確保に苦労、屋外や手紙などの工夫

<司会>

みなさん、各地域で介護予防活動や情報発信などを積極的に展開されていますが、今回の新型コロナウイルス禍では、大きな影響を受けたのではないのでしょうか

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

下田地域ケアプラザの地域コーディネーターとして、これまで自主的な講座を企画したり、地域の方と一緒にイベントを開いたりしてきました。

認知症を正しく理解していただき、自分のできる範囲でさまざまな活動を行う「認知症サポー

ター」という事業が全国で行われていますが、そのサポーターを増やす「認知症サポーター養成講座」を下田地域ケアプラザでも企画しており、これまで地域の住民や民生委員さん、時には近所の日吉台西中学校（日吉本町5）の演劇部の生徒さんと一緒に開催してきました。



2020年に20周年を迎えた下田地域ケアプラザは日吉駅から徒歩約20分の場所にある

また、今年（2020年）は8月で下田地域ケアプラザが開館20周年を迎えるので、前年からイベント準備を行っていたのですが……。

新型コロナの影響で、そうした企画やイベントは全部流れてしまいました。

<本間克之さん:フリーペーパー『えがお』代表>

私も2016年から「認知症サポーター養成講座」を毎月開いており、特に『えがお』を発行してからは大豆戸町や菊名周辺の会場をお借りし、かれこれ30~40回にわたって開催してきました。

今年に入ってから、横浜市がオンライン開催を認めてからの市内初のオンライン開催を実施した実績もあります。

また、今年4月には、「トレッサ横浜」（師岡町）さんのスペースをお借りし、地域で活動しているシニアの方が参加して楽しめる企画として「えがおまつり」を開催する予定でした。

昨年秋からずっと準備を進めていたのですが、4月7日に「緊急事態宣言」が出され、外出自粛となりましたので、当然ながら開催はできません。最初は6月に延期を決めましたが、それも難しいので再延期となった際にオンラインでの開催を決意しました。

「えがおまつり」はオンラインでということで、お手伝いいただく18人の“実行部隊”を組織しました。メンバーは主に30代から50代の人ですが、そのなかに70代~80代の方にも、6人ほど入っていただきながら準備を進め、10月11日に無事開催できたところでした。



港北区内でも「認知症サポーター」の普及啓発活動が積極的に行われている（横浜市のまちかどケア推進会議による「認知症サポーターガイドブック」より）

<鈴木智香子さん:NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表>

やはり、“同じ場”に集まることができないという変化は大きいですね。人が多くなるといけませんので、「大倉山ミエル」を訪問した親子のみなさんが自主的に「じゃあ野外で、公園で遊ぼう」という動きや、「とにかく人数を少なく、活動の回数を多くする」といった工夫も見られました。

また、介護予防活動の「通所型サービスB」のなかには、ランチも兼ねた活動もあるのですが、参加人数をかなり減らしていますので、人件費をかけて調理することは難しくなりました。

そのため、ランチは、近くで同様の活動「いきいき夢サロン」を開いている「合同会社どりいむ」（大倉山1丁目）さんから主菜と副菜を届けてもらい、私たちはご飯とおみそ汁だけを用意するという形で開いています。



大倉山4丁目の住宅街にある一軒家を使った「大倉山ミエル」

<岩田聡子さん:「居場所づくり濱なかま」代表>

先ほどからお話に出ているサービスBの通所型支援「とりやまの郷」では、私たちも会場の確保という面で苦労がありました。

鳥山町にサ高住（サービス付き高齢者住宅）と呼ばれる高齢の方専用の賃貸住宅「そんぽの家S新横浜西」（SOMPO ケア株式会社運営）という施設があるのですが、「とりやまの郷」はこれまで、同施設のダイニングをお借りして、入居者や地域の方も交え20人～30人が参加するサロンを行っていました。

しかし、新型コロナ禍以降は感染予防のため、そんぽの家へは入居者以外の人が入りできない状態となり、参加者さんとの交流が断絶されてしまいました。

そこでまず、40人ほどの入居者の方に、手紙を出すということを4月ぐらいに始めたところ、「コロナ禍で誰とも接点を持っていない」という入居者さんにとっても喜ばれました。

また地域の方に対しては、緊急事態宣言が解除された後、「まずはお散歩から始めよう」と考え、どこか一カ所に集うのではなく、付近を散歩する活動から再開しました。



今は鳥山町公民館をお借りし、毎回5人程度の方に集まっていたいただき、スタッフも含め10人ぐらいの規模で通所型支援サービス「とりやまの郷」を開いているところです。

介護予防につなげる「通所型サービスB」も少人数で開いている（郷づくり濱なかま Facebook より）

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

私の仕事は、下田地域ケアプラザに地域の人に集まっていただき、交流をしてもらう、ということが大きなミッションでした。

ところが、新型コロナの影響で180度がらっと変わってしまった。今まで自分たちがやってきたことが全部“三密”に当たってしまうわけで、半年間近く何もできなかったというのが現状です。

半年間の間、どうすれば“密”を避けた交流活動ができるのかを考え続け、今は「健康ウォーキング」と題し、建物の外に少人数で集まってもらい、短時間で交流していただくという形で、活動を少しずつ増やしています。

また、今まで40人くらい集まって開いていた交流の場「高齢者サロン」も規模を半分以下に縮小し、調理室で作っていたランチは、近くの飲食店に出前をお願いする形で再開しました。

今年夏ごろから下田町内の公園で、毎週木曜日に「ラジオ体操」も開催しています。午前中は近くの保育所の散歩場所や小学校の課外活動の場にもなっていますので、結果的に多世代交流ができているのかもしれない。

「毎週木曜日の10時に公園で」ということだけを覚えておいていただいて、10分から15分かけてラジオ体操を2回してすぐに解散という形です。“三密”を避けて短時間での開催としたので、男性の方にも参加しやすいようです。みなさんの習慣となりつつあるのは嬉しいですね。

3. 緊急事態下で有効だった連絡手段とは

会場や食事確保に苦労、屋外や手紙などの工夫

<司会>

コロナ禍で最も有効だった連絡手段や情報発信について、団体内での連絡手段と、参加者の方に対してはどのように情報を発信したのかを教えてください

<岩田聡子さん:「居場所づくり濱なかま」代表>

「シニア」と呼ばれる方々も全員がスマートフォン（スマホ）を持っていただき、通信アプリ「LINE（ライン）」は使えるほうがいい、という考えから、5年ほど前から地域で「スマートフォン教室」を開いてきました。

サービス開始当初、こちら（城郷小机地域ケアプラザ）に相談したところ、この地域のスマートフォン利用に関するアンケートを取っていただいたのですが、この地域では「スマホは必要ない」と考える方が大半という結論に至りました。

もしかすると「地域性」かもしれない、との思いから隣の都筑区にあるケアプラザさんに話したら「やってみましょう」となって、教室が3つもできる成果も出てきました。

その後、社会環境の変化などもあり、城郷小机地域ケアプラザや岸根町内会などでもスマートフォン教室を始めました。結果として港北区で始めたのは遅かったですね。

それでもコロナ禍の前に、何人もの方とLINEでつながることができたので、お散歩に誘う、

様子をうかがうなど気軽なコミュニケーションを継続することができました。

スマートフォン教室を通じ、高齢層の方に向け、スマホをいかに楽しく使うかということをお伝えできたことは、非常に有効だったかなと思います。

また、運営メンバーの間ではオンライン会議システム「ZOOM（ズーム）」を使っています。4月や5月の外出自粛となっていた時期にも顔を合わせられるということで、すごく安心感がありました。

今回の「つなぎ塾トーク」は
1時間30分超にわたって
行われた



<鈴木智香子さん:NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表>

私たちの「大倉山ミエル」でも、“IT講座”としてスマートフォンなどの講習会を月に1回、10年近くにわたって開いてきました。菊名で「ワークショップ・ピリオド」を主宰されている小林富夫さんに講師をお願いしています。

最近の講習会では、コロナ禍となったので、「みんなとつながりたいし、孫にも会えないので最近使ってなかったSNS『FACEBOOK（フェイスブック）』や『LINE』の利用を再開したい」という80代の方が来られ、何度かの講習を経て使いこなせるようになっていきます。

シニアだからできない、ということではなく、教える側と学ぶ側の双方が根気強さを持ち、学べる場さえ作ればできるようになるということを感じました。

<本間克之さん:フリーペーパー『えがお』代表>

私たちはシニアの方を対象としたフリーペーパーを発行しているのですが、IT活用面で感じていることは、「FACEBOOK（フェイスブック）」の利用者が実は多いという点です。

FACEBOOK内で「港北区の仲間」というグループを作っていますが、ここは参加者が400人を超えています。

10月にオンラインで開いた「えがおまつり」も、ほとんどはFACEBOOKで告知し、さらには、FACEBOOKが提供しているメッセージツール「MESSENGER（メッセンジャー）」を使ってさらに告知し、われわれ運営側のメンバーは「ZOOM」で会議するというパターンでした。

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

先ほど、街カフェ大倉山ミエルの鈴木智香子さんから「マイナス1歳から101歳まで」の方が利用されているというお話がありましたが、地域ケアプラザもシニアの方だけでなく、赤ちゃんからお年寄りまで幅広い年齢層の方が利用されています。

そのため、下田地域ケアプラザでは、若い人向けには短文ブログ「TWITTER（ツイッター）」や施設のホームページ、さらに区とも提携している地域向け SNS アプリ「ピアッツァ（PIAZZA）」も活用し、イベント告知などを行っているところです。

高齢の方向けには、主に広報紙での告知を行っていますが、コロナ禍で民生委員さんが動けなくなったり、町内会・自治会でも回覧板自体が回らない状態となって配りづらい状況になってしまいましたので、街にある掲示板にチラシやポスターを貼って歩きました。参加していただけそうな方には個別にお電話もしています。

4. コロナ禍を経た活動の変化とは

イベントをオンライン開催、「LINE」利用も進む

<司会>

今回のコロナ禍を経て、活動における IT 活用などの面で変化は見られましたか

<鈴木智香子さん:NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表>



WiFi が導入されている地域拠点も増えている(大倉山ミエル、写真は 2019 年 5 月)

「大倉山ミエル」では、利用者の方がインターネットを自由に使っていただける WiFi（ワイファイ＝無線通信）を備えていますので、先ほどお話した 80 代の方は、IT 講座で学んだ知識を生かし、インターネットで昭和歌謡を楽しんでおられますね。

一方、若いお母さんたちの IT 活用面では、写真 SNS の「INSTAGRAM（インスタグラム＝インスタ）」だったり、「TWITTER（ツイッター）」だったりしており、運営者側で全部対応するのは難しいので、得意な方に“先生”になってもらっています。変化という面では、神奈川県助成で米アップル製のタブレット端末「IPAD（アイパッド）」を 4 台導入しました。今後はこれをしっかり活用しながら、“リモート認知症カフェ”をできればと考えているところです。

<本間克之さん:フリーペーパー『えがお』代表>

以前から「えがお」ではシニアの方を対象にスマートフォンやパソコンに関する相談を電話で受けたり、スマホ講座を開催していたりしたのですが、8 月ぐらいからは問い合わせが多くなり

ました。「自宅まで来て教えて」という方には1回1時間あたり3000円をいただいています、「えがおDEおしゃべりオンライン」という企画では無料で受けています。

「港北えがおまつり」はオンライン上で開催した(公式 Facebook より)

また、10月にオンラインで開いた「えがおまつり」は、オンライン会議システムの「ZOOM（ズーム）」を使って行ったのですが、事前に“練習会”と名付けた接続体験を6回にわたって行いました。ZOOMの“オンライン会議”に接続するアドレスを広く公開し、自由に接続していただく形です。

オンライン会議システムへ接続することは、慣れるまでは少し難しい面もあると思いましたが、この時も私の電話番号を公開し、電話でサポートできる体制も整えました。失敗してもいいので、まずはやってみよう！という後押しです。

ZOOMの練習会に参加いただいた人のなかには、新型コロナ後にまったく会えていなかった人とオンライン上で再会ができたケースもあり、「やっと会えた！」とすごく喜んでいる方もいました。

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

港北区内には「地域ケアプラザ」が9カ所（新吉田・篠原・高田・下田・大豆戸・樽町・城郷小机・日吉本町・新羽）に置かれ、それぞれ、横浜共生会（新吉田・下田・樽町・新羽）、横浜市社会福祉協議会（篠原）、緑峰（りよくほう）会（高田・日吉本町）、横浜市福祉サービス協会（大豆戸）、秀峰（しゅうほう）会（城郷小机）といった社会福祉法人が運営しています。

運営法人の考え方や、利用者・地域の特性などによっても、IT活用の度合いは若干異なるのですが、横浜市は今年9月に新型コロナ対策の補正予算で、地域ケアプラザがWIFI環境を整備する際には助成を行うことを決めるなど、市もIT活用を後押ししている状況です。

下田地域ケアプラザでは、「ZOOM」を使った講座を開催してみました。先日開かれた「男の料理教室」では、調理室に講師であるシェフの方だけ来ていただき、隣の広い多目的ホールに10人ほどの受講者の方が集まり、調理の様子を大画面のスクリーンで見るといった形にしていたんですね。

これなら“三密”も回避できるし、講師の作っている料理をアップで見ることができ、実際に見やすい。料理もその場で一緒に召し上がることも可能です。ITを活用して新たな形の催しができたことは、非常に良かったと感じています。



「城郷小机地域ケアプラザ」のように地区センターなどと併設している施設もある

<岩田聡子さん:「居場所づくり濱なかま」代表>

両者、城郷小浜地区ケアプラザ・真根町内会

スマホ写真講座 城郷小浜地区ケアプラザ・真根町内会

～LINE 岸根倶楽部～ <全5回>

今回の講座は、基礎的な撮影と実践の連続講座です。併せて、各種写真加工機能の活用も学びます。撮影に自信が持てるようになります。本気で写真撮影したい方、出来ること生活もイキイキと！家族や仲間との絆を深めたい方！

【日程】2019年5月～6月 【時間】10:00～12:00

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
5/27(月)	6/3(月)	6/17(月)	6/24(月)	目標達成講座

【講師】岩田 聡子氏
城郷小浜地区ケアプラザ・真根町内会
【参加費】1,500円(税別)
【定員】20名(先着順)
【申込受付】4月22日(月)が締め切り
【会場】岸根倶楽部

【プログラム】

- ① 写真の撮り方を学ぼう！～構図を学ぶ～
- ② スマホでキレイに撮るポイントを学ぼう！
- ③ 撮影に出かけよう！～実践・経験の連続～
- ④ 撮った写真を印刷してみよう！スマホで送ってみよう！
- ⑤ 最終回 自撮りを発表してみよう！

【会場】城郷小浜地区ケアプラザ(5階) 電話 045-478-1133

城郷エリアでもさまざまな形でスマートフォン講座が行われてきた(過去のチラシより)

デビュー”したところ、お孫さんからすぐにフォローされました。

通所サービスの「とりやまの郷」に来られた際は、その時の写真などをインスタに公開して、お孫さんに見てもらって「いいね！」が付き喜んでおられました。

スマートフォン活用という面では、「将棋アプリ」を自分で入れてみて、「1級になったよ」とか「初段になったよ」と、1人で過ごす時間を楽しんでいる方もいらっしゃいます。

また、お耳が遠くサロンでの話し声が聞き取りづらいという方には「補聴器アプリ」を活用していただいたところ、みんなの話をうまく聞き取れるようになったというケースもありました。ソーシャルディスタンスの保持が重要となったコロナ禍以降は、筆談と併用した運用を行っています。

5. 支援活動の「これから」と「今後」

団体や専門家など、区内で連携し対応の幅を広げる

<司会>

シニアの方の活動を支援する現場でも、次第にIT活用が広がっていることを感じさせられました。最後に今後の抱負などを含め、他の地域団体への広がりや連携など、一言ずつお願いできればと思います

<本間克之さん:フリーペーパー『えがお』代表>

高齢の方のなかには、足腰が悪くなって家から出ることができない人もいます。フリーペーパー『えがお』は、そうした方々にも情報を届けるため、新たにケアマネジャーさんや訪問看護事業所、区の医師会や歯科医師会、自治会・町内会や民生委員といったみなさんに助けていただいているところです。

また、休止していた地域交流の場「港北えがおカフェ」を菊名駅東口のカフェを会場にこれから再開に向けて準備しています。

「港北えがおカフェ」は当初、高齢者向けとして開いてきましたが、今後は認知症当事者や介護者や関わりのある家族、ケアラーさんたちが集まれる場所にできればと願っています。

「紙」という媒体を発行している強みを生かしながら、新型コロナ禍を乗り越えるため、これからも頑張っていきます。



本間さん(左)と井上さん

<井上駿さん:横浜市下田地域ケアプラザ>

今「認知症カフェ」の再開へ向けて動いているところですが、参加される方やボランティアの方にも新型コロナの不安を取り除きながら、安心して利用できるように準備をしています。

最近「お散歩会」という企画を初めて行いました。

「港北区生活支援センター」（心の病を持つ方が地域の中で生活することを支援する鳥山町の専門施設）さんと隔月で開いていた「おはなしもだ」という心の病を持った方やご家族の方のお話し会の一環として、下田町内にある「日吉の森庭園美術館」（下田町3丁目）へ出かけるという内容です。

今回は広報に工夫をこらしまして、引きこもりや心の病などで生きづらさを抱えている方の中でも比較的若い世代が集まる「虹色畑クラブ」（高田町周辺の農地などで活動）さんなど、若い方が集まる団体にチラシを配ったところ、20代から40代の方に集まっただけでした。

今後もコロナの影響は続きますが、さまざまな形で工夫しながら、企画していきたいと思っています。

<岩田聡子さん:「居場所づくり濱なかま」代表>



鳥山町は城郷地区の真ん中に位置する(鳥山バス停付近)

の相談がすごく多い。なかには、発達障害だったり、ちょっと問題を抱えている子もいたり、

港北区の端に位置し、神奈川区や緑区と接する城郷地区（小机・鳥山・岸根）は、どこか「区役所から忘れられている存在」にも感じられます（苦笑）

なので、地域で色んな方と連携することは重視してきました。鍼灸師さんとか調剤薬局さんとか、地域団体に限らずさまざまな方からご協力をいただいています。

また、今回のコロナ禍によって不安定になっている人も目立ちます。

私は小・中・高校生の子どもがいてもあり、不登校の子をもつお母さん方から

私 1 人だけでは受け止め切れないケースもありますので、「港北区生活支援センター」や地域ケアプラザといった専門家の方がいる施設も巻き込みつつ、活動を展開しているところです。

城郷地区で言いますと、小机には「ホッとカフェ」（小机駅近くで地域の人が集まれるコミュニティカフェ）、岸根には「COCO（ココ）しのはら」（岸根公園駅近くの篠原町にある地域福祉交流スペース）と、地域の人気軽が集まれる拠点が開設されているのですが、ちょうど真ん中の鳥山町にはありません。鳥山町にもそうした拠点をもちたい、との思いがあります。



鈴木さん(左)と岩田さん

<鈴木智香子さん:NPO 法人「街カフェ大倉山ミエル」代表>

大倉山ミエルは以前から「熊野の森もろおかスタイル」（師岡町周辺で活動）さんや「菊名みんなのひろば」（錦が丘）さんなど、大倉山周辺のさまざまな団体の方と連携して活動してきました。隣の大曽根エリアにも団体ができるのではないかと期待があり、もちろん連携できればと思っています。

活動面では、まちづくり支援を行う NPO 法人の「横浜プランナーズネットワーク」から支援を得て、「みんなの地域たすけあい つながりマップ」を制作し、大倉山や大豆戸、菊名などの施設をわかりやすく紹介する取り組みも行っており、このマップをさらに進化させながら、地域での連携を強化していきたいと考えています。

今回のコロナ禍では、樽町エリアにて「まちの相棒プロジェクト」を展開されている、ぼうだあきこさんとともに、妊婦・赤ちゃんのいる家庭に向けて港北区内の情報を発信するサイト「ここみて港北」を今年（2020 年）5 月に立ち上げたところです。

また、最近入った老人クラブでは、これまで交流のなかった方々ともお会いする機会ができそうですので、自らもシニアと呼ばれる年代に近づいた一人として、新たなつながりを生み出していきたいと願っています。

<司会>

区内でさまざまな方が上手につながって、より発展的な方向へ果敢にチャレンジしていることが伝わってきました。本日は長時間にわたってありがとうございました

（「つなぎ塾トーク」第 5 回：開催日 2020 年 11 月 18 日）



つなぎ塾トーク
第6回の開催内容

どうする、コロナに負けない地域ビジネス・企業活動

コロナ時代の事業継続・ピンチ回避のヒントとは



港北区は、都心企業へ通うためのベッドタウンとしての側面が強い街であり、必ずしもビジネスや起業の地としては認識されていないものの、新羽や綱島エリアには、業界で一目置かれる技術を持つような企業も目立ちます。加えて、新幹線駅である新横浜では、利便性の高さから全国系企業が本社を置くケースも見られます。

ただ、それらの企業は、企業間取引（BtoB）を中心とした事業展開が中心で、地域とのつながりが強固ではない業種・業態が多いのも現状です。

一方で株式会社だけでなく、商店や飲食店、NPO 法人や社会福祉法人などの形態を問わず、地域とつながりを持ち、地域経済に貢献を果たしたうえで事業を発展させようという「地域貢献事業（ビジネス）」の展開を試みる事業者も少なくありません。

2020年3月以降の新型コロナウイルスの影響により、各事業者は、休止・縮小・継続など影響は一様ではありませんが、総じて苦境に立つ状況です。

こうしたなか、新型コロナ禍という苦境にどのように立ち向かったか、特に地域密着の商店街・事業者から、その方法や対処策などについてお聞きしました。

新型コロナ禍での気づき、身近な地域の大切さ



つなぎ塾トークの第6回は、港北区内で地域ビジネスや商店街活動などを担っている3人の方に集まっていただき、新型コロナ禍を踏まえた事業・活動のあり方や、IT活用への道のりなどをテーマに話を伺いました。

今回は株式会社HUG（菊名2丁目）が妙蓮寺駅近くで運営するイベントスペース「古民家HUG（ハグ）」を会場とし、現状報告と意見交換を行っていただきました。

（2020年12月21日開催）

<お話を聞いた方々>

- 猿渡 功さん：綱島商店街「綱島一番会」会長、綱島温泉町自治会会長
- 酒井 洋輔さん：松栄建設株式会社（妙蓮寺）代表取締役、株式会社HUG 代表
- 藤原 雅仁さん：株式会社エネショウ（新吉田東）代表取締役

1. 港北区など地域と参加者の関わり

まちづくりや商店街、障害者の就労支援など担う

<司会>

第6回目となる「つなぎ塾トーク」は、“地域ビジネス”というテーマで港北区内の各地で事業や商店街活動を担われている3人の方にお越しいただきました。また、本日は港北区役所からお二人の課長も同席させていただきますので、ご挨拶をお願いいたします

<港北区地域振興課・小林野武夫課長>

この「港北つなぎ塾」は元々、横浜市全体で「地域づくり大学校」という名で、地域の課題解決などをテーマに団体・事業者の方がつながりながら学ぶ講座を行ってまいり、その港北区版として2015（平成27）年度から継続的に開いてきたものです。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、地域での活動にもさまざまな制約が出ています。そんななかでも、知恵を出し合ったり工夫したりして活動をされている団体や事業者があるということをご紹介できればと願っております。

例年、一同に集まっていたり講座やワークショップの形で開いてきましたが、今年度は新型コロナの影響でそれが難しくなりましたので、区内の各地域で個別に集まっていたり、その内容をホームページなどで公開するという形にいたしました。本日はどうかよろしくお願いいたします。



港北区の小林課長(右)と中村課長

<港北区高齢・障害支援課・中村秀夫課長>

高齢・障害支援課は、高齢者や障害者の方の支援業務を主に行っていますが、その一環として港北区では「セカンドキャリア地域起業セミナー」を開いています。

セカンドキャリア地域起業セミナーでは、社会問題の解決を担う“ソーシャルビジネス”や多世代交流を実践していただくための講座という位置付けで、これまでに松栄建設の酒井さん、エネショウの藤原さんにもお世話になっております。

本日はいろいろと勉強させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

<司会>

両課長、ありがとうございます。それでは、越しいただいたお三方の自己紹介から始めていきます。今日、会場となっているこちらの「古民家 HUG（ハグ）」の運営や、インターネットメディア「菊名池古民家放送局」の立ち上げなど、この妙蓮寺地域で事業活動をされている酒井さんからお願いいたします。

<酒井洋輔さん:松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>

私は生まれも育ちも妙蓮寺でして、銀嶺幼稚園（神奈川区松見町＝道路1本を挟んで菊名2丁目）、港北小学校（菊名2丁目）、神奈川中学校（神奈川区西大町＝港北小学校の一部が学区）と少年期は地元で過ごしてきました。

社会人となってからは、CG（コンピューターグラフィックス）のクリエイターとして都内のIT企業で働いていましたが、実家の事業を継ぐために20歳代で戻ってきて、そこからずっと港北区で仕事をしています。

実家である松栄建設は「住まいの松栄」という名で不動産・建築業を営んでおりまして、妙蓮

寺で創業してから 60 年、私で 3 代目ということになりました。

最近まで会社事務所はお寺さん（妙蓮寺）の上のほう、仲手原 1 丁目にありましたが、今年（2020 年）10 月から菊名池公園の脇にある交差点（菊名橋交差点）、菊名 1 丁目のビルに移ってきました。事務所は社屋の 2 階と 3 階に置き、1 階は洋菓子店「sinonoka（シノノカ）」さんが営業しています。



松栄建設の酒井さん

今日、会場になっている一戸建ての民家は、「古民家 HUG（ハグ）」と名付け、かつてはカフェを営み、現在はイベントスペースとして活用させていただいていますが、私どもの所有ではありません。

妙蓮寺駅にほど近い場所ですので、マンションなどの建物も建てられる土地ですが、地主さんとしては、「何か地域に活かしてほしい」との意向があって私どもに託していただきましたので、別に会社（株式会社 HUG）を設け、地域活動の場として運用しているところです。

また、1 年前から「菊名池古民家放送局」という地域情報を発信する地元メディアを立ち上げました。対

象を菊名、妙蓮寺、白楽という 3 駅だけに絞り「逆にそれ以外の人が見てもつまらないメディアを作ろう」という趣旨で運営を行っています。

地域活動としては妙蓮寺駅前の西側に広がる商店街「妙蓮寺ニコニコ会」で IT 担当のような役割を担わせていただいております。

<司会>

ありがとうございます。続きまして、綱島駅前商店街活動をされている猿渡さん、お願いいたします

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

私も綱島生まれの綱島育ちでして、祖父が「青柳」という和菓子店を綱島で営んでいました。戦時中はパン店をやっていたようです。

「青柳」といいますと、大倉山や元住吉の和菓子店として知られていますが、もとは東京・渋谷の「青柳」から暖簾（のれん）分けされ、各地域でそれぞれ出店したという経緯があります。

“食”にまつわる家業だったこともあり、その後「パーラー青柳」というレストラン業に進出しました。私自身も綱島駅前のビルで「自由亭」というレストランを 2016（平成 28）年まで 30 年間にわたって運営してきましたが後継者が見つか



綱島商店街の猿渡さん

らず店は閉めました。

地域との関わりで言いますと、今はビルのオーナーとして綱島商店街（綱島商店街連合会＝中森伸明会長）の若手組織である「綱島一番会」で会長をさせていただいています。そのため、いかにして商店街に人を集めるか、ということが最大の仕事だと思っております。

<司会>

妙蓮寺、綱島のお二方に続きまして、新吉田を拠点とされているエネショウの藤原さん、自己紹介をお願いいたします

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>



エネショウの藤原さん

私は生まれが東京の五反田ですが、2歳の頃に大倉山へ移り住んでいまして、それ以降は港北区です。

大綱中学校（大倉山3丁目）へ通っている頃に新吉田東へ転居しましたので、卒業したのは新田中学校（新吉田東5丁目）になります。

私自身は鶴見区の市立高へ進学しましたが、娘は地元の県立港北高校（大倉山7丁目）へ通いました。

元々オフィスなど“働く場所”をつくる「ファシリティマネジメント」の業界で仕事をしています。ファシリティマネージャーという資格を取り、公益社団法人日本ファシリティマネジメント

協会の「エネルギー環境保全マネジメント研究部会」に所属していました。そこで「省エネ（省エネルギー）」分野に携わりました。

そうした経緯もあり、2014年に独立した際には「エネショウ」と名付けて株式会社を立ち上げました。省エネを逆にして“エネショウ”です。

起業当初はクリーンエネルギーを広めたい、との思いがあり、水素とマグネシウムを合わせた「水素吸蔵合金（すいそきゅうぞうごうきん）」を使って事業を展開しようと思っていたのですが、その後、それを植物栽培に利用していくことになりました。

現在は障害のある方の仕事と収入を充実させることを目的に、室内で野菜を育てる「有機水耕（ゆうきすいこう）栽培」を事業として取り組んでおります。

有機水耕栽培は、大豆戸小学校（大豆戸町）の目の前にある「しんよこはま地域活動ホーム」という社会福祉法人横浜共生会（新吉田町）さんの施設で導入していきまして、そちらに通われていらっしゃる方々と一緒に野菜を作っています。

室内での栽培ですので、雨が降ろうが真夏の炎天下だろうが冬の寒い日だろうが、快適な環境で野菜づくりが可能です。まさに障害のある方向けで、ともに取り組んでいるところです。

地域での活動としては、新吉田連合町内会の「新生町内会」（新吉田小学校の正門前付近をエリアとする町内会）で今は班長をさせていただいています。以前は、新吉田小学校での子ども向けイベントのお手伝いなどもしていました。

2. 自社事業や活動と地域の関わり

妙蓮寺、綱島、新吉田、大豆戸町などで活動

<司会>

ありがとうございます。みなさんの事業と地域の関わりといった面で、もう少し詳しくお話をいただけますでしょうか

<酒井洋輔さん:松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>



菊名橋交差点の菊名1丁目に移転した松栄建設

私たちはいわゆる“街の不動産屋”ですので、地域との関わりでは「賃貸管理」という事業が一番なじみ深いのではないのでしょうか。妙蓮寺駅前の商店街を歩かれると、例えばテナント募集とか、駐車場の管理とか、そういった内容で「住まいの松栄」という看板を見ていただく機会があるのではないかと思います。

現在、駅前の寺院「妙蓮寺」さんが持たれている建物や土地の管理、また地域の地主さんやビルオーナーさんの物件管理などをさせていただいているところです。一般的な不動産売買として、家を購入さ

れる方の仲介も行っています。

このほか、「分譲建築」の事業もやっています、うちで土地を購入させていただいて、家を建てて販売するという形です。正式な社名が「松栄建設」ですので、もとは建設会社として創業して、今も自社スタッフ8人のうち3人は建築士です。

ほかには、妙蓮寺駅と菊名駅の間あたりの富士塚でシェアハウスも運営しています、この「シェアネスト東横」では60歳代の“おばあちゃん”が週に2回、ご飯を作りに来てくれるのが特徴で、“おばあちゃんの家事付シェアハウス”という一風変わったコンセプトです。

そのためか、色んなメディアに取り上げていただいて、テレビ朝日の『じゅん散歩』という散策番組の「新横浜・菊名・妙蓮寺・大倉山」（2018年6月放送時）が特集された時には高田純次さんにお越しいただきました。

その他の事業では、（今日会場となっている）こちらの「古民家HUG」の管理や地域活動を行う子会社「株式会社HUG（ハグ）」があり、そのつながりで、妙蓮寺の街を舞台に「まちの本屋リノベーションプロジェクト」を2019年6月に立ち上げています。

このプロジェクトは、“まちの本屋の新しいモデルをつくる”という目標で、妙蓮寺の駅前商店街にある老舗の「石堂（いしどう）書店」（菊名1丁目）さんとともに始めたものです。

最初の出会いは、当社に雨漏りの相談に来られたのがきっかけでした。建物を見させていただくと建て替えたほうが良いのではないかと、という話になったのですが、建て替えてもビジネスが上手くいってないと、費用を払い続けていくことは難しくなります。

港北区内でも個人で経営されていた多くの老舗書店が店を閉じられたように、書籍もインター

ネットでの販売が中心となり、“まちの本屋さん”の経営は年々厳しくなっています。石堂書店さんもそれは変わりません。

石堂さんと話していくなかで、これからも書店を持続していくためには、「まずは本屋さんのビジネスモデルをリノベーションしましょう」という結論に至りました。

私たちは建築分野を専門としていますが、本のことについては詳しいとは言えませんので、専門家として、港北区内で2014年から出版社「三輪舎」を営まれている中岡祐介さんに加わっていただき、さらには地域の協力者やクリエイターさん、Web専門家の方など多くの方の尽力を得てプロジェクトを立ち上げました。

全国から小口の出資を募る「クラウドファンディング」などを通じて300万円近い出資を得られましたので、このお金をもとに石堂書店の2階に「本屋の二階」と名付けた「コワーキングスペース」（シェアオフィス&読書スペース）を設けたり、書店の正面にあった建物を活用し、アートの展示も行っている「生活綴方」という新たな本屋さんを作ったりと、まちの本屋さんの新たなスタイルとして全国から広く注目いただいております、徐々に盛り上がりつつあるところです。

<司会>

ありがとうございました。今、妙蓮寺でまちづくりのさまざまな動きが始まっていることを酒井さんのお話から実感できました。妙蓮寺周辺の篠原町は古くからの高級住宅街で、文化人が多く住んでいたと書籍『わがまち港北』（つなぎ塾トーク第7回参照）にも書かれていました。まちの本屋さんが進化して、文化の発信拠点となっていくことも妙蓮寺の街ならではのようです。続きまして綱島の猿渡さん、お願いいたします。

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>



2020年3月に一新した綱島駅西口



妙蓮寺駅前の商店街にある「石堂書店」は創業70年の老舗。現在は2階にコワーキングスペースも生まれた

綱島に長年住んできた一人として、街を象徴するものは何かと考えますと「駅」と「温泉」の2つではないかと思っています。綱島は1926（大正15）年に「綱島温泉」（現在の綱島駅）という名で東急東横線（当時は東京横浜電鉄）の駅が設けられ、その後に温泉旅館がたくさんできて栄えたという歴史があります。

温泉旅館があることで、周辺にはお茶屋さんができたり、海苔屋さんができたり、和菓子屋さんができたり、そして飲食店ができたりというところで、今の商店街が形成されました。

ただ、今は温泉も旅館も無くなってしまい、

私が会長をつとめさせていただいている「綱島温泉町自治会」（綱島西1丁目などの自治会）といった部分にその名をとどめているだけで、名残りはほぼ無いんですね。



1951(昭和26)年の開校から70周年を迎えた綱島小学校

もう一度、綱島の歴史を考へながら、商店街をもり立てていこうという感じではあります。

そうした動きのきっかけとなるかどうかはわかりませんが、このほど、綱島小学校が1951(昭和26)年の開校から70周年を迎えまして、記念誌を作りました。

先日、記念式典などの一連の行事が終わりまして、少々“抜け殻”のように感じているのですが、記念誌づくりなどを通じ、何百人というOBやOGの方に関わっていただきましたので、そういった人たちの人となりを知りながら、あらためて綱島の歴史を感じる事ができ、いい機会だったと思っています。

<司会>

先月(2020年11月)、綱島小学校で記念式典が開かれましたが、猿渡さんが実行委員長に就かれ、何年も前からバザーなどで資金を貯めたり、商店街には70周年を祝う横断幕やバナーを大量に掲出したりと、まさに「地域ぐるみ」といった感じで盛り上げていたのが印象的でした。続きまして、藤原さん、よろしく願いいたします

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>

先ほど、酒井さんが「まちの本屋リノベーションプロジェクト」ではクラウドファンディングを使って、300万円近く集められたとのお話がありましたが、私たちも「しんよこはま地域活動ホーム」で、有機水耕(ゆうきすいこう)栽培を始める際にクラウドファンディングを活用しました。

「そんな安くはないお金がかかる」という部分をアピールしたくて、目標金額を1000万円に設定しましたので目標額の10分の1という形にはとどまりましたが、50人以上のみなさんから計110万円超を出資いただき、そのお金を使って昨年(2019年)夏から実際に室内で野菜づくりを始めています。

障害のある方が働いている姿は、街のなかで見かけることは少ないと思いますので有機水耕栽培に取り組む姿をできるだけ地域の方に見ていただき、交流につなげていきたいとの思いもあり

GoodMorning

プロジェクトをはじめ | プロジェクトをさがす | GoodMorning ISSUES | GoodMorningとは? | ログイン | 新規会員登録

障害のある方の「生きがい」と「笑顔」を育てる日本一の室内有機水耕栽培場をつくる！

障害のある方の「生きがい」と「笑顔」を育てる日本一の室内有機水耕栽培場をつくる！

国内の有機水耕栽培場

障がいのある方の雇用と収入確保を目的とした実証プロジェクト

障がいのある方の就労・収益確保を目的に、有機農業を慣れ親しんだ福祉施設内で実現。それを可能にするのが室内有機水耕栽培。作物を育て販売することにより、社会の一員であることを実感し「生きがい」「笑顔」が育ちます。障がいのある方に実証栽培をしてみよう！

目標金額 1,129,000円

53人

完了

FUNDING

このプロジェクトは、2019-05-28に募集を開始し、53人の支援により1,129,000円の目標を定め、2019-07-30に集金を終了しました。

「しんよこはま地域活動ホーム」で有機水耕栽培を始める際にクラウドファンディングを活用

ます。

昨年（2019年）11月には、しんよこはま地域活動ホームのイベント「しんよこ地活の秋まつり」では室内栽培のレタスを披露し、来場した方に試食していただいています。

有機栽培ですから化学肥料や農薬は使っていませんので、皆さんから「すごい味が濃い、しゃきしゃき、しっかりしている野菜だ」という評価をいただきました。

また、菊名神社のとなりにある「野菜レストランさいとう」（菊名6丁目）さんではディナー会も行いました。しんよこはま地域活動ホームで作った野菜をメニューにさせていただいて、招待客に食べていただくという形です。シェフからもすごく褒めていただきました。

最近は視察や問い合わせも増えてきて、新たに就労継続支援型の施設をつくるという方や、地方からは廃校後の校舎でできないかといったお話もありました。つい先日は鹿児島島の方からも問い合わせがありましたので、オンライン会議システム「Zoom（ズーム）」でお話をしようと思っています。



2019年11月の「しんよこ地活の秋まつり」では栽培したレタスの試食会も

<司会>

ありがとうございます。私も昨年（2019年）11月の「しんよこ地活の秋まつり」で早速レタスを試食させていただきましたが、濃く美味だったので、焼肉に巻いて食べたら最高ではないかと思ったものでした。今年（2020年）は開催できなかったのは残念です

3. 新型コロナの緊急事態下での事業・活動は？

個人経営のお店を救うためにどうすればいいか

<司会>

今年（2020年）4月から5月にかけての緊急事態宣言により、みなさんの事業や活動も大きな影響を受けたのではないのでしょうか。どう対応したのかをお話しいただけたらと思います

<酒井洋輔さん：松栄建設株式会社（妙蓮寺）代表取締役>

新型コロナの影響で、個人で経営されているお店を閉じようという動きもありまして、そんなお話を伺いながら、オーナーさん（貸主）との間も取り持っていくので、そういう面では大変な部分がありました。

私自身、まちづくりでは個人店が非常に重要だと思っていてまして、猿渡さんが綱島で経営され

ていた「自由亭」もそうでしたが、街には地域の方が経営する個人店があったうえで、そこに全国チェーン店が点在している姿が一番理想的じゃないかなと考えています。



新型コロナの影響が長引くと、特色ある個人店が耐えられなくなって店を閉じざるを得なくなり、体力のある全国チェーン店だけが街に残るといった状況はどうしても避けたいとの思いがあります。

そのため、資力のあるオーナーさんには「新型コロナでテナントさんの売上が下がっていますので、賃料を協力してもらえたら嬉しいです」といったお願いはできる範囲でやってきました。

オーナーさんにとっても空室率が上がりませんし、最終的には街の価値を下げ

ないことにもつながります。

春の第1波は何とか乗り切ったんですけど、また最近は感染者数が増えてきているので、まだ先が見えていないという状況です。

<司会>

都心部は企業のテレワークもあって人が減っていて非常に大変というお話は聞きますが、影響は大きいのですか

<酒井洋輔さん:松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>

仲間の不動産屋さんから聞いたのですが、都内でチェーン店などの店舗を扱っている方によると繁華街はビジネスモデルが成り立たないとの考えからチェーン店の退店リスクが高まっている一方で、ローカル駅へ出店する方向に転換し始めているとの話もあります。

そういう流れも出てきたので、ベッドタウンの駅に関しては、今まで都内にしかなかったようなお店の小型版が出てくる可能性も出てきたかなとは思っています。



妙蓮寺駅の駅前に広がる商店街(2020年11月)

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

私も先日、ある全国チェーンの事業部長さんと話をしたのですが、やはり都内のターミナル駅から撤退したというお話はありましたね。学生さんも訪日客もいないので苦しいということでした。地方の駅には店を残して、賃料の高い都心から撤退する、といった流れになっているようです。

<司会>

なるほど、都心部は大変な状況です。綱島も駅前を中心に飲食店の数が多いのですが、状況はどうですか

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

綱島でもほとんどの飲食店は厳しい状態です。もう数件、商売をやめられていますし、今度の“第3波”が来たらどうなるのか…。家賃交渉も、地主さんにもそこまでの余裕があるかというところもあります。



<司会>

綱島で活発に行われている商店街や街のイベント開催も厳しかったですね

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

綱島は夜を主戦場とする飲食店も多く、新型コロナ前は賑わっていた(2019年6月)

綱島では2月に綱島市民の森(綱島台)の「綱島桃まつり」から始まり、3月は綱島公園(綱島台)で「綱島公園桜まつり」、夏は西口商店街での「ナイトフリーマーケット」や「綱島サマーフェスティバル」など、自治会・町内会主催の催しも含めると毎月1回は何らかの行事をやっている街でしたが、今年(2020年)は、ほぼ中止です。



商店街の若手が集まる「綱島一番会」では、毎年、綱島サマーフェスティバルの開催を主導しているのですが、今年は初めて中止になりました。しょうがないから中止になったこと自体を宣伝しちゃうということ、チラシを作って配ったこともありましたね。

夏の恒例となっている「つなしまサマーフェスティバル」も2020年は開催できなかった(2019年7月)

<司会>

藤原さんの有機水耕栽培は、新型コロナウイルスの影響はありましたか

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>

この取り組みは、地域の方々に広く見ていただくことが大事だと考えていましたので、春から

試食会などのイベントを企画していたのですが、残念ながらすべて中止とせざるを得ませんでした。

ただ、Facebook や Instagram（インスタグラム）、Twitter などの SNS で情報は発信し続け、また Zoom などを使って興味を持たれた方とは直接お話しするようにはしています。

4. 新型コロナ禍での IT 活用をどうしたか

リモート勤務が地元にもたらす可能性

<司会>

ありがとうございました。皆さん、何らかの形で新型コロナウイルスの影響を受けていたことが分かりました。今、藤原さんから新型コロナ禍で人を集めたイベントが難しいので、SNS での情報発信を続けているというお話が出ましたが、今回の緊急事態宣言下ではどのように IT を活用しましたでしょうか

<猿渡功さん: 綱島商店街「綱島一番会」会長>

商店街のメンバーも事務局でも IT 機器は買うのですが、みな近い場所で商売をしていたり、住んでいたりしますし、付き合いも長いので、活用する前について実際に会ったほうが早い、ということになってしまいます。

<司会>

お祭りを見ていると、綱島の皆さんの結束力が強いことはよく分かります。IT 活用の面では、商店街のホームページ「綱島もるねっと」は、1990 年台の後半から「tsunashima.com（ツナシマ、ドットコム）」という分かりやすいドメイン（URL）を取って運営しているように、先進的なイメージがありますが

<猿渡功さん: 綱島商店街「綱島一番会」会長>

綱島は土地柄なのか、街が好きな人は多い気がします。派手で祭り好きというような、そういう血が流れているんでしょうね。確かに商店街ではホームページや SNS での情報発信は積極的です。

ただ、会議をメッセージングアプリ「LINE」のグループトークでやろうとしたことがあったのですが、みんなで変な「スタンプ」を送りあったりしてつい遊んでしまうんですね……（苦笑）

これはいかん、次は「Zoom」で会議をやるぞ、となりました。どうしても慣れない人だけ商店街の事務所に来てください、と言ったら結局、全員が事務所に集まってしまったなんてこともありました。

みんな意思疎通は比較的よくできている間柄なので、支障こそないのですが、IT 活用という面

では課題だと感じています。

<司会>

どうしても顔を直接見たいという思いがあるんですね、お気持ちは分かります。藤原さんはいかがでしょう

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>



有機水耕栽培は室内農業なので、栽培自体には新型コロナの直接的な影響はありませんでした。

ただ、ITの活用面で言いますと、福祉施設はなかなかインターネットでのやり取りが難しい場合もあります。リアルタイムで植物の状態とか知りたいと思うこともあるのですが、業界柄なのでしょうか、職員の方は個人メールアドレスが無いケースも多いのです。

大豆戸小の至近にある「しんよこはま地域活動ホーム」
(2019年11月)

<司会>

福祉分野は現場に出ておられる方が多いせいでしょうか、IT活用面では施設ごとにも温度差がありますよね。新型コロナ禍での事業について、酒井さんはいかがですか

<酒井洋輔さん:松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>

不動産や関連業界を俯瞰してみますと、外出自粛で皆さんが外へ出られなくなった影響もあって、リフォームなどの面ではすごい忙しくなっているんですね。私たちも含め、それはたまたま新型コロナ禍でも生き残れる業種だったというだけで、努力で何とかなかったかということ、そんなことではないと正直思っています。

たとえば、飲食店の方はどれだけ努力しても、政府が営業の自粛を要請するくらいですので、頑張りようがないわけです。業界的に恵まれているからこそ、私たちができることをやっていかななくてはならないと痛感しています。

IT活用の面で言いますと、Zoomを通じて“ご来店”いただくこともあり、そうしてお越しになったお客様と普通に今もつながっていますので、引き続き活用しています。

先ほどお話しした、妙蓮寺の石堂書店さんとの「まちの本屋リノベーションプロジェクト」で



は、本屋さんの2階に「コワーキングスペース」を新たに設けることができましたので、都内に通勤しなくても地元で働けるという流れをつくりたいと思っています。

地元の妙蓮寺で働くことで、人口が何十パーセントか増えれば、最終的には地元にお金を落とすとしてくれ、商業が好循環するという、そういう流れをつくるのが可能になります。

<司会>

ありがとうございます。在宅勤務（テレワーク）の広まりにより、都内への通勤が多い東横線沿線ではコワーキングスペースの需要はかなり増えているとの実感があります。勤務先は都内であっても、日中は多くの方が港北区内で業務を行うような環境になれば、地域により目を向けていただけるのではないかと期待しているところです

5. 地域まちづくりと事業を考える

港北区で事業を営むメリットを考える

<司会>

最近、みなさんの事業活動や地域活動で課題と申しますか、考えていることはありますか



<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>

課題ではないのですが、今、研究や実験などに使える「ラボスペース」がほしいと思っているところです。

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

綱島には適した物件は数多くあるのですが、賃料が高いのが難点で、ちょっとした“バブル”状態です。鉄道（東急新横浜線＝相鉄・東急直通線）と新駅（新綱島駅）の開業（2022年10月～2023年3月に開業予定）を控えていて、傍から見ると良さそうに見えるのかもしれませんが。

<司会>

やはりオーナーさん（大家さん）の地域やまちづくりに対するご理解という部分も大切になってくるのでしょうか

<酒井洋輔さん:松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>

その土地に古くから土地を所有されている方がたくさんいらっしゃっても、全員がまちづくりを活動としてできるかというと、難しい場合もあります。たとえば、ご高齢であったり、そうし

た経験がなかったりといった事情もあるのではないのでしょうか。

そのため、「所有」と「管理」は分けたほうが良いのではないかと考えています。

地元の例で言いますと、妙蓮寺の街は、その名の通りお寺の「妙蓮寺」さんの名が由来ですが、もともと寺の境内を無償で東急電鉄（当時の東京横浜電鉄）に鉄道用地として提供したことで、駅ができて、発展した歴史があります。

その妙蓮寺さんが持っている土地の管理をさせていただいているのですが、最近、駅近くの商店街に空き家が出て、更地に戻さなければならなくなったことがありました。

妙蓮寺駅では、「駐輪場」が駅から少し離れた菊名池近くにあって、歩いて4~5分かかるんですね。朝の4~5分は重要なので、駅近くの商店街の土地を「コイン駐輪場」にしませんかと妙蓮寺さんにご提案したところ快諾いただき、ワンコイン駐輪場が新たに生まれることになりました。



駅を降りてすぐに「妙蓮寺」がある

駅近くの商店街内に駐輪場ができることにより、利用者の方の利便性が高まるのはもちろんですが、その方たちが通勤や通学時に商店街を通ることになりますので、新たな人の流れも生まれるんですね。

こうした方向性みたいな部分を土地所有者の方がすべて考えなければならないのは大変です。土地を所有されている方は、先祖代々から守っていくという重い責任感を抱えていらっしゃるケースが多いので、そういう方々にまちづくりの面も含めて全部をお願いするというのは非常に酷な話だと思います。所有と管理を分けるというのが、適切なあり方ではないかと思っています。

<司会>

地主の方は先祖からの土地を守らなければならない、という大きなミッションがあるだけに、「所有」と「管理」は別の方が行ったほうが良い、というのはなるほどと思いました。また、妙蓮寺の駐輪場は水道道に近い菊名池公園プール付近なので、スーパー「オーケー妙蓮寺店」よりも駅から遠い。毎朝の自転車利用となるとちょっと大変な気持ちは分かります。駅近くにコイン駐輪場があれば嬉しいですね。駐輪場の問題といえば、かつて綱島駅の周辺は放置自転車の問題が深刻でした

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

今は綱島駅前で違法駐輪はほとんどありません。また、これから開業を予定する新綱島駅には地下に約1000台規模の駐輪場も設けられる計画となっています。

駅前に放置自転車が少なくなったことは喜ばしいのですが、商店街の立場から考えると、商店街周辺での駐輪は必ずしも“絶対悪”とは言えない事情もあります。綱島駅前違法駐輪がひど

かった時代と比べると、今は商店街の売上が若干落ちているという面も出てきます。自転車で気軽に訪問しづらくなってしまったんですね。

駐輪場というのは人の流れが変わるんです。流れが変わるということは、喜ばれる人もいる一方、残念だと思える人もいて、商店街としてトータルに考えるとなかなか難しい面もあります。

そういう意味で、酒井さんが妙蓮寺さんのご理解を得て、商店街にコイン駐輪場を新設されたことを聞いたのは、興味深かったです。

<司会>

ありがとうございます。藤原さん、地域と事業などの面で何かお話をいただけますでしょうか

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>



以前、私どもは関内に事務所を構えていたのですがやはり横浜市の中心部ですので、つながりやネットワークは築きやすい面がありました。港北区ならではのメリットとは何か、という部分を考えてみたのですが、私の場合は、地元の法人や団体とのつながりでしょうか。

今回、こうしたイベントへ出させていただいたのもそうですし、港北区は「ものづくり企業」が多く、室内農業にも使える「LED」を作っているメーカーが綱島にありますので一度相談をしてみたい。

また、最初に有機水耕栽培を導入していただいたのも新吉田に本部を置く横浜共生会さんの施設でした。地元こだわることによって、逆に運が向いてきたというか、事業の展望が開けてきたなと最近すごく感じています。

<司会>

港北区の企業がつくった機器を使って、区内の福祉施設で室内農業を営み、区民が野菜を消費する、そんなサイクルができればいいな、と願っています。猿渡さん、地域と事業という面で何かありますか

<猿渡功さん:綱島商店街「綱島一番会」会長>

地域で飲食店を30年間やってきまして、今だから思うのは、地域で繁盛する飲食店をつくるのは、そんなに難しくないのではないかとことです。

シンプルに考えると、おいしい料理を作り、それに見合った値段で提供しお店が小ざれい——そんなところですかね。これさえできていれば、お店は繁盛するんです。立地はあまり関係ないです。この3つのうちの2つがだめで、1つが飛び抜けて良くても繁盛するはずですよ。

もう一つ大切なことは、やっぱり地域で人と人とのつながりを作ることです。一番手っ取り早いのは、その街で開かれている行事にはすべて顔を出す、ということでしょうか。

私の場合、朝の9時半から夜の10時半まで、休憩の1時間以外はずっと調理場にいなけらなかつたのですが、無理やり奥さんに調理場を任せ、PTA だろうが街の行事だろうが、何でも顔を出していました。大変だけど、やれば必ずそれだけのものは返ってくるという実感はあります。

あと、言い方が変ですけども、地域の事業で儲けないことも大事ですね。儲けようと考えてはいけない、ということでしょうか。

新たに飲食店を志す人たちには、そんなお話をしているところです。



綱島駅前のビル2階で猿渡さんが2016年12月まで営業した洋食レストラン「自由亭」

<司会>

地域行事には必ず顔を出してつながりを作り、そして儲けてはいけない、30年間続けてきた方の言葉だけに重みがあります。ありがとうございます

6. 今後の目標・展望、地域での事業に思うこと

港北区で事業を営むメリットを考える

<司会>

最後に今後の目標や展望などをお話しいただければと思います

<藤原雅仁さん:株式会社エネショウ(新吉田東)代表取締役>



「しんよこはま地域活動ホーム」での有機水耕栽培の様子(2020年11月)

今、取り組んでいる有機水耕栽培は、誰でもどこでも野菜を作れるという特徴があります。現在は障害のある方に作っていただいています。今後は高齢の方など幅広い層に挑戦していただきたいと考えています。

また、提供者側としては単に「作る技術」を売るだけでは絶対にだめだと思っていて、途中で挫折することのないよう、サポートの部分に力を入れていきます。

加えて、私自身が福祉の現場をよく理解しておかなければならないという思いがあり、今、自閉症の方が5人ぐらいで暮らしている横浜共生会さんのグループホームで、生活支援員として定期的に勤務させていただいているところです。この経験を通じ、分かったことがあります。最初は裁

に勤務させていただいているところです。この経験を通じ、分かったことがあります。最初は裁

培に関する作業を「できそうな人」にやらしてもらおうと考えていたのですが、それは違った。逆に「この人は絶対にできないだろう」と思っていた人に作業をしてもらったほうが良いということです。どんな簡単なことでもいいのでやらせると、簡単なことができると、その人の自信になって、次第に笑顔が出てくるんです。

今、栽培を行っている「しんよこはま地域活動ホーム」でも、今まで笑ったことがなかったような人だったのに、笑顔で作業に取り組んでいただけるようになったことがあり、施設長さんからも「この笑顔を見られただけでも、有機水耕栽培に取り組んだ甲斐があった」と言っていたのは、非常に嬉しかったです。

これからも、有機水耕栽培をさらに広めていきたいと思っています。

<司会>

ありがとうございます。藤原さんが取り組まれている有機水耕栽培、いわゆる「室内農業」は、障害を持つ方の収入源を拡大できる可能性だけでなく、新たなやりがいにつながっていることをお聴きできたのは非常に心強かったです。続いて猿渡さん、お願いいたします

<猿渡功さん: 綱島商店街「綱島一番会」会長>



今までは「良き時代の綱島」ということで済んでいた部分はあったのですが、今後はそうはいかなくて、地道に目の前のことを見つめて考えながら進めていかないと、これからの綱島に発展はないということを感じています。

それは結局、最終的にはコミュニケーションであって、そこを大切にしながら街としてどうやって発展していくかを考えていくべきだと思っています。今、コロナ禍でほとんどの行事が中止になっていることもあって、考える時間がおのずと増えてくるんですよね。そういったなか、いろいろな仕掛けを考えながら、5年・10年・100年と続くようなものを残していきたいところです。

<司会>

ありがとうございます。綱島は大正時代から「桃」「温泉」「商業」と繁栄が長く続いていますし、この先も新駅の開業や再開発で発展が期待されています。それだけに気を引き締めて、長期的な視野で物事を考えていかなければならない、そんなことを痛感させられました。最後に酒井さん、お願いいたします

<酒井洋輔さん: 松栄建設株式会社(妙蓮寺)代表取締役>

今回の新型コロナ禍にうち勝てたとか、乗り越えたとかまったく思っていないのですが、そうは言っても人生は続きますし、日々暮らしていかなければなりません。この間の経験で、何らか

の気づきを得て前へ進んでいきたいと思っています。

今、グローバル化が激しく進んできたと言われていますが、新型コロナ禍もあって、逆に「ローカル化」という面も進んできているのではないかと感じます。

グローバル化が進んだ世界では、1人とか2人とか少人数の「勝者」しか生まないのですが、ローカルという世界はそうではありません。

たとえば、うちの会社なんかは、妙蓮寺ではそれなりにお客様に知っていただけるようになって

はいるのですが、日本全体や世界で考えると全然知られていない。でも、それでいいと思っていて、地域という枠組みのなかで、地域のことだけを考えられるわけです。

日本一や世界一になることが必ずしも良い選択ではなく、地域ごとに、「小さなローカルスター」みたいな企業がたくさん出てくるのが、これからの時代で大事なのもかもしれない、今回のコロナ禍でそんなことを感じました。

私たちも、地域の中で身近な人の役に立つということを大事にしていきたいですし、今後もそうあるべきだと思っています。

<司会>

ありがとうございます。たとえば「IT」のなかでもインターネットの世界などは、トップに躍り出た勝者がすべてを“総取り”とするような傾向が顕著で、そこを目指すことが是とされています。しかし、今回の新型コロナ禍を機に、地域ごとに最適化された「ローカル化」という世界がより大切になってきた、酒井さんのお話からそんなことを教えていただきました。区内に「小さなローカルスター」をたくさん生み出すためにも、私たちも頑張っていかなければと感じたところです。最後に港北区の両課長からコメントをいただけますでしょうか

<港北区高齢・障害支援課・中村秀夫課長>

みなさんのお話を伺い、あらためて「つながり」がキーワードであると感じさせられました。昨年から「セカンドキャリア地域起業セミナー」を開催させていただいたなかでも、少しずつつながりを持ち、そこから広げている方もいらっしゃいます。我々としても、一緒にできることは何かをさらに考えていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

<港北区地域振興課・小林野武夫課長>

今日のお話に出てきたように、今回の新型コロナ禍も逆に新しい気づきを与えてくれ、地元にも目を向けることで新しいチャンスが生まれる、そんな非常に示唆に富んだ内容でした。地域内はもちろんですが、さらに区役所ともつながっていただければ幸いです。本当に今日はありがとうございました。

(「つなぎ塾トーク」第6回：開催日2020年12月21日)





つなぎ塾トーク
第7回の開催内容

コロナにどう打ち克つ？ 港北区の魅力発信

いまこそ「地域の魅力」を発信、コロナに負けないネットワークづくり



港北区には日本を代表するスポーツやエンタテインメントの場として、日産スタジアムや横浜アリーナがあり、観光地としての「新横浜ラーメン博物館」も含め、東海道新幹線の主要駅である「新横浜」は高い知名度を持ちます。

また、慶應義塾大学のキャンパスをはじめとした文教施設が多い「日吉」や、再開発と新駅開業で注目される「綱島」、閑静な住宅地として評価が高い「大倉山」、交通の要衝である「菊名」、寺院を中心に自然が多く残る「妙蓮寺」、著名なものづくり企業が集積する「新羽」など、主要な鉄道駅のあるエリアだけでも語りつくせないほどの特徴や魅力を持っています。

しかしながら、2020年2月下旬以降の新型コロナウイルスの影響で集客は困難な状況となり、地域のイベントもリアルではなかなか開催できない状況のなか、より一層の情報発信力や地域とのつながりによる対応力が求められる事態となっています。

区内外の地域コミュニティにおけるイベントの開催や、インバウンドといった観光などの人的交流も難しい今、あえて港北区の魅力を発信するにはどうしたらよいか、その実例などを5人の方にお話しいただきました。

地域をつなげる場づくり、IT活用イベントも



つなぎ塾トークの最終回となる第7回は当初、「大倉山記念館」（大倉山2丁目）での開催を予定していましたが、2021年の年初から首都圏などに「緊急事態宣言」が出されたため、急ぎょオンライン会議システム「Zoom（ズーム）」を使用した方法に変更しています。

港北区内で地域活動や商業施設の運営などを担う5人の方々にオンライン会議に参加していただき、地域の魅力を発信するうえで、新型コロナ禍での苦労や活動の現状、今後の展望などをテーマに話を伺いました。

（2021年1月13日開催）

＜お話を聞いた方々＞

- 林 宏美さん（公益財団法人大倉精神文化研究所研究員）
- 飯塚 隆子さん（大曾根地区主任児童委員、ひっとプラン港北大曾根地区計画「ハートフル大曾根」推進委員会交流グループ）
- 伊藤 幸晴さん（港北ふるさとテレビ局代表、「港北映像ライブラリ」運営メンバー）
- 三浦 久さん（「トレッサ横浜」プレジデント、株式会社トヨタオートモールクリエイイト常務取締役）
- 西脇 秀人さん（港北区商店街連合会理事、神奈川県宅地建物取引業協会横浜北支部広報啓発委員長、日吉商店街協同組合理事、日吉中央通り会事務局長、株式会社エヌエステート代表取締役）

1. 港北区など地域と参加者の関わり

大倉山・大曾根・師岡・日吉などの区内で活動

＜司会＞

本日は港北区や区内の各地域で、その魅力を発信し続けておられる5人の皆さんに区内の各所から

インターネットを通じてお話しいただくことになりました。当初は大倉山記念館に集まっていた予定でしたが、緊急事態宣言中ということでオンライン会議システムの「Zoom（ズーム）」を使って開かせていただきます。それでは、簡単に自己紹介をお願いできればと存じます。まずは大倉精神文化研究所の林さんからお願いいたします

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>



大倉精神文化研究所・林さん

大倉山記念館で活動している公益財団法人の「大倉精神文化研究所」で研究員をつとめている林です。現在は出身地の小田原に住んでおりますが、以前は大倉山に近い樽町に住んでいました。結婚を機に泣く泣く小田原へ戻り、大倉山まで通っています。

私は生まれが1982（昭和57）年なのですが、偶然にも大倉精神文化研究所を創設した大倉邦彦（1882年～1971年）の誕生日とぴったり100年違いで、研究所の創立記念日も半世紀違いです。運命的な何かを感じて研究所の仕事に楽しく取り組んでおります。

「精神文化研究所」の“精神文化”とは何か、という点を尋ねられることが多いのですが、「歴史」「哲学」「宗教」「教育」「文学」「芸術」といった、人間が精神的な活動で生み出す文化を総称した言葉です。

科学技術は“物”で人の生活を豊かにしていくものですが、精神文化、つまり心を豊かにすることで生活や社会を良くしていこう、との思いから、事業家で教育者の大倉邦彦が大倉山（当時は太尾町）の丘を切り拓き、今から約90年前の1932（昭和7）年に研究所と附属図書館（現在の大倉山記念館の建物）を開設しました。

大倉邦彦は大正期から昭和の戦前にかけて活躍した事業家ではありませんが、東洋大学の学長をつとめたり、複数の学校を作ったりと教育活動に傾注し続けました。なお、苗字は同じですが、ホテルオークラでも知られる「大倉財閥」との関係はありません。

2012（平成24）年に精神文化研究所が「公益財団法人」となる際、事業の柱である「精神文化に関する研究」に加え、「地域における歴史・文化の研究と普及」という事業を2番目に取り入れまして、研究所が位置する港北区での歴史や文化に関する研究も行っているところです。

その研究成果としては、1999（平成11）年から区民活動支援センターの情報誌『楽・遊・学』で、「シリーズわがまち港北」という連載を2018（平成30）年まで19年超にわたって続け、『わがまち港北』という3冊の書籍にまとめています。また、大倉山で新聞販売店さんが発行している広報紙にも、「大好き！大倉山」という連載を行ったり、地域からの原稿執筆や講演のご依頼にお応えしたりと、研究所長の平井誠二とともに地域で活動をさせていただいております。



創設者の大倉邦彦氏を紹介する大倉山記念館・大倉精神文化研究所のパンフレット

<司会>

ありがとうございます。林さんも書籍『わがまち港北』の執筆者となっておられますし、特に研究所長の平井誠二さんには区役所をはじめ、区内団体で講演や執筆をいただくなど、お世話になっている人が多いのではないのでしょうか。大倉山の地で「精神文化」という奥深い世界の研究活動を90年近く続けながらも、研究所の創設当初から市民に開放している附属図書館をはじめ、地域に目を向けていただいていることに感謝しています。続いて、大曾根の飯塚さん、よろしくお願いいたします

<飯塚 隆子さん:大曾根地区主任児童委員・「ハートフル大曾根」運営メンバー>



大曾根地区主任児童委員・飯塚さん

私は生まれも育ちも大曾根です。結婚して主人の転勤で13年ほど離れた時期もありましたが、今は大曾根の実家で暮らしています。

2008（平成20）年から大曾根地区の「主任児童委員」をつとめさせていただいてまして、2011（平成23）年以降は区の地域福祉保健計画「ひっとプラン港北」の策定や推進を大曾根地区にて担う委員会「ハートフル大曾根」にも参加しております。

昨年（2020年）度からは地元町内会の会計担当もさせていただいているところで、町内会のことも深く学んでいきたいと思っています。

区内の各地域に「民生委員・児童委員」は数多くいらっしゃいますが、そのなかで子どもに関する支援を専門に担う「主任児童委員」は区内に44人いて、その一人として、地域の「赤ちゃん会」のお手伝いや、未就園児とその保護者のための「おおそねちびサロン」などを開催しております。

また、学校や保育園や区役所の地域担当の保健師さんなどとともに、地域のお子さんと家庭に関する情報共有し、必要に応じて見守りだったり、関係機関への橋渡しをしたりといった活動も行います。

大曾根の民生委員・児童委員が所属する「大曾根地区民児協（民生委員児童委員協議会）」の一員として、毎年秋には「大曾根みんなの福祉まつり」という地域の祭りに参加させていただいたり、高齢者向けのお弁当配達のお手伝いをさせていただいたりしています。

先ほど申し上げた「ひっとプラン港北」の推進委員会である「ハートフル大曾根」では、情報発信・交流のグループに属し、月刊の情報紙『ザ・ニュース大曾根』や年に一度のイベント情報紙『大曾根地区イベントカレンダー』を発行したり、地域の小さなお子さんを持つ世帯向けの『大曾根周辺 子連れおでかけマップ』を作ったりと、“紙”で情報を発信するとともに、ホームページの運営も担っております。2019年からは「おおそねハートフルコンサート」という地域の方による地域交流の



「ハートフル大曾根」のホームページ

ためのコンサートを新たに始めたのですが、残念ながら2020年は開催ができませんでした。新型コロナウイルスの影響で第1回で止まっていますが、今後も続けていきたいと考えています。

また、取材も兼ねて大曽根地区のイベントにはほぼ顔を出して、お手伝いなどをさせていただいております。

<司会>

ありがとうございます。国の公職でもある「主任児童委員」を中心として、多彩な地域活動を担われていることに驚かされました。大曽根の皆さんが作られている「ハートフル大曽根」のホームページは秀逸で、住んでいる方はぜひ定期的に見ていただきたいと願っているところです。続きまして、港北ふるさとテレビ局の伊藤さん、お願いいたします

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>



港北ふるさとテレビ局・伊藤さん

私は出身が東京都港区で結婚を機に1987（昭和62）年から港北区民となりましたので、もう30年以上が経ちました。最初は大倉山に住んでいましたが、今は日吉に住んでおります。

大学卒業後は、衛星通信の中継に関わる仕事を皮切りに、携帯電話の通信技術面や、テレビの伝送といった業務を担う企業でサラリーマンをしていましたが、最後に所属した会社がたまたま外資系だったので副業が可能ということになっており、好きだった映像撮影の仕事も別にしていました。

やはり好きな映像撮影の仕事の本業に、ということで2015年に“脱サラ”して映像専業となりました。

現在は川崎市の文化財団などからテレビ関連業務を担うといった仕事を主にしています。最近では音楽のライブ中継のご依頼も多くいただきます。

地域活動の「港北ふるさとテレビ局」ですが、こちらはサラリーマン時代の2009（平成21）年に、区の「ふるさとサポート事業」（現「地域のチカラ応援事業」）の支援をいただき、自分の住む港北区の地域を題材に映像作品の制作を始めたことがきっかけでした。

現在、港北ふるさとテレビ局として300本くらいの映像作品がありまして、それらの作品を発表する「港北ふるさと映像祭」を2009（平成21）年から定期的に行っています。

一昨年2019年6月の開催で9回目となりましたが、2020年は開けていません。



港北ふるさとテレビ局のホームページ

<司会>

ありがとうございます。作品自体にスポットが当たるので気付きづらい面もあるのですが、区内で歴史や自然に関する貴重な映像作品が数多く作られていて、その多くが「港北ふるさとテレビ局」によるものです。伊藤さんをはじめとした皆さんが作っているということを知っていただけたらと思っております。それではトレッサ横浜の三浦さん、よろしくお願いいたします

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>

私は出身が宮城県石巻市というところでございます。1989（平成元）年にトヨタ自動車に入社しました。東京の調査部とか、名古屋の国内営業部門で主に仕事をしております、直近は1都3県の販売店の担当だったり、北海道の販売店の担当だったりといった経営管理的な仕事をしておりました。

縁がありまして一昨年の2019（平成31）年に、今のトヨタグループの「トヨタオートモールクリエイティブ」が運営している「トレッサ横浜」でお世話になることになりました。2019年6月に前館長の栗原郁男がちょうど定年で退任するということになりまして、私が6月末から「プレジデント」と呼んでおるのですが、トレッサ横浜で館長の仕事をさせていただいております。

そういう意味では港北区とのつながりは、この仕事をさせていただくことでできたということで、今、区についていろいろ勉強させていただいているところです。自宅は川崎市多摩区にありまして、そこから通勤しております。



トレッサ横浜・三浦さん



トレッサ横浜環状2号線の両側に南棟と北棟(写真左)が広がる

ディベロップメント（旧トヨタテクノクラフト）」という自動車業界で有名な企業が本社を置く、トヨタ自動車と縁の深い場所として、トレッサ横浜もその一つということになります。トレッサという“街”の魅力や地域との取り組みは、後ほどあらためてお話いただければと存じます。最後となりましたが日吉商店街の西脇さん、よろしくお願いいたします

<司会>

ありがとうございます。2008（平成20）年に「トレッサ横浜」がオープンしてから約13年が経ち、誰もが知る大型商業施設となっていて、今はトヨタ自動車さんとの関係を知らない方もいらっしゃるかもしれません。簡単に補足しますと、トレッサ横浜の場所（鶴見区駒岡や獅子ヶ谷と接した港北区師岡町）は古くからトヨタ系の拠点が位置しており、今も「トヨタカスタマイジング&

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>

日吉の駅前商店街で2002（平成14）年から不動産業を営んでおります。現在は大田区の久が原

に住んでいますが、その前は日吉本町在住でした。

現在、日吉駅前商店街の「中央通り」に所属し、駅前から放射状に広がる通り（普通部通り・中央通り・浜銀通り・サンロード）と、日吉郵便局がある通り（メイルロード）の5つの通りにある商店主などで構成されている「日吉商店街協同組合」でも役員をしております。

また、港北区内にある13の商店会（綱島・日吉・小机・大倉山・大曽根・南日吉・下田町・菊名東口商栄会・高田中央商工会・箕輪町商工会・妙蓮寺ニコニコ会・仲手原商栄会・菊名池畔商店街）からなる「港北区商店街連合会（区商連）」でも活動させていただいているところです。

簡単ですが、港北区や日吉の街の魅力や活動については、後でお話しできればと思います。



区商連/日吉商店街・西脇さん



日吉駅前には普通部通り・中央通り・浜銀通り・サンロード・メイルロードの5つの通り会がある

<司会>

ありがとうございます、宅建協会も含めて役職の多い西脇さんですが、地域では日吉駅前の商店街を中心に活動されており、最近では駅前の歩行空間の確保を議論するため立ち上がった「日吉まちづくり推進委員会」など、商店街を核としたまちづくり面でも行政とともに話し合いを行っていると聞いております。イベント開催なども含め、後でお聞かせいただけたらと存じます

2. 「港北区の魅力」をどう感じているか

「海」以外は何でもある、少し田舎の雰囲気も

<司会>

まず最初のテーマです。「港北区の魅力」という面について、普段どう感じておられるか、お一人ずつ伺ってまいります

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>

港北区の魅力を「ずばり一言」ということであると、港北区は「海」以外は何でもあるということではないでしょうか。横浜18区の中では最大の人口35万6000人余(2020年9月)を持って

いて、人が暮らす賑わいもありますし、「トレッサ横浜」さんもそうですが、大きなショッピングモールもあれば、個性豊かな商店街もある。横浜の副都心・新横浜には有名な企業が本社を置き、新羽や新吉田、綱島にはものづくり企業が多く見られます。



港北区内の交通網は発達している

区内の交通網は、東急東横線（日吉・綱島・大倉山・菊名・妙蓮寺）や JR 横浜線（菊名・新横浜・小机）、市営地下鉄「ブルーライン」（新羽・北新横浜・新横浜・岸根公園）と「グリーンライン」（日吉・日吉本町・高田）が伸びて発達していますし、さらに「東急新横浜線（相鉄・東急直通線）」（日吉～新綱島～新横浜～相鉄線方面）の開業も控えます。（裏表紙の地図参照）

バス路線は東急バス、市営バス、川崎鶴見臨港バスを中心に無数に張り巡らされています。

遠くへ移動する場合には、市内で唯一となる東海道新幹線の新横浜駅は区内なので便利です。

中世の小机城をはじめとした古くからの歴史もあって、新羽や新吉田などではおいしい野菜や果物が生産されています。日産スタジアムや横浜アリーナのような多くの人が集まる場所もあります。海以外、本当に何でもあるというのは魅力ではないでしょうか。

<飯塚 隆子さん:大曽根地区主任児童委員・「ハートフル大曽根」運営メンバー>

港北区の魅力ということですが、長く住んでいるわりには区全体を知っているようで知らないもので、大曽根の魅力として話させていただきます。

「横浜」というと、多くの方が都会的なイメージを持たれていますが、住んでいると何となく田舎っぽいといえますか、自分の生まれ故郷だから、そう思うのかもしれないのですけれど。

ただ、大曽根で生まれ、大曽根に暮らしているため、本当に田舎と言える田舎がないので、あくまでも私のイメージとしての田舎という感じです。

<司会>

林さん、飯塚さん、ありがとうございます。横浜だけ「海」も「港」もない港北区は、緑の多い丘は魅力の一つといえるのですが、良い意味で“田舎”にも見えますよね。区内に交通網が張り巡らされ、移動至便な住宅街として発展し続ける一方、どこの地域でも、ちょっと歩けば自然が残っているということで、子育て世帯の流入が多いのかもしれない

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>

サラリーマン時代は住んでいても全く気付かなかったのですが、「港北ふるさとテレビ局」の活動を始め、いろいろな方から話を伺っているうちに、港北区の魅力というのがどんどん分かってきた。それを映像で伝えていきたい気持ちが年々大きくなっています。

先ほど、林さんも言われていましたが、何でもあるというのは1つの魅力ですね。

歴史という面で言うと、いわゆる“開港”とともに発展した関内などの市内中心部へ行けば、横浜の有名な歴史はいっぱいあるのですが、港北区には港北区の歴史がある。でも有名じゃないから広く知られていないので、そこを掘り下げていきたい。

「マイナーだけれども実はいろいろあるよ」というのが、私としては区の魅力かなと思っています。



港北ふるさとテレビ局のDVD

<司会>

ありがとうございます。港北ふるさとテレビ局の映像作品である「綱島温泉物語」や「新横浜50歳の写真集」「港北の伝統芸能『岸根の獅子舞』」「港北の昔ばなし紙芝居『港北区の横綱武蔵山』」「つなしま桃物語」「手作り舟で鶴見川を漕ぐ～鶴見川舟運検証の記録」など、タイトルをいくつか挙げるだけで、港北区の歴史の奥深い部分や伊藤さんの思いが伝わってきます

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>



昨年(2020年)4月に新設された「師岡トレッサ学童クラブ」

人口が増えていて出生数は横浜でも一番多い区であるということは日常から感じております。人口が流入してくるだけでなく、自然に増えているわけです。私どものトレッサにも子育て中のお客様が大変多くいらっしゃるの、自然と活気が出てきます。

また、ボランティア活動をされている方々が多いということも特長ではないでしょうか。今年の4月にトレッサ横浜内で「学童クラブ」が新たに開設されたのですが、ここは師岡町や榎町など地域の方々が委員会をつくって立ち上げ、運営されています。地域の方でこうした施設を設けるといのは非常にめずらしく、素晴らしいことだと感じております。

<司会>

ありがとうございます。三浦さんが指摘されましたように、2019年のデータですと横浜市の出生数は港北区(3484人)が市内トップで、続いて多いのが鶴見区(2359人)です。両区の境に位置し、2区からの来訪者が6割を占めるトレッサ横浜は、まさに子育て世代にとって欠かせない場所となっている気がしました

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>

私が拠点としている日吉駅前と言いますと、駅前には慶應義塾大学(日吉キャンパス・矢上



新型コロナ前は学生であふれていた日吉駅前(2019年4月)

学生に加え、駅前には全国系から地元系まで著名な「学習塾」が多数ありますので、放課後には周辺エリアから小学生も多く訪れ、街の平均年齢がさらに下がります。この“若さ”は他の地域には見られない特徴といえそうです。

3. 新型コロナ前の地域活動

五輪の“おもてなし”意識したイベント挑戦も……

<司会>

昨年(2020年)2月以前、新型コロナウイルスの影響が及ぶ前のみなさんの日常的な活動について、それぞれお話しいただけますでしょうか

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>

地域の歴史・文化の研究と発信という点では、原稿の執筆や講演、またはイベントの開催などが大きな活動となっています。ホームページやTwitter(ツイッター)で広く発信することも大事な仕事の一つです。

歴史を調べている学生さんから問い合わせを受けたり、「学校でお話を」みたいな話も来たりして、つながりが生まれるきっかけになっています。

大倉山記念館の中で行われる年一回の「大倉山秋の芸術祭」や、年2回の開放イベント

「大倉山記念館オープンデー」、2月に大倉山公園で開かれる「大倉山観梅(かんばい)会」といった地域イベントの際は、研究所でも連携して関連のイベントを開いています。

キャンパス)や慶應高校、商店街側には慶應普通部(中学校)があり、箕輪町には日大高校・中学校が置かれていて、区内外から学生・生徒さんが集まってくるので、活気があります。

一方で、街の活動も活発で、自治会・町内会やボランティアなどの団体など、地域の色んな方の顔が見える、という点は魅力ではないかと感じております。

<司会>

ありがとうございます。日吉駅周辺は慶應義塾と日大高校・中学校へ通う中学生・高校生・大学

生に加え、駅前には全国系から地元系まで著名な「学習塾」が多数ありますので、放課後には周辺エリアから小学生も多く訪れ、街の平均年齢がさらに下がります。この“若さ”は他の地域には見られない特徴といえそうです。



港北三大祭りの一つとされる「大倉山観梅会」(2019年2月)

また、「港北昔ばなし紙芝居たまてばこ」さんに紙芝居の実演をお願いして区の歴史を伝えたり、伊藤さんの「港北ふるさとテレビ局」さんには映像を作っていただいたりと、地域とつながりを持ちながら活動を展開しているところです。

<司会>

ありがとうございます。大倉山周辺以外の方には少し分かりづらい部分もあるかと思しますので、補足させていただきますと、梅林もある広大な「大倉山公園」のなかに、横浜市の「大倉山記念館」（写真）が建っていて、その建物内に公益財団法人である「大倉精神文化研究所」と附属図書館が入っている、という関係になります。



もとは創設者の大倉邦彦さんが私財をなげうって設立された「大倉精神文化研究所」の敷地・建物として使われていましたが、創設者が亡くなられた後に研究所の“経営危機”もあって、1981（昭和56）年に横浜市が土地を買い取って「大倉山公園」とし、研究所から寄贈を受けた建物は「大倉山記念館」として市民施設に変えた経緯があります。

今も研究所は独立した別組織ですが、そうした歴史もあって記念館と連携してイベントを行ったり、市民に研究所の附属図書館を開放したりしています

<飯塚 隆子さん:大曾根地区主任児童委員・「ハートフル大曾根」運営メンバー>



鶴見川に近い位置にある大曾根小学校

地域活動を少し振り返ってみますと、地元の大曾根小学校（大曾根2丁目）がきっかけでした。私も卒業生なのですが、子どもが通っている時にPTA活動をさせていただき、その時に地域イベントのお手伝いに行ったら、すごく楽しかったんですね。大曾根小出身の方が多く、昔話で盛り上がり、地域活動の第一歩が良いイメージで始まりました。

PTAを卒業した後に主任児童委員の依頼があったので、「何か楽しそうだ」と引き受けさせていただいて、その後はどんどん活動の幅が広がって、まさに

にのめり込んだという感じです。

その一つが「ハートフル大曾根」で、自分たちの町のために自分たちができることをやろうということで集まっています。ここには、地元の大曾根自治連合会や社会福祉協議会、民児協（民生委員児童委員協議会）、その他の委員さん、青少年指導員さんやスポーツ推進委員会さん、大曾根小のPTAも加わっています。また、障害者の地域活動支援センター「セサミ香房」（大曾根1丁目）さんも参加いただいています。

地域で活動されている方が結集する場となっていますので、特に交流と情報発信に力を入れているところです。情報発信の面では、広報紙の『ザ・ニュース大曾根』やホームページでの地域イベント・活動の紹介を通じ、色んな団体の活動を知ることができ、ネットワークづくりの面でも役立っております。

<司会>

ありがとうございます。地域活動に楽しさを見出し、さまざまな役割を引き受けていただき、さらにはネットワークも広げるというのはまさに理想的です。どこの地域も担い手不足をどうするかという大きな課題に悩んでおられますので、一筋の希望が見えてくるお話でした。

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>



2019年6月の「港北ふるさと映像祭」であいさつする伊藤さん

新型コロナ前の活動ということで言いますと、港北区の良い部分をテーマに自主映像作品を制作していくことをメインとしていました。そうした映像作品を年に1回、港北公会堂で「港北ふるさと映像祭」で発表したり、港北図書館（菊名6丁目）では毎月、定期的に上映会を行ったりしていました。

私たちがつくった映像だけでは上映作品が足りないこともあり、地元のケーブルテレビ局である「YOUテレビ（YOU TV）」（鶴見川の南側が主にエリア）さんや「イツコム（ITSCOM）」（鶴見川の北側が主にエリア）さんにも協力いただき、両局がつくった港北エリアの映像作品も上映させていただいています。また、港北区の映像のポータルサイトとして、「港北映像ライブラリ」を区役所などど運営しており、こちらではインターネット上で映像作品が閲覧いただけるようにしています。

<司会>

ありがとうございます。「港北映像ライブラリ」には過去の作品や、住民の方が提供した古いフィルム映像なども含めて集約され、いつでも観られるようになっていきますので、貴重な郷土資料として広く活用いただきたいところです。

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>

トレッサ横浜は独自の情報を発信するというよりは、施設を使って、いろいろな方に情報発信をしていただくための「場づくり」をさせていただいている立場です。

港北区さんですと、小学生向けの環境防災学習講座「港北水と緑の学校」の展示会や、区制80周年でつくられた「ミズキダンス」を踊るイベントなど、幼児から小学生向けの企画で使っていただいています。また、子育てNPO団体の方も幼稚園・保育園に関する情報発信イベントなどで活発に活用いただいているところです。



新型コロナ禍前はトレッサ横浜の館内外で大小問わず頻繁にイベントが開かれていた

<司会>

ありがとうございます。トレッサ横浜は約 220 のテナントが集まった大型商業施設ですが、師岡や樽町など地元の自治会・町内会との防災協定を結んだり、夏には港北と鶴見の自治会・町内会が協力して盆踊りを行ったりと、周辺住民には買物以外でも欠かせない場となっています。また、区の主要道路である環状 2 号線沿いに位置しているので、車に乗っている方はもちろん便利なのですが、日吉・綱島・大倉山・新横浜の 4 駅とその沿線から路線バス 1 本でアクセスできる環境もありがたいと感じます

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>



2019 年 10 月に駅前中央通りで初開催された「日吉ハッピーハロウィン」

新型コロナ前の日吉における商店街活動で大きなものを挙げますと、2019 年秋に駅前中央通りを 1 日だけ歩行者専用とし、「日吉ハッピーハロウィン」と題したイベントを初めて開催しました。

自治会・町内会や小学校、法人会、子育て支援などさまざまな団体、慶應義塾大学ラグビー部のみなさんなど、地元の多くの方に協力いただき、ハロウィンイベントに加え、「ラグビーワールドカップ (W 杯)」が日

産スタジアムで開催されていたこともあって慶應ラグビー部 OB の方に屋外で講演いただいたり、さらには秋だけ「流しそうめん」も行ってみたいところ、大いに盛り上がりました。

そして去年 (2020 年) 夏は「東京 2020 オリンピック」の開催ということで、慶應日吉キャンパスでは英国代表チームが事前キャンプを行うので、英国に関連した大型イベントを開くべく、慶應大学の関係者をはじめとした多くの方々と準備を進めていたのですが……。

<司会>

ありがとうございます。日吉の街 (日吉・日吉本町・箕輪町・下田町) は人口が多く広いこともあって、一つにまとまったのイベントを行いつらいという面も感じていただけに、2019 年の秋に駅前商店街で行われた「日吉ハッピーハロウィン」は驚きの企画でした。ちょうど英国のイングランドチームがラグビー W 杯の決勝戦まで残っていたこともあって、横断幕を掲げて応援したり、神奈川法人会 (大豆戸町) の地元支部では「流しそうめん」の企画を行ったり、子育て団体の方や商店街のみなさんはイベントを運営しながらもハロウィンのコスプレで盛り上げていたり、集まっていた子どもたちの笑顔が印象に残っています。延期となった「東京 2020 オリンピック」がどのような形となるかはまだ分かりませんが、地域が一丸となって「おもてなし」ができる体制は整った、とハロウィンイベントを見て感じさせられました。

4. 新型コロナ禍の危機と影響

二度目の緊急事態宣言、迫られる対応

<司会>

昨年（2020年）の2月下旬以降、新型コロナウイルスの感染拡大により、日本だけでなく世界中で動きが止まりました。夏から秋は少し緩和していたのですが、現在（2021年1月）はまた「緊急事態宣言」が再発令されたこともあって、1年近くにわたって地域・商業活動が満足に行えない状況です。新型コロナ禍の影響や危機対応といった面を教えていただければと思います

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>



「大倉山記念館」内にある研究所の附属図書館と研究所長の平井さん

祭」が開かれたのに合わせ、コロナ禍になってから初めての講演会を行いました。聴講はこれまでの当日先着順という形をやめて事前に予約いただく形に変え、定員は記念館の運営方針に従って従来の半分にしました。

私たちは研究所でもあるので、外の方に向けたイベントに掛かるはずだった時間を使って、研究活動や資料整理を進めたり、図書館では蔵書点検を行ったりと、今後の発展に向けての準備活動ができたことは幸いだったと思っています。

<司会>

前回（2020年4月7日～5月25日）の緊急事態宣言時は、公共や民間を問わず施設・店舗に対して広く休業要請が行われましたが、大倉精神文化研究所の図書館は港北図書館とともに、かなりぎりぎりまで開けていて、公共インフラとして図書館が担う役割の重要性にあらためて気付かされたところでした。

大倉精神文化研究所は財団として独立した組織ですが、横浜市の施設である「大倉山記念館」のなかで活動していますので、市の方針に準じた対応を行うケースはありました。

一方で独立した組織だからこそ、自らで判断をしなければならない部分も多く、記念館が閉めることになれば研究所の附属図書館も開けられないのでどうするか、講演会や展示会は開けるのかなど考えるべき点は多く出てきました。

春に予定していた連続講演会は翌年度へ延期しましたが、感染状況が落ち着いていた昨年秋に「大倉山秋の芸術

<飯塚 隆子さん:大曽根地区主任児童委員・「ハートフル大曽根」運営メンバー>

町内会のイベントはほぼすべてといえるほど中止です。地域活動の拠点である「大曽根会館」（大曽根2丁目）で毎月開いていた高齢者や子供向けの小さなイベントもできませんでした。

ホームページ（ハートフル大曽根）はイベントの告知や報告をメインに発信していて、盆踊りなどの祭りの際に閲覧数が多くなる傾向がありましたが、こうした内容が無くなってしまって、どうしようかと考えていました。

最近「閲覧板」を見られない方も多くなりましたので、この機にホームページへも情報を掲載するようにしたところ、盆踊りや祭礼時よりも閲覧数が多くなったという経緯があります。

緊急事態なので、大変なことも多かったのですが、住民の方が地域について目を向けるといいですか、関心を持ってもらうきっかけにはなったのかなと感じています。

<司会>

ありがとうございます。この「つなぎ塾トーク」の第1回に出ていただいた樽町のみなさんも、普段はホームページに載せていたイベントなどが無くなってしまったことに苦慮し、定期実施している「防犯パトロール」の様子を写真で伝えてしていると話していました。多くのみなさんが楽しめるイベントなどの内容はもちろんですが、地道な地域活動や生活に必要な情報といったものを発信することの重要性を感じさせられます。

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>



大曽根会館では多数のイベントが企画されていたが開催できなかった(『大曽根地区イベントカレンダー』より)



映像の仕事の多くが音楽コンサートだったので、収入面では非常に厳しくなり、「港北ふるさとテレビ局」の活動では、上映会もできなくなりました。

ただ、運の良いことにインターネット上に「港北映像ライブラリ」という公開場所があり、そちらから配信する形に移行しました。

また、さまざまなイベントができなくなったことで、「動画撮影」の需要が多くなったという面もあり、そういう意味では大きなダメージは無かったといえます。

港北区内の映像を集めた「港北映像ライブラリ」

<司会>

ありがとうございます。港北区の区民祭りとして毎年秋に開催している「ふるさと港北ふれあいまつり」が横浜市内では初となるオンライン開催に挑戦し、その際、各自治会・町内会の映像などで「港北ふるさとテレビ局」による制作作品が目立っていたのが印象的でした

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>



最初の緊急事態宣言では政府からの休業要請に応じ、2カ月近くわたって食品売場以外は休館した(2020年4月)

の方に集まっていたことが難しい状況になりましたので、盆踊りやスポーツイベントなどの開催は基本的に自粛しております。

ただ、展示など静的な企画はありまして、直近でいきますと、地元の師岡小学校さんが、6年生の皆さんが卒業制作で「地域の再発見」というテーマで制作したものの展示会をやりましょうとか、そうした予定はあります。今、できることをやっていきたいと思っております。

<司会>

ありがとうございます。昨年(2020年)の春頃は世界中の誰もが新型コロナウイルスに対する知識がなく、そんななか、いきなり最前線で対応を迫られたということで特にご苦労されたと思います。そして、「人を集め過ぎてはいけない」という環境下で商業施設を運営していくことも大変なことではないでしょうか。一刻も早く、トレッサで賑やかなイベントを楽しめる状態に戻ってほしいと願うばかりです

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>

新型コロナ禍の危機といいますと、2度目の緊急事態宣言が今月(1月8日)出て、まさに今、商店街は危機といえる状況です。夜8時以降は飲食店だけでなく、どこの店も閉じている状態ですので、全然活気がありません。

前回の緊急事態宣言時(2020年4月～5月)を思い返してみますと、今よりさらに先が見え

ないような環境でしたので、日吉の商店街として何ができるのかを懸命に考えました。

当時は、消毒液がまったく手に入らない状況でしたので、消毒や除菌に使う「次亜塩素酸水（じあえんそさんすい）」を各商店に配ったり、駅前でテイクアウトのお弁当を販売する企画を行ったりといった活動を行いました。

一方、商店街の結束力という点では「LINE グループ」を作って情報共有を行える環境となるなど、強化ができた面はあります。



駅前にある銀行の協力で場所を借り、各商店のテイクアウト販売を行った（日吉駅前、2020年5月23日）

<司会>

ありがとうございます。トレッサさんもそうですが、今回のコロナ禍でもっとも影響を受けたのが商店の皆さんではなかったでしょうか。特に飲食店は今も大変な苦勞をされています。そんななかで、今あったように、今回のコロナ禍を経て、商店街の結束力が高まったという部分は少し嬉しいお話でした

5. 新型コロナ禍での IT 活用や情報発信

オンラインで地域イベントに挑戦も

<司会>

コロナ禍での情報発信をどのように行っていたかや、工夫をされた点、地域との連携といった話をお聞かせいただければと思います

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>



大倉精神文化研究所ではインターネット上で所蔵資料などを見られるよう作業を進めている（同研究所ホームページより）

附属図書館の開館状況やイベントの告知などの情報発信はホームページを中心に活用しています。

SNSはTwitter（ツイッター）でも同じ情報を発信したり、加えて所蔵している資料の紹介や、大倉山記念館周辺の様子、例えば「記念館から見える富士山がきれいでしたよ」とか「今、ライトアップしていますよ」みたいなちょっとした情報も発信したりしています。

また、最近では古い絵葉書など、研究所に所蔵する資料を「デジタルアーカイブ」としてインターネットで見ただけのようにする取り組みは強化しています。家にいながら研究ができるような環境を

を整えるデジタルアーカイブの整備、資料へのアクセシビリティ（利用しやすさ）の強化というのは、より強い問題意識を持って、進めていかなければと考えているところです。

<司会>

ありがとうございます。大倉精神文化研究所の附属図書館は来年で90周年ということで、横浜市内では中央図書館（1921＝大正10年開館）の次に古くからの歴史を持ち、ここにしかない貴重な資料が多く所蔵されていますので、デジタルアーカイブの整備は多くの方に喜ばれるはずで

<飯塚 隆子さん:大曾根地区主任児童委員・「ハートフル大曾根」運営メンバー>

私も大倉精神文化研究所さんのTwitterはいつも見えています。家から近いので大倉山周辺の写真が公開されていると親しみを感じます。

ITの活用という面ですと、引き続き「ハートフル大曾根」のホームページでの情報発信は続けていくことに加え、もうちょっとTwitterにも力を入れたいなと考えているところです。

先ほどお話にありましたが、2020年は「ふるさと港北ふれあいまつり」がオンライン開催となりまして、大曾根地区でも港北ふるさとテレビ局さんに地域を紹介する映像作品を作ってくださいました。見ていただいた方から「本当に面白かったよ」とか「よくできているよね」などの声をいただいたのは良かったです。

また、市の市民局が自治会・町内会向けにIT講座を開いていて、私たちも参加しています。初めはなかなか参加者がいらっしやなくて、みんな「えー、無理でしょう」みたいな感じだったんですけど、いろいろ声掛けをさせていただいて、参加者は19名まで増えました。

実際にやってみたら本当に皆さん好評で、楽しそうに使っていて、早速「LINEグループ」を作ったりしたんですが、緊急事態宣言が出された影響で2回目以降は中断しています。こういうことは続けて、インターネットに触れていただく機会を増やしたいなと思っています。



2020年の「ふるさと港北ふれあいまつり」で公開された大曾根地区の映像作品「大曾根10のひみつ」(YouTubeより)

<司会>

ありがとうございます。今回の「ふるさと港北ふれあいまつり」では港北区内のすべての連合自治会・町内会が映像を発表してしまっていて、大曾根の皆さんによる「大曾根10のひみつ」は、結構面白い作品に仕上がっています。大曾根の街には信号機が1つも無い、というエピソードは、大曾根に長年住んでいる方でもなかなか気づきづらいような難問で、映像を見て「確かに！そうだった！」と唸ってしまいました

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>



情報発信という部分では「港北映像ライブラリ」のなかに“ステイホーム特集”というコーナーを作りました。新型コロナ禍で自宅にいる時間が多くなりましたので、今までは販売していたような動画も皆さんに期間限定で無料で見ていただけるようにしています。

新作として、港北区の地域演劇集団スターリンクスによる「オリジナルヴォイスドラマ『小机の重政(しげまさ)』」や、昨年11月に慶應日吉キャンパス内の藤原洋記念ホールで開かれた「港北芸術祭『秋の調べ』」なども追加しているところです。

「港北映像ライブラリ」内に開設中の「STAY HOME 特集」
(YouTube より)

<司会>

ありがとうございます。図書館の上映会で公開されているような作品もインターネット上から見られるのはありがたいですね。最近追加された映像作品の「港北芸術祭」の室内楽コンサート映像は、コロナ禍が落ち着いている時に開かれた数少ない区内イベントです。また、「小机の重政」は舞台となった小机の寺院で“静聴会”という形でも公開されたドラマ作品となっており、こんな状況下でも何とかして楽しめるものを、という熱い思いが伝わってきます

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>

お客様への情報発信という面では、Facebook（フェイスブック）やTwitter、Instagram（インスタグラム）といったSNSでの発信を強化していることと、館内ではさまざまなお願い事もあって表示すべき内容が増えていますので、「デジタルサイネージ」（電子看板）を使って、より多くの掲示ができるように努めています。

また、現金を使わない非接触でのお買い物物を推進するため、スマートフォン決済を強化しようとしています。

このほか、トヨタ自動車などが車の位置情報データを“ビックデータ”として集めていますので、そうしたデータを活用して「どうすれば渋滞を起こさないか」や「告知によって人の動きがどう変わるか」といった実験も行っており、混雑の緩和や密集の防止に役立てていきたいと考えております。



積極的にインターネットでも情報発信を行う「トレッサ横浜」
(ホームページより)

<司会>

ありがとうございます。トレッサ横浜は港北区や鶴見区だけでなく、横浜・川崎の両市内や世田谷区など東京都内の方も含め広範囲から人が集まる場所です。半径5キロ以内に約100万人、10キロ圏内なら約300万人という規模の人が住んでいるだけに、コロナ禍を経て混雑対策の取り組みもより重要となりそうです。車の位置情報データ（ビッグデータ）の活用はトヨタ系の商業施設ならではの興味深いところです

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>

日吉商店街では「Twitter」を運用しており、フォロワー数はまだ500ちょっとで多くはないんですが、新型コロナ以前の1年前などと比べるとページビュー（閲覧数）が上がっています。昨年（2020年）12月16日に慶應大学ラグビー部の方に動画をいただいてアップしたんですけど、インプレッション（表示数）はだいたい2万弱、再生数も3000ちょっとぐらい見ていただきました。

また、IT活用という面では、日吉商店街や地域の会合などで「Zoom（ズーム）」の活用は日常化しつつあります。

先ほどから、昨年11月にオンラインで開催された「ふるさと港北ふれあいまつり」のお話が出ていますが、横浜アリーナから生中継した「コアデイ」には、私たちも区商連（港北区商店街連合会）として、綱島商店街の中森伸明会長や、南日吉商店街の小嶋純一会長をはじめとした多くの方と一緒に出演させていただきました。

区内商店街の各店舗から名物やテイクアウトのお弁当などを紹介させていただいたり、生中継には栗田るみ区長も出演し、実際に試食いただいたりして楽しかったです。

港北区で初めての試みということでしたが、こういった形でのIT活用も含め、いろいろな方法があるものだと実感しました。

また、昨年の夏には港北区と慶應義塾大学の大学院「システムデザイン・マネジメント（SDM）研究科」の皆さんが主催した「港北オンラインラジオ体操」にも参加させていただき、新たなチャレンジに加われたことも意義深かったです。



港北区と慶應大学院が初めて開いた「港北オンラインラジオ体操」にも商店街で参加(西脇さん提供)

<司会>

ありがとうございます。「ふるさと港北ふれあいまつり」は例年のように自治会・町内会を中心とした模擬店ができなかったのは寂しかったのですが、動画配信サイト「YouTube（ユーチューブ）」の生中継では、西脇さんをはじめとした出演者の皆さんによる軽快なトークが印象に残ります。テレビのニュース番組でも取り上げられた「港北オンラインラジオ体操」を含め、短期間のうちにオンラインでイベントを開催できた経験は、今後の地域活動でも広く共有していただきたところですよ

6. 他団体との連携やコラボをどうしたか

貴重な歴史も掘り起こしたイベント連携

<司会>

新型コロナ禍の前後を含め、他の団体との連携やコラボレーションをどのようにしているか、現状についてお話しいただけますでしょうか

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>



横浜アリーナでの大相撲巡業時に行った「武蔵山」の展示は人気を集めた(2019年4月)

最近の連携では、一昨年(2019年)4月の話になりますが、横浜アリーナさんが30周年記念で開いた大相撲巡業「横浜アリーナ場所」の会場では、神奈川県唯一の横綱で、日吉出身の第33代横綱「武蔵山」(1909年~1969年)に関する展示会を開かせていただきました。港北図書館でも展示会と公開講演会を行っています。

また、大倉山記念館の指定管理者との共催で、毎年夏には記念館のギャラリーを会場に「オープンギャラリー」を開催しています。

オープンギャラリーでは、大倉山記念館や研究所の歴史、大倉山駅や地域のまちづくりに関する展示、研究所で

作成した映像と港北ふるさとテレビさんが作成した地域映像の上映などを毎年行っています。今年はコロナ禍ということで、関東大震災や東日本大震災、鶴見川の水害などの災害を乗り越えてきた地域の歴史も取り上げたパネルを新たに作成し、展示しました。

コロナ禍もありますので、これから先、どういう形で地域団体の皆さんとつながりを持って活動ができるのかという点は、模索しているところです。

<司会>

ありがとうございます。横浜アリーナでは18年ぶりとなった2019年4月27日の大相撲巡業は大きく盛り上がり、武蔵山の展示も盛況でしたね。港北図書館で開かれた平井誠二さんによる武蔵山の講演会もすぐに満員となりました。戦前は日本中で人気を誇った郷土出身の横綱に再び光を当て、区内外へ広く知らしめたのは、大倉精神文化研究所と横浜アリーナの連携による功績ではないでしょうか。巡業は昨年(2020年)も4月に開かれる予定で、あわせてさらに深化した武蔵山の研究成果も披露されるはずだったのですが、新型コロナの影響ですべて流れてしまいまし

たので、次の開催時に期待しています。また、大倉山記念館でのオープンギャラリーは、「知」を発するイベントとして、今年も開催を楽しみにしております

<飯塚 隆子さん:大曽根地区主任児童委員・「ハートフル大曽根」運営メンバー>

昨年12月に港北区の商店街全体を歩いてめぐる「こうほくの商店街ちょいより散歩」(11月14日~12月6日)が行われていましたが、その期間中に「大曽根地区こども会」では、大曽根商店街とコラボして「クリスマススタンプラリー」を初めて開きました。

子供たちが大曽根商店街の店をスタンプラリー形式で回って、全部スタンプを集めたら商店街から提供されたクリスマスプレゼントがもらえるという企画でした。

新型コロナ禍もあって、なかなか室内でクリスマス会ができない中で生まれたイベントなのですが、小さなお子さんには保護者

の方も一緒に付いて回って、普段は大曽根商店街になかなか行く機会もない方も、この機に買い物をしている様子も見られ、とても楽しいイベントになりました。最近は大曽根商店街にも魅力的で個性的な商店・飲食店が建ってきていますので、今後も商店街とコラボして、地域の方に知っていただきたいと思っております。



昨年12月に大曽根商店街で行われた「クリスマススタンプラリー」

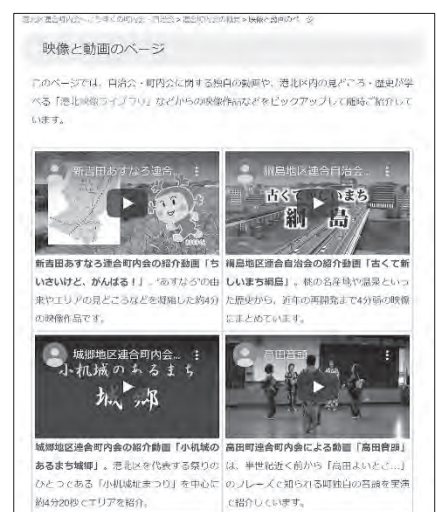
<司会>

「クリスマススタンプラリー」の当日は天候があまり良くないなかでも120人以上の子どもが参加し、大曽根商店街に小さな子どもたちの姿があふれていたのが印象的です。子どもたちはもちろん、商店街会長や商店の皆さんもすごく喜んでおられ、地域と商店街が子どもたちのために力を合わせた良いイベントでした

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>

港北区の団体の方には日ごろからさまざまな面でお世話になっています。昨年の「ふるさと港北ふれあいまつり」では、地域の紹介映像づくりを通じ、これまでお付き合いのなかった自治会・町内会のみなさんとも接点を持ったことは非常に嬉しいことでした。

インターネット上の「港北映像ライブラリ」では、歴史だけでなく、芸術やスポーツ、さまざまなジャンルの映像を公開していきたいと考えていますので、多くの団体の協力を得ながら、「映像図書館」のような存在になればと思っております。



港北区連合町内会のホームページでは各地区の映像作品が一覧で公開されている

<司会>

ありがとうございます。YouTube などでも検索すれば港北区内に関する映像作品は表示されるのですが、「港北映像ライブラリ」のように一覧になっていて探しやすいのはありがたいですね。特に今は区内に関係するスポーツの映像が足りないとのことですので、どんな映像でも持っておられる団体の方はよろしく願いいたします

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>



トレッサ横浜の周辺は自然や見どころが多い(師岡町梅の丘公園より撮影)

今も行政や学校、地域のみなさま方とさまざまな形で連携をさせていただいており、今後も無理のない範囲で幅広く行っていきたいと考えております。

明日も港北区役所さんと港北区商店街連合会(区商連)さん、昨年(2020年)から新横浜を本拠地としてアイスホッケーのプロリーグに参入した「横浜 GRITS(グリッツ)」さんの三者が連携協定を行うということでトレッサ横浜を使っていただく予定でした。(緊急事態宣言の発出によりのちにオンラインで実施)

地域の歴史という話で言いますと、トレッサ横浜では3000人くらいの方が働い

ていますが、アルバイト・パートの皆さんは入れ替わりが大きく、新しく働いていただく皆さんには新たに研修を行っています。

研修の際には、例えば当館が位置する師岡町でいうと、「奈良時代から師岡という地名があったんです」なんていう話をさせていただいているのですが、そういう話題は結構喜ばれるんですね。

近隣の方はもちろんですが、通勤で来られる方も「そういうところなんだ」と学びがあるようです。地域の歴史について、いろいろ教えていただいて、発表や説明ができるような場を作っていければいいなと思っています。

<司会>

ありがとうございます。新型コロナ前の初詣時にはトレッサさんの駐車場も開放していましたが、師岡町内には有名な「師岡熊野神社」がありますし、近くの鶴見区獅子ヶ谷には江戸時代の屋敷が見学できる「みその公園『横溝屋敷』」も置かれています。トレッサ横浜は知人ぞ知る歴史散策の重要拠点ではないかと密かに思っているところです

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>

地域内でのつながりを深める一つのアイデアとして、「地域貢献ポイント」みたいなことがで

きないかと考えているところです。「まちのコイン」というコミュニティ通貨があるのですが、そんなイメージです。

神奈川県では、ポイントを通じて地域のつながりと「SDGs（エス・ディー・ジーズ＝国際社会が共通とする目標）」の普及促進を目指す「SDGs つながりポイント事業」という取り組みを鎌倉市や小田原市で行っています。

こうした先進的な取り組みを参考にしながら、実現を模索していきたいと思っております。



神奈川県が行う「SDGs つながりポイント事業」のホームページ

<司会>

ありがとうございます。SDGs と言いますと「貧困をなくそう」や「すべての人に健康と福祉を」など設定された17の目標のスケールが大きすぎて、日常生活のなかでなかなか意識しづらい面もあるのですが、“地域ポイント”のやり取りという形で身近に感じてもらい、さらには地域でつながりも深めていく、というコンセプトは良いアイデアです。港北区内でも導入できることを期待しております

7. 新型コロナ禍を踏まえた今後の目標

持続可能な地域のつながりを

<司会>

内容が盛りだくさんで時間が押してきました。今後の抱負や目標など、今までお話ししてきたことを踏まえ、お一人ずつお願いいたします

<林 宏美さん:大倉精神文化研究所研究員>



書籍『わがまち港北 3』を区内の市立小・中学校に寄贈した著者の林さん(左)と平井所長(左2人目)(昨年11月)

大倉精神文化研究所が設立されたのはもう90年も前のことですが、みんなが不安の中にいる状況下でも心豊かに暮らせるようにしたい、という創設者の思いがありました。私たちとしては、そんな思いを受け継ぎ、少しでも前進させられるような活動をしていきたいと考えています。

今回の新型コロナ禍では、外出がままならなくなった状況がありますが、逆に地域を見直す時間、あるいは地域を知るきっかけになればと願っています。私たちも、地域の生活が楽しくなる、愛着を持ってもらえるような情報を発信してまいります。

<飯塚 隆子さん:大曽根地区主任児童委員・「ハートフル大曽根」運営メンバー>

ホームページを開設した当初より災害時や緊急時に情報共有をできれば、という考えがありました。壮大なテーマなのですが、そうした際に使えるツールの1つとなれるよう目指していきます。



大曽根地区は長く居住したい意向の住民割合が高い(2020年の「クリスマススタンプラリー」時)

く、すごく嬉しい思いがしました。

それだけ地域に愛情を持って暮らす住民が多いわけですので、地域活動にも興味を持っていただけたらと思っておりますし、私たちも興味を持ってもらえるような活動をしていきたいです。

<伊藤 幸晴さん:港北ふるさとテレビ局代表>

新型コロナの影響がどれだけ長引くのか分からないのですが、先ほどからお話ししている「港北映像ライブラリ」や、私たちの「港北ふるさとテレビ局」のホームページも含め、災害時など他の用途にも活用できないかとの思いがあります。この点は長期的に考えていきます。

直近の活動で言いますと、先ほどトレッサ横浜の三浦プレジデントから師岡町の歴史について触れていただきましたが、ちょうど師岡では連合町内会が30周年を迎えまして、今、依頼をいただき映像の制作を行っているところです。

また、綱島台の旧家で市の文化財にもなっている「飯田家住宅」では、長屋門の茅葺きの葺き替えが始まりますので、このあと、「つなぎ塾トーク」が終わったらすぐに現地へ行って撮影を行う予定です。

このほか、つなぎ塾トークの第5回にも登場されていますが、NPO法人「街カフェ大倉山ミエル」さんと昨年夏に初めて「こどもジャーナリスト養成講座」と題したワークショッ

一方、現状の課題としては、活動しているメンバーが高齢化しているという点がありまして、次の担い手を探していかなければなりません。そのためには、できるときにだけ参加してもらうとかオンラインでの参加も可能とか、そうした形も考えていかななくてはならないと感じています。

大曽根地区では、今まで空き地だったところに新しい家が建ったり、大きな一軒家が代替わりの際に2軒・3軒分の家に建て替わったりして、若い方もかなり増えています。

昨年(2020年)、4年ぶりに行われた「区民意識調査」で大曽根地区は「港北区に住み続ける」「たぶん住み続ける」の合計が8割(81%)を超えていて、港北区の平均(71%)と比べても高



「飯田家住宅」の屋根の葺き替えを高所から撮影する伊藤さん(写真左、2019年2月)

プをさせていただきました。今度はお父さんやお母さんを対象とした講座もできればと考えています。

映像制作はもちろんですが、引き続き区内でさまざまな方と連携しながら活動を行ってまいります。

<三浦 久さん:「トレッサ横浜」プレジデント>

私どもとしては、新型コロナ対策をしっかりと実施し、安心してお越しいただけるような施設づくりを行ってまいります。

加えて、先ほど触れていただいた地域の皆さんとの「防災協定」では、お互いに何ができるのかを具体的に詰めていく作業も必要になってくると考えています。

施設の運営面では、インターネットを使ったEコマース（ネット通販）が年々進展していますが、われわれはリアルな施設として、どれだけ魅力を作っていけるかという点が大事になってきます。

港北区さんとの話では「ウォーキングマップ」とか、館内を歩いていただくと、どれぐらい歩けるみたいな、健康づくり面からそんなアイデアも出ているところです。

今後も買物だけではなく、さまざまな目的で来ていただけるような施設づくりを行ってまいります。



樽町連合町内会との防災協定締結式でトレッサ横浜の三浦さん
(写真左、2020年11月)

<西脇 秀人さん:港北区商店街連合会理事、日吉商店街協同組合理事>



「ふるさと港北ふれあいまつり」の生中継では港北区の商店街をアピールした
(2020年11月、横浜アリーナ)

新型コロナ禍を踏まえた今後の取り組み、ということでは、商店街や町内会といった支援型のコミュニティをさらに活発化させるため、コロナに負けないネットワーク、テーマ型のコミュニティを新たに設立しよう、と思っています。

具体的には緑化活動を目的としたネットワークの設立を考えておりました。緑化を通じて商店街や町内会、地元企

業、大学などのステークホルダー（影響を受ける関係者）と一緒に活躍できるような、そういった持続可能な地域のつながりをイメージしています。

また、区商連（港北区商店街連合会）の立場としては、先日の「ふるさと港北ふれあいまつり」のように、区内商店街の魅力を発信できる場を作っていただけると大変嬉しいところです。

<司会>

みなさん、力強いメッセージをありがとうございました。昨年（2020年）10月から区内各地で開いてきた「つなぎ塾トーク」も今回が最終回ですが、最後にオンライン開催となりました。

2月～3月に聴衆の方を招く形で計画していた「総集編」も新型コロナの状況悪化により、開催できそうにありません。

最後に一同でお会いできない環境となりましたが、こうした状況下でも、今日お話を伺えたことに勇気づけられました。新型コロナの影響はまだ続いています、みなさんのさらなるご活躍を期待しております。

これまで「つなぎ塾トーク」の第1回から第7回まで、ご登場いただいた23人のみなさまをはじめ、ご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。「港北つなぎ塾」も新型コロナに負けることなく、近いうちに再び区内でお会いできる日まで、頑張っていきたいと思います。今回もご参加（閲覧）ありがとうございました。

（「つなぎ塾トーク」第7回：開催日2021年1月13日＝オンライン実施）

2020(令和2)年度「港北つなぎ塾」の案内チラシ。企画当初は2021年3月にリアルな場で「つなぎ塾トーク総集編」の開催を計画していたが、二度目の緊急事態宣言の発出により断念。この冊子を発行することにつながった



港北つなぎ塾

新型コロナ時代の
きずなづくり
地域コミュニケーションの
新しいあり方とは

2020年10月～2021年3月・インターネット公開

港北つなぎ塾 🔍 で検索!

2020年春、新型コロナウイルスの影響で外出さえ制限される時期を乗り越え、地域活動の場ではどのようにコミュニケーションを図り、活動を維持してきたのでしょうか。

今年度は、「新型コロナウイルス時代のきずなづくり」をテーマに設定、分野別「つなぎ塾トーク」（区内の地域で活動するキーパーソンのインタビューや座談会）を、10月から公開します。

●公開予定●

- 10月：自治会・町内会・地域団体
- 11月：子育て・教育
- 12月：シニアの地域活動支援
- 1月：ビジネス・起業
- 2月：港北区の魅力発信
- 3月：総集編「港北つなぎ塾トーク」

【ご意見・ご質問】港北区 地域振興課 地域力推進担当 Eメール: ko-chikara@city.yokohama.jp
※ 次の項目を明記してお送りください ①ジャンル ②意見または質問 ③氏名 ④所属団体または在住町名

主催：港北区役所・一般社団法人地域インターネット新聞社
お問い合わせ
港北区役所 地域力推進担当 ☎045-540-2247
〒222-0032 横浜市港北区大塚戸町 26-1 FAX:045-540-2245

資料集

KOHOKU
つなぎ塾
トーク

「港北つなぎ塾」の振り返り ― つなぎ塾トークを終えて

今回の「港北つなぎ塾」の取組について、主催の港北区地域振興課地域力推進担当と一般社団法人地域インターネット新聞社で振り返りを行い、今年度の「港北つなぎ塾」の取組についても1つの事例としてトークにご参加いただいた方、本冊子をお読みになった区民のみなさんと共有いたします。

1. はじめに ― 取組の方法について

(1) ホームページでの発信

2020（令和2）年度の「港北つなぎ塾」は、冒頭でも述べましたが、コロナ禍の中でこれまでのように「人を集めた交流会・学習会」を行うことはできない状況でした。

また、1回目の緊急事態宣言（2020年5月）の解除後も「新しい生活様式」が提唱される中で、「港北つなぎ塾」の運営方法についても、「人数を絞って開催」「Zoom（ズーム）を活用したオンライン開催」などを検討しましたが、コロナ禍での地域での取組の停滞状況や、関係づくりへのモチベーション低下を感じる中で、地域活動のスタイルに変化が迫られている「コロナ禍の記録」「地域で起こっていること」「地域の情報発信・共有」といったキーワードで、実際に地域で取り組んでいる方からの話を聞きホームページ（左下画像）で発信する手法としました。

ただし、リアルタイムや動画である必要性はないと判断し、ホームページで文章や画像などの形で情報を共有していく「つなぎ塾トーク」を2020年9月から開始し10月から毎月1分野のペースで配信しました。

(2) 閲覧状況

2020年10月1日に「第1回つなぎ塾トーク」を掲載して以降、「港北つなぎ塾」のホームページ閲覧回数は、2021年3月1日までに延べ9,568回（PV＝ページビュー）、訪問のユーザー数は2,407人と多くの方にみていただきました。

また、つなぎ塾トークに対する個別の質問やご意見はなかったものの、ホームページにアップする際のツイートには多くの「いいね」や「リツイート」での共感がありました。

(3) 課題

コロナ禍で地域での情報発信の取組の記録化とアーカイブ化はホームページで発信し、さらにはこの冊子により区民の多くの方に届けることができました。一方、Eメールを活用し



た意見交流をするまでには至りませんでした。

Twitter（ツイッター）など SNS をもっと活用すればとの意見もありますが、横浜市役所の Twitter 利用は発信のみといった制約の問題もあります。

2. 「つなぎ塾トーク」について

（1） テーマの選定

「新型コロナウイルス時代のきずなづくり」をテーマに、前年に引き続き地域の課題を分類し5つの分野（①自治会・町内会・地域団体、②子育て・教育、③シニアの地域活動支援、④ビジネス・起業、⑤港北区の魅力発信）ごとに区内の地域で実際に活動されている方々による「つなぎ塾トーク」を開催しました。それぞれの分野の概況やコロナ禍の課題については、各分野の「つなぎ塾トーク」の冒頭にまとめました。

（2） つなぎ塾トークの実施

「つなぎ塾トーク」は、リアルな対面での開催です。密にならないよう空間に合わせて人数をしばり、間隔をあけ、時間も1時間30分以内に限定して実施しました。2021年1月の緊急事態宣言下となった第7回の「港北区の魅力発信」は、「Zoom」でのオンライントークとしました。

また、それぞれの分野で現状や対策などを誰に尋ねるか？どんな事例を発信

していただくか？にあたっては、これまでの「港北つなぎ塾」への参加者と、そのつながりを通じて参加を依頼し、23人の方にご協力をいただきました。トークの会場は、参加者の活動の場に近い場で実施としました。

トークの司会は、過去2年の港北つなぎ塾と同様に7回すべて（一社）地域インターネット新聞社の代表・橋本志真子が担いました。トークは自己紹介からはじまり、現状やコロナ禍の対策などを話していただきました。専門用語や略語がでると「中学生にもわかるようにもう一度」と司会からツッコミが入ることも。こういったことも活動を文章で伝えるための工夫の1つです。



（3） 課題

2年前の港北つなぎ塾の冒頭で、「港北区のまちづくりの一番の強みは、多彩な人がたくさんいることです」との発言から始まった3年目の「つなぎ塾トーク」には23人の方に参加していただきました。

今回参加いただいたみなさんに共通している点は、「港北（地域）が好き」ということに加え、「つな

がりの中で活動をすすめたい」という志向を強く持っていることを再確認できました。

港北つなぎ塾の目的も地域の中でのつながりのきっかけづくりにあります。また、行政の地域支援にも示唆が得られるトーク内容でした。

港北区内の地域では多くの団体・組織が活動しています。活動の工夫や課題などをさらに多くの方にお話を聞きたいと感じています。

3. 新型コロナ禍の課題

(1) 新型コロナ禍でのプラスの変化

新型コロナ禍のなか、地域活動の中で確実に伸展したのは「IT ツール」の活用です。

特に、メンバーやスタッフの連絡手段の IT ツール活用と地域情報発信のレベルアップは顕著です。連絡手段としては「メール」や「LINE」の活用、さらには「Zoom」の活用にチャレンジする状況がありました。地域情報の発信では、トークに参加いただいた4つの地縁団体（樽町、菊名北町、高田、大曽根）はそれぞれホームページを持ち、活動が停滞した中でも工夫した情報発信がうかがえました。



2020（令和2）年度の区民まつり「ふるさと港北ふれあいまつり」は初めてオンラインで開き、11月14日には横浜アリーナから生中継も

また、港北区民まつりなどイベントのオンライン開催に伴い、自治会町内会の地区連合による各地区紹介の動画づくりと配信は「コロナ禍でも地域は元気！」と印象付けました。

その他、小・中学校の教育現場からの IT 環境整備報告に、ここまで進んでいるのかと驚きを隠せませんでした。

高齢者が楽しむオンラインでの「えがおまつり」や横浜市市民局が実施する連合町内会役員等を対象とした IT 講座など、高齢者層のスマホの活用の機運も図られました。

テレワークや在宅勤務などの状況は、地域ビジネスや地域を知ってもらう対象となりました。

(2) リアルなつながりの大切さ

一方で、オンラインに対応ができない分野もあります。高齢者の見守り活動や産前産後期の対面での支援の必要性について、第1回（樽町地区）のトークで語っていただきました。

また、第6回の「地域ビジネス」のトークで報告された障害者の有機水耕栽培作業の笑顔の報告などもその1つです。さらに今回はメインのテーマに設定しませんでした。災害対応も重要な地域課題の1つです。

一連のトークの中で、対面のリアルな関係を大切にしていきたいと改めて感じました。

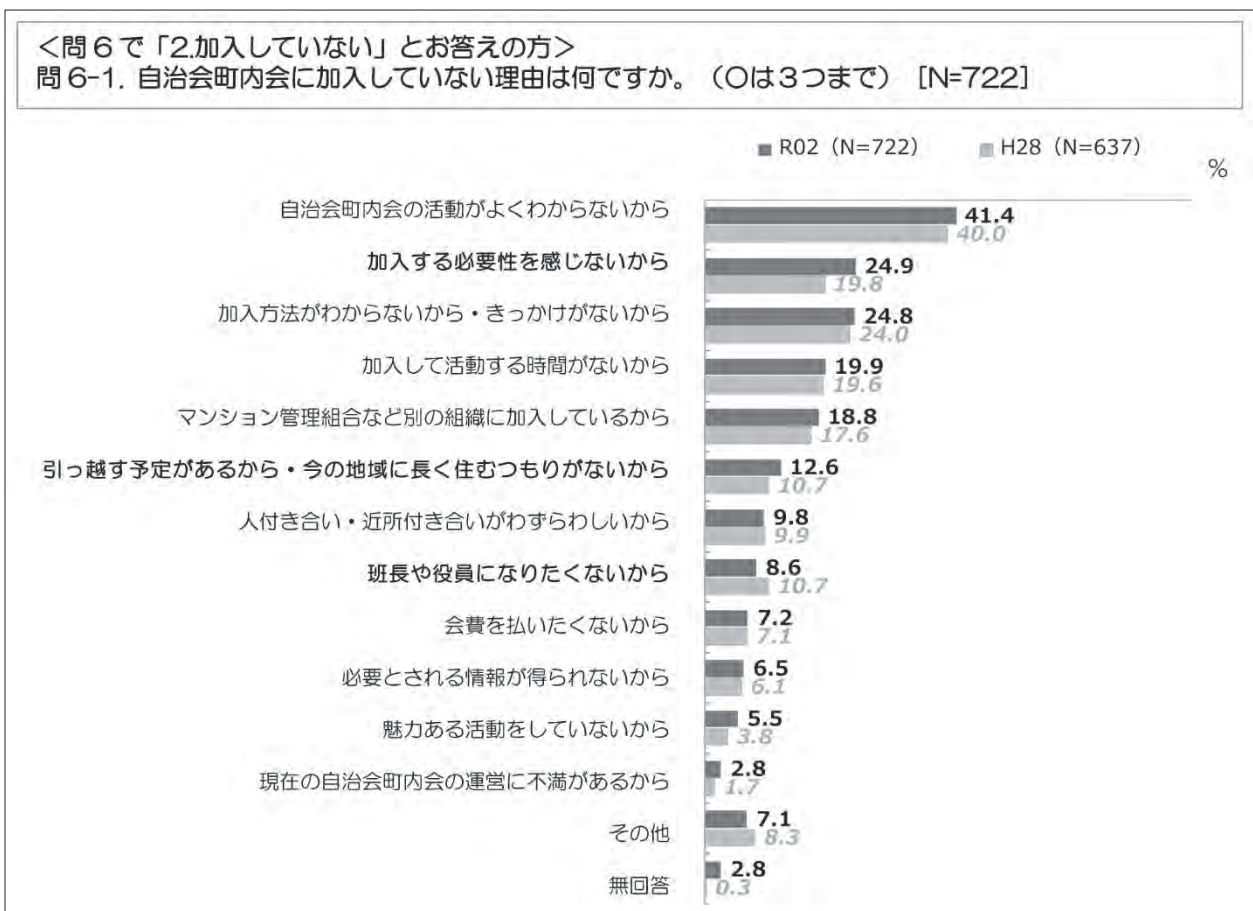
4. 地域の情報発信・共有

(1) 地域の活動の見える化

「自治会町内会の役員のなり手がいない」——、これは自治会町内会の長年の課題です。

同じ人が地域の役職を兼務している状況が樽町地区（第1回）、高田地区（第3回）から報告がありました。

自治会町内会の加入率は横浜市全体で71.2%、港北区で65.5%（2020年4月）と年々通減化傾向にあります。防犯、防災、子育て支援、学童や高齢者の見守りなど地域社会の安全安心は地縁によって支えられており、その中心は自治会町内会です。自治会町内会への加入のメリットをうまく伝えられず、加入に至らないこともあるようです。



令和2年度「港北区区民意識調査」では、自治会・町内会に加入しない理由の最多は「自治会町内会の活動がよくわからないから」（41.4%）だった（同調査結果報告より）

今回のトークでも自治会町内会に関心を持ってもらい、参加してもらおうメッセージを出し続けています。樽町の「防犯パトロール活動」の様子の配信、菊名北町の見える形での連携の模索、高田地区の若い世代に向けた情報発信の検討、ハートフル大曾根の情報発信などです。このような活動の見える化の取組が関心を喚起し、連携を築くヒントになるのではないかと考えています。

(2) 「情報発信」はネットワークづくりの手立て

今回のトークで地域の情報発信は、紙ベースでの各戸配布や回覧をベースにホームページでの発信を行っている連合町内会エリアや単位町内会の例を話していただきました。

その中で、関心を持ってもらうためには自治会町内会情報だけではなく、まちの情報の発信が有効ではないかといった意見もありました。それは、単に住民のホームページ閲覧数を増やすだけではなく、「まち全体の連携のための手立て」としても有効であると思っています。

昨年度の「港北つなぎ塾」の自治会町内会・地域団体のグループの情報発信でも地縁系団体をベースにスポーツ推進委員、青少年指導員、民生委員・児童委員、主任児童委員ほかNPOや地域子育て支援拠点、地域カフェなどの地域情報発信の提案がありました。もちろん行政が発信する生活情報（防災、資源回収など）も地域に対応していくことが課題です。

大きな課題は、その発信までの作業を誰が担うのか？

みんなで学習して複数人で作業したり、詳しい人をお願いしたりと状況はいろいろです。「ボランティアでは厳しい」といった意見や2年前の「港北つなぎ塾」の参加者からは「育休中の方に手伝ってもらっては？」といったアイデアも出されました。

(3) IT ツールのみ社会としてよいのか

IT ツール活用が一般化するにつれ、IT ツールに不慣れな方への手立てはどうするのか？

ホームページの配信による「港北つなぎ塾」、オンラインによる「港北えがおまつり」、「ふるさと港北ふれあいまつり（区民まつり）」の開催。さらには連合町内会役員へのIT講習会の実施などの取組が行われました。

ウィズコロナの社会においてはデジタル化やオンライン化が必然であり、コロナ以前のようにIT弱者が配慮される状況ではなくなる状況もうかがえます。

データやオンラインのみではなく、紙媒体での発信やオフラインを併用し、IT弱者への配慮や対面ならではの効用も再認識していくことも課題となります。

おわりに —— 今後の取組に向けて

コロナの収束が見通せない中ですが、地域のつながりづくりは生活するうえで重要な課題です。

人が感染防止のために距離をとることとつながりを断つこととは全く別の次元であるということを一たび確認した今回の「港北つなぎ塾」でした。

2021（令和3）年度も、開催時期、開催方法等は全く未定ですが、引き続き「地域のつながりづくり」をテーマに開催の予定です。

多くの区民のみなさんが地域の取組に関心をお寄せいただき、その手法について情報交換・情報共有する場の「港北つなぎ塾」にご参加いただければと思います。

2021年3月、運営者一同（港北区役所地域振興課／地域インターネット新聞社）

コロナ禍、この1年

横浜市の「2020年市民が選ぶ横浜10大ニュース」の第1位に「新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐ『新しい生活様式』が広まる——2月にダイヤモンド・プリンセス号の船内で集団感染、4月に緊急事態宣言発令。『3密』の回避や在宅勤務等、生活スタイルが変わる。」が選ばれるなど、私たちの暮らしに大きな影響を及ぼし続けています。

以下、この1年の新型コロナウイルス禍と地域の状況の途中経過です。

1. 新型コロナウイルスとは

新型コロナウイルスとは、どんなウイルスで、どのように感染するのか、現時点での対策の方法について、厚生労働省のホームページで発信している情報からまとめてみました。

(1) 新型コロナウイルスとは？

現在流行している「新型コロナウイルス (SARS-CoV2)」は、コロナウイルスの1つです。他には、一般的な風邪の原因となるウイルスや、サーズ (SARS) ウイルス、2012年以降発生しているマーズ (MERS) ウイルスもあります。

ウイルスは、自分自身で増えることはできませんが、粘膜などの細胞に付着して入り込んで増えることができます。健康な皮膚には入り込むことができず、表面に付着するだけと言われています。表面についたウイルスは時間がたてば壊れてしまいますが、WHO (世界保健機関) は、プラスチックの表面では最大72時間、ボール紙では最大24時間生存するなどとしています。

(2) どのように感染するのか？

新型コロナウイルスは感染力が強く、一般的には飛沫感染、接触感染で感染します。

閉鎖した空間で、近距離で多くの人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがあるとされています。(WHOは、一般に5分間の会話で1回の咳と同じくらいの飛沫(約3,000個)が飛ぶと報告しています)。

「**飛沫感染**」とは：感染者の飛沫(くしゃみ、咳、つばなど)と一緒にウイルスが放出され、他の人がそのウイルスを口や鼻などから吸い込んで感染することを言います。

「**接触感染**」とは：感染者がくしゃみや咳を手で押さえた後、その手で周りの物に触れるとウイルスが付きます。他の方がそれを触るとウイルスが手に付着し、その手で口や鼻を触ることにより粘膜から感染することを言います。

(3) 感染を予防するためには？

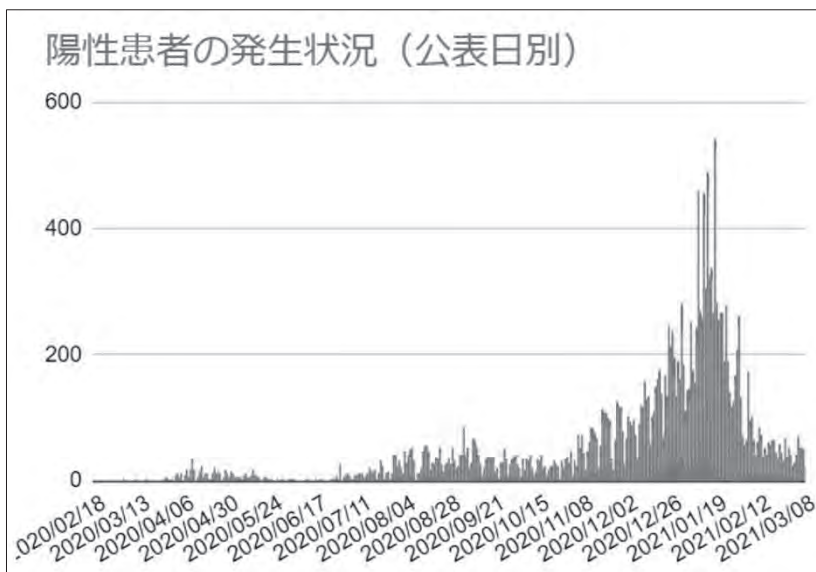
飛沫感染および接触感染を予防するには、人と人との距離をとる、外出時はマスクを着用する、石けんによる手洗いや手指消毒用アルコールによるこまめな消毒をする、家やオフィスの換気を十分にする、

また、免疫力を低下させないために、しっかり栄養をとることや十分な睡眠などで自己の健康管理をしっかりすることも大切です。

(※) 感染の検査（PCR 検査など）、治療薬、ワクチン開発などの医療情報については、厚生労働省がホームページで詳しく発信しています。

2. これまでの経緯

(1) 新型コロナウイルスの感染状況



横浜市内における感染者（陽性患者）の推移、1人目は2020年2月18日に判明し、その後1年以上かけて2万人を突破した。1日あたりの最多は2021年1月18日の542人（2021年3月8日、市ホームページより）

一度目に発出された2020年4月～5月の緊急事態宣言（48日間）より長い70日間以上となりました。

(2) 感染対策と市民生活の状況

新型コロナウイルスがやっかいなのは、これまでの人と人とのコミュニケーションをネガティブにとらえてしまうことです。飛沫感染や接触感染による感染拡大を防ぐために、握手やハグはNG、近距離での世間話や長時間の会話もNG、笑顔もマスクで半減。これまでのコミュニケーション手段に制約がかかり、制限のあるコミュニケーションを日常生活に定着させ、持続させていくことが求められています。それを「新しい生活様式」と呼び、政府が提唱しています。

具体的には家庭、ご近所・地域（マンション、自治会町内会など）、学校、職場、通学、通勤、飲食、店舗、イベント、遊びの場などに対し、行政からの要請や規制を定める法の整備がすすめられ、市民のコンセンサスを得ながら、態度やしぐさ、取組の変容をすすめているところです。

次のページから新型コロナウイルスに関する全国・横浜市内・港北区の状況を時系列でまとめてみました。

新型コロナウイルスに関連する全国・横浜市内・港北区の動き

【2020=令和2年】

- ・ 1月28日：政府が新型コロナウイルスを指定感染症法に基づく「指定感染症」に指定
- ・ 2月上旬：横浜港に停泊中のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」号で乗客などが集団感染
- ・ 2月20日：政府がイベント主催者に対し、開催の必要性を改めて検討するよう求める。港北区内でも同日以降、ほとんどのイベントが中止・延期に
- ・ 2月21日：横浜市内で新型コロナウイルスに感染した患者が発生したと市が公表（市内1人目）
- ・ 3月3日～5月末日：政府が全国の学校に対し、3月2日以降の臨時休校を要請したことに対応し、横浜市立学校が一斉臨時休校
 - （※）ただし、保育所や放課後児童クラブは開所。放課後キッズクラブ、はまっこふれあいスクールは留守家庭児童等の受け入れのみ実施
- ・ 3月3日～5月末日：横浜市内の地区センター、地域ケアプラザなど市民向け公共施設が休館
- ・ 3月19日：港北区連合町内会定例会（区連会）が初の書面開催となり、4月、5月定例会も書面開催に。市域、区域共通の回覧の依頼もストップ
- ・ 3月中旬：春のセンバツ高校野球をはじめ国内のスポーツイベントは相次ぎ中止
- ・ 3月24日：「東京2020オリンピック・パラリンピック」の開催延期を決定
- ・ 4月1日：マスク不足を受け、政府が「布マスク」2枚を全戸に配布する方針を表明
- ・ 4月1日：港北区内で26校目となる「市立箕輪小学校」が箕輪町2丁目に開校、4月6日に短時間の入学式を実施
- ・ 4月7日：政府が7都県に「緊急事態宣言」を発出（16日以降は全国に拡大）
- ・ 4月20日：1人10万円の「特別定額給付金」の支給を政府が決定
- ・ 5月20日：夏の全国高校野球 戦後初の中止決定
- ・ 5月25日：政府が緊急事態の解除宣言
- ・ 5月29日：港北区長名で自治会町内会および地域のチカラ応援事業補助団体あて「緊急事態宣言後の地域活動について（依頼）」を送付し「三密を避け必要な感染対策を講じること」「新しい生活様式」について協力依頼
- ・ 6月1日：市立学校は「分散登校」「短時間授業」を実施するなど、段階的に再開
 - （※）夏休みは、8/3～16の2週間に短縮
- ・ 7月22日：全国で観光需要を喚起する「Go To Travel」キャンペーン始まる
- ・ 8月11日：世界の感染者が2,000万人を超える
- ・ 9月8日：樽町を皮切りに「つなぎ塾トーク」の収録を区内6か所で12月まで実施（2021年1月の7回目のみオンライン収録）
- ・ 10月1日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第1回 樽町のみなさん」配信
- ・ 10月8日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第2回 菊名北町の今」配信
- ・ 10月15日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第3回 高田のみなさん」配信
- ・ 11月3日～23日：区民まつり「ふるさと港北ふれあいまつり」を初めてオンラインで開催、14日には横浜アリーナから生中継映像を配信
- ・ 11月4日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第4回 子育て支援・教育現場のみなさん」配信
- ・ 11月10日：政府分科会が緊急提言「北海道など各地で感染者が増えている状況などから適切な対

応がない場合は急速な感染拡大の可能性も」

- ・ 11月14日～12月6日：区内商店街で「こうほくの商店街 ちょいより散歩」開催
 - ・ 11月21日：港北芸術祭「秋の調べ ヴァイオリン・フルート・ピアノによる独奏と室内楽」を慶應義塾大学日吉キャンパス内協生館「藤原洋記念ホール」にて定員を絞って開催
 - ・ 12月8日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第5回 シニアの地域活動支援を行うみなさん」（11月収録分）配信
 - ・ 12月15日：「GoToトラベルキャンペーン」を全国で一時停止
 - ・ 12月21日：港北区長「年末年始に向けて、感染防止対策の徹底を」と題したメッセージをホームページで発信
- (※)「港北区では、11月以降、陽性患者数が急増しており、11月6日から12月17日までの間で367人増加し、累計では716人となっています。12月4日からの2週間だけでも、148人増となっており、勢いが収まる傾向が見えません」と報告
- ・ 12月31日：新型コロナウイルス、全国で1日4,520人の感染確認は過去最多

【2021＝令和3年】

- ・ 1月2日：1都3県の知事が政府に「緊急事態宣言」発出の検討を要請
 - ・ 1月7日：政府が1都3県に緊急事態宣言を発出
- (※)内容は「外出自粛、特に20時以降の外出自粛」「飲食店の営業時間短縮要請」「イベントの開催制限（収容率50%未満、5,000人以下）」「テレワークの徹底等出勤者の7割削減」。ただし、学校の休校、公共施設の休館は実施せず
- ・ 1月11日：横浜アリーナとパシフィコ横浜ノースの2カ所で計8回の「横浜市成人式」を分散開催、新成人の参加率は41.5%に
 - ・ 1月20日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第6回 港北区で地域ビジネスに携わるみなさん」（12月収録分）を配信
 - ・ 1月23日：新型コロナウイルスの死者が全国で5,000人を超える
 - ・ 1月27日：世界の感染者が1億人を超える
 - ・ 2月2日：政府が首都圏の「緊急事態宣言」について3月7日までの延長を決定
 - ・ 2月3日：新型コロナウイルス対策の実効性を高めるため、新たに罰則を導入する「改正特別措置法」と「改正感染症法」が国会で成立
 - ・ 2月15日：港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク第7回 港北区の魅力発信に携わるみなさん」（1月オンライン収録分）配信
 - ・ 3月4日：政府が首都圏の「緊急事態宣言」について3月21日まで再度の延長を決定
 - ・ 3月15日～28日：港北芸術祭「第16回港北美術展」がオンライン開催予定

(データは2021年3月8日時点)

港北つなぎ塾「つなぎ塾トーク」記録集

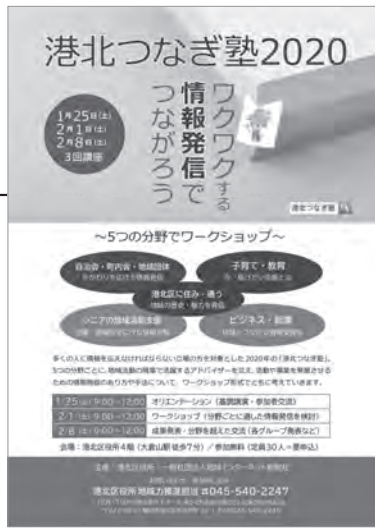
発行日：2021(令和3)年3月25日

編集・発行：港北区役所地域振興課／一般社団法人地域インターネット新聞社

〒222-0002 横浜市港北区大豆戸町26-1

電話：045-540-2247／Fax：045-540-2245

Eメール：ko-chikara@city.yokohama.jp



港北つなぎ塾の開催記録 (2015~19)

2019 (令和元) 年度

開催日：2020年1月25日・2月1日・8日 開催場所：港北区役所

開催内容：「共通テーマ：ワクワクする情報発信でつながろう」「自治会・町内会・地域団体」「子育て・教育」「シニアの地域活動支援」「ビジネス・起業分野」「港北区の魅力発信」の各グループによるワークショップ・発表、「講演：港北区での『情報伝達』の現状」

登壇者：一般社団法人地域インターネット新聞社代表理事：橋本志真子氏、同社編集長：西村健太郎氏、樽町連合町内会会長：小泉亨氏、地域交流拠点「よってこしもだ」運営参画：黒須悟士氏、NPO法人街カフェ大倉山ミエル理事長：鈴木智香子氏、城南信用金庫綱島支店長：佐藤岳道氏、公益財団法人大倉精神文化研究所所長：平井誠二氏

2018 (平成30) 年度

開催日：2019年2月9日・23日・3月2日 開催場所：港北区役所

開催内容：「スマホから始める新たな『地域づくり』」「地域でゆるやかなつながりを生み出す方法」「IT時代の情報発信術」「インターネット発信の成功事例」「初心者でも簡単！Jimdo（ジンドウ）でホームページ開設～導入編」「港北区ツイッターでの情報発信と運用について」

登壇者：一般社団法人地域インターネット新聞社代表理事：橋本志真子氏、同社編集長：西村健太郎氏、樽町連合町内会、岸根町町内会など「岸根WEB運営委員会」、綱島商店街連合会、NPO法人ポケット「親と子のつどいの広場『ともども』」、ウーマンネットアカデミー&コンサルティング代表：丸山恵子氏、港北区区政推進課：小高博之氏



2017 (平成29) 年度

開催日：2017年10月15日・28日・11月11日

開催場所：港北区役所

開催内容：「基調講演：今のまちこれからのまち」「事例発表とグループワーク：課題解決の事例から学ぶ」「グループワーク：活動プランを考える」

登壇者：株式会社地域計画研究所代表・横浜市まちづくりコーディネーター：内海宏氏、コミュニティハウス「ホットカフェ」：野澤和子氏、多世代の居場所づくり「まちの縁側新吉田」：稲垣弘子氏、もう一つのおうち「COCOしのはら」：戸松綾子氏



2016 (平成28) 年度

開催日：2016年10月1日・15日・11月5日・12日 開催場所：港北区役所

開催内容：「基調講演：港北の今とこれから」「ワークショップ：課題解決の事例に学ぶ」「活動団体と交流：いろいろな団体とつながろう」「グループワーク：活動プランを考えよう」

登壇者：株式会社地域計画研究所代表・横浜市まちづくりコーディネーター：内海宏氏、参画はぐくみ工房代表兼ファシリテーター：竹迫和代氏、「みんなの居場所ふらっと高田」、「こどもの本のみせともだち」、「ボランティアグループもみじの会」



2015 (平成27) 年度

開催日：2015年12月6日・13日・2016年

1月24日

開催場所：港北区役所

開催内容：「居場所づくり」「つながりづくり」「魅力づくり」の3つをテーマに事例を紹介

登壇者：株式会社地域計画研究所代表・横浜市まちづくりコーディネーター：内海宏氏、参画はぐくみ工房代表兼ファシリテーター：竹迫和代氏、「えんがわの家よってこしもだ」、横浜エコビレッジプロジェクト、菊名の未来を考える会



